
お気楽転生ライフ

長靴を脱いだ猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お気楽転生ライフ

【Nコード】

N6162R

【作者名】

長靴を脱いだ猫

【あらすじ】

多分、どこにでもいる日本人の無動神流はひよんな事からその命を失い、気が付けば体が縮んでしまっていた!?しかもその世界は自分が知るドラゴンボールの世界のようで。迫りくる死亡フラグと未来の巨悪に立ち向かう為、人類の平和のため、彼女はお気楽に戦うのだっ！（現在、更新凍結中。 今年中に復活の見通し）

前書き「この小説を読む前に」

この小説を読む前に以下をご覧ください。

この作品に埋まっているであろう地雷、不発弾の類を一覧にしたものです。

見切り発車

オリジナルチート主人公

主人公最強

百合、GL表現

TS

キャラ変更、魔改造

原作変更、崩壊

独自設定、解釈

ご都合主義

更新不定期

厨二病的文章

誤字脱字、言葉の誤用に定評のある作者

以上がこの作品を構成するであろう要素です。お読みになる際は十分にお気をつけて。

誤字脱字、言葉の誤用、明らかにおかしい設定など、掘り起こされた地雷を見つけてしまった方は感想か何かで教えてください。で

きる限り迅速に撤去、処理致します。

000 | 転生

おはこんばんちわ、はじめまして新しい世界。元日本人の、無動むどう神流かんなと申します。

なんで元かっていうと、日本が占領されてエリアなんとかに改名なんてことは無く。死んで、転生したっばい。

ぶっちゃけ、神様にあったり閻魔様にあつた記憶はないけど、転生トラックには覚えがあるんだな、これが。

そんな訳で、現在はサイヤ人の女として生を受けてアニスとの名前をもらい、生まれた時から戦闘力1000と言うことで多大なる期待がこの双肩に。ブローリーみたいに殺されなきゃいいんだけどもエイジ730生まれ。現在はサイヤ人がツフル人の技術をモノにして宇宙進出、異星人への戦力提供って辺り。それも十分に顧客のついた時期。

いや、ドラゴンボールファンでよかった。にわかだけど。

何故、こんなことになったのか。

そりゃあもう語るも涙、聞くも涙のお話。

と言う訳で回想VTR、いってみよー。

「危ない！」

「えっ……」

ドーン、キキキキイ、ガッシャーン。

まあ、前方不注意で轢かれかけた恋人を庇おうとして、結局は間に合わず一緒に轢かれた大間抜け。転生ものとかだったら大体助けられるんだけどね。そんなご都合主義は私にはなかったようでは

っはっは。

保育器の中漏れ聞こえる会話を聞くにどうやら、他星には送り込みだりせずにこの星で戦闘訓練を受けてから派遣するという形になるらしい。良かった、謀殺されないで済むらしい。

ただ、一つ言わせてもらいたい。

あと七年で、独り立ち（惑星からの脱出、もしくは他星侵略）とか無茶振りすぎるんじゃない！？（エイジ歴737年、惑星ベジータ消滅の年）

キング クリムゾン！

エイジ歴735

私が生まれてから5年が経過した。

5歳になるまでは鍛錬と実戦と献策の繰り返し。時折、ベジータ王とチェスで一手交えたりはしたものの、遊びというものは殆ど無かった。

だけれど、そのお蔭で私の戦闘力は既に下級戦士としては破格の5000を超えていたりする。実際に前線に立ったのは2回だけと言うこともあって、経験不足は否めないもののそれでも年齢を考えれば十分だろう。

また、日本での知識や記憶は大きく役立つこととなった。特に、幼稚園の頃から続けている八極拳。ついでに言えば、近所のお姉さんが教えてくれた合気道と柔道、日本拳法の基本なんかも。

そして、ほかのサイヤ人とは違う、転生者としての知識と記憶、そして日本人としての考え方。それは、ベジータ王が考える戦略やそれによって構築される戦術の重要性を理解する事が出来た。

だからこそ、私はベジータ王に重用されているし、ある程度は許可のない進言も許されている。

5歳になった私が進言したのは、惑星旅行。せつかくこんな世界に来たわけだから、様々な惑星を渡り歩き、観光をしたかった。この先万が一死なないとも限らない。その思い出作りも兼ねていたりする。

ついでに言えば、その死因候補の一つ。最近サイヤ人の陣営がフリーザ恭順派とフリーザ反発派に分かれ始めており、その内乱に巻き込まれなくなかったというのもある。

ただでは行かせてもらえなかったに違いないだろうけど、私はベジータ王に、近々攻め入る予定のミート星、カナッサ星での戦略及び戦術方針を纏め、内乱を速やかに鎮圧するための情報もいくつか渡し、ビームガン及びビームキャノンの改造試案を提出しておいた。ベジータ王はニコニコ笑顔で許可を出してくれた。

計画通り。

と言っ訳で行ってきます。

001 | カナツサ星をよくカノツサと間違える

私が旅行に使用するのは、私専用高速艇【night knight】。ポッドのような形ではなく、F1レースで使われるような流線型で 言うなればそれいけヤマモトヨークのアレに近い。

基本装備は迎撃用のビームキャノンに多目的用アンカー、作業用アーム。

基本宇宙空間での運用が想定されている為に、有視界戦闘用に改修が施されており、電波妨害装置を装備し、黒を基調とした色で塗られている。

まあ、これはある事を考えて改造してもらった特注品。幸い、鹵獲されていた小型船を改造しただけで、その格闘能力、ステルス性能と機動力を除けば現在のサイヤ人の科学力で作る宇宙船に大きく劣る為、お金もそうかからなかった。

私は、高速艇を飛ばし、カナツサ星へと向かう。私の記憶が正しければ、そこにはエネルギー もとい、超能力を得られるエネルギーと言うものが存在していたはず。

それを手にし、力と出来れば私の戦術に大きな幅が生まれる。

さて、そんな訳で、やって来ましたカナツサ星。音声認識、座標指定、自動操縦とか楽なもんだ。

やあ、アニスだ。

とりあえず、お茶でも飲んで落ち着いてほしい。

(^^^)_|旦

うん、またキングクリムゾンなんだ。済まない。

だが、これには深い訳があるんだ。いやマジで。

カナツサ星つてさ、元ネタ魚だよな？魚人だったよな？

実はさ、見た限り 全員インスマウス面だったんだ。

ク ルフ（検閲済み）じゃないけどなんか邪神ぽいの信仰してた。儀式に参加させられて死にたくなるくらいおぞましかった。

私のSAN値がガリガリと削られていったわけですよ。物凄い勢いで。

この分だとミート星とか全員蠢く肉塊とかないよね？ないよね！？

そして、生臭い。陸上生活してるくせに日に当てられた生魚の臭いをまき散らしてた。

この星の制圧を止めるように進言するべきだろうか。

ついでに言えばネタ臭も満載な人間（人間？）が多かった。

「届け、私のナマツメスプラッシュユー！！」

ハーガスさん乙。

「サイヤ人の方、ゆっくりしていただくサイヤ」

晩御飯はマミヤさんのあんこう鍋だった。

「私の電気は300万V〜！」

ナカイさん、蒲焼おいしかったです。

超能力の覚醒？ してませんが何か。

一応、エネルギー もといそれによく似た何かには触らせてもらったけど、覚醒した気はしない。腕も目も疼かないし、羽が生えたり足が蹄になったりもしてない。

ちよつとがっくりきたところでこれ以上SAN値削られると不味い気がして、一晩泊めて貰っただけで出発することにした。

ああ 窓に！窓に！

窓に張り付いていた魚人的な何かを吹き飛ばした後、半月ほど当ても無く彷徨いながら、色々な星を廻っていた。リアル田舎に泊まるう的なイベントとかも発生し、時にはうちの息子の嫁に！とか誘われたこともある。まだ五歳なんですけど私。三十三歳の青年を紹介されても困る。

まあ、それはいつか語るか自伝小説にしてみるとして。

カナツサ星で超能力の習得に失敗したものの、代わりに、いくつかの能力を習得することに成功した。

まず、瞬間移動。旅先に観光に来ていたヤードラット星人に教えてもらった。この時、気を探る事が出来ないと話にならないため、気を探る事も出来るようになった。元々練習してはいたけど、想像と一人稽古じゃ全く上達しなかつたのでこれは有難い。

お次は再生能力。ピッコロさん達が切られた腕を元に戻したりするアレ。だけど、その種族特有の自己再生能力ではなく、気を使って腕を再生するだけの技。それを通りがかりの宇宙人 多分、原作やアニメのアップル及びオーレンとかと同じ種族に教えて貰えた。最後に気の性質変化。これは誰かに教えてもらったというよりは気づけば出来るようになっていた。気を炎や電気と言ったものに変化させると言うもの。

パイクーハン辺りが使っていた気がする。無駄に洗練された無駄のない無駄な動きで有名なサンダーフラッシュとか。

そして、同時に戦闘力も7000を突破し、今までは弱点だった尻尾も鍛え上げて、第三の腕の様に器用に扱えるようになった。

後一年半程 その間に私が求めるものを手に入れられれば御の字。

それは取らぬ狸の皮算用。

だから、無ければ無いでやりようはある。

おっ、どう転ぶか。

002 | 原作開始までもちっとだけかかるんじゃ

私は、どうやらついているらしい。私が求めていた惑星が見つかった。様々な惑星を探索し、9か月が経過したが、その星を見つけることが出来た。

その星の名は 惑星ジューズ。スカウターで計測できた最高戦闘力は3787。平均戦闘力300程度の弱小民族だ。

ちなみに、スカウターの通信能力は切つてある。この星の事を知られる心配はない。

「……へえ、私を倒すつて？」

「ああ、その容姿から察するにサイヤ人なのだろう。そのような危険分子を放置するわけにはいかない。ここで倒させてもらう」

降り立った私を出迎えたのは、その戦闘力3787と他の戦闘タ
イプと見られる方々。全部で二十人くらい。平均戦闘力は3000程。人間とそう変わらない容姿だけど、耳が尖り、肌の色が緑とか青とか黒で、なんか物凄い前衛 変態的な【裸ネクタイ】に酷似した服装という特徴がある。スカウターらしきものをつけてはいるが、形状が前衛的なのは変わらないようだった。とは言つても、これは日本人的感覚の抜けない私の意見であつて、宇宙においてはそこまで珍しくも無いんだけど。

「ふう」

他の原作やアニメのキャラとは違い、私は静かに呼吸して気を高める派だ。瞬間的に高めるとかならともかく、高めるたびに叫んでられない。（喉的にも精神的にも）

「な……戦闘力7500だと!？」

「ま、まだ上がるのか!？」

「というか、黒いし怖い!」

当然ながら、慄く方々。

その中に混じっていた悲痛な声の理由は私の気が黒いからだろう。

それもどこの魔王だよと言いたくなるぐらい禍々しい漆黒だ。闇色と言ひ換えてもいい。

「 9853……さて、誰からかかってくる? 」

「 ずえあ! 」

まず突っ込んだできたのは、戦闘力3787の青年。瞬間的に気を高めたのか、実力を隠していたのかスカウターには戦闘力5834と映し出されている。

「 はっ! 」

真正面から直突きで迎え撃つ。

「 っ! ? ……げほっ! かはっ! 」

狙ったから当然ともいえるのだが、内臓を傷つけたらしい。飛び退くと同時に青年は血を吐きだした。実際そこまでの量でもないのだが、異物と言うものは生物の肉体に大きな作用を与えるものだ。

麦茶だと思ったらめんつゆだった時の反応が結構わかりやすいたとえだと思う。あれはやばい。或いはジューズだと思ったらチューハイだった時とか。

「 まだまだ……だね 」

腰が引けたその戦士たちに見せつける様にして左手に気を集めそれを解放した。

「 トラップシューター! 」

五十程に分裂した小さな気弾は嵐の様に輝いて彼らを襲う。当然ながら威力は低いが、殆どに着弾したらしい。重傷を負ってはいないが、それでもそれなりのダメージは通つたらしい。何人かは吹き飛び、倒れ伏してそのまま動かない。

「 さて、これで戦闘力の差は分かったかな? 」

「 仕方ない……これだけは使いたくなかったが 」

そついう青年に嫌な予感を覚え、私は小さく気弾を集め始める。

「 シェル 」

その行動に危機感を覚えたか、焦った様なリーダー格の青年が構えたのは銃 恐らくはビームガン。

ゾクリ、と背中が粟立った。

「喰らえっ！！」

引き金が引かれ、そこから飛び出したのは眩い光線。それに当たれば私は間違いなく死ぬだろう。

けれど、私はそれを受けてない。

「……ブリッド」

瞬間移動。

背後に回った私に周りの人間が気づき、一瞬遅れて青年も気づいた。瞬間にその腹部にエネルギー弾を叩きつける。

青年は吹き飛び、少しして気弾が膨張 爆発。

無論手加減はしたから死んでない。

「さて、まだやる？」

誰もかかってこない。

それで、久しぶりの実戦は終わりを告げたのだった。

002 | 原作開始までもちっとだけかかるんじゃない (後書き)

長期間フラグとか言っちゃいけない。

003 | 惑星ジューズの科学力は宇宙一イイ！！

あれから、私は奇襲を仕掛けようとした数人をぶちのめ 対話
で諷めることに成功し、惑星ジューズと個人的な技術提供を受け、
友好を結ぶことに成功した。

私が求めていたもの ツフル星人やサイヤ人を超える圧倒的な
科学力。

惑星ジューズはそれを有していた。

まず頼んだのは【night knight】の強化改造。

外見はそのまま好きにやってくださいと言ったらエライことにな
った。

動力部を大幅に改造、今までと使用する燃料は変わらないけれど、
気を燃料とすることもできるようになり、出力が跳ね上り、機構も
複雑化した。一応マニュアルをもらっておいた。データの方もある
けど、そっちも容量が結構大きい。どう考えてもマニュアルの量じ
やない。面倒くさそうだったからこの星の人間を修理に呼べるよう
通信機器にもちよつと手を加えて貰った。

装甲材質と構造を変更。並みの攻撃では傷一つつかないらしい。

一応全力で攻撃してみたけれど、確かにどうと言うことは無かった。
流石ゴツ だ。何ともないぜ。

武装のビームキャノンが強化されて数が二門になった。威力的には
片方だけで 開発当時の私の全力エネルギー弾の倍程度。ただ、
名称がビームキャノンじゃなくてビームマシンガンらしいと聞いて
え、連射可能？と驚いたのは記憶に新しい。

多目的用アンカーのワイヤー強度とかが強化されて、作業用アーム
も大雑把な作業と格闘専用のもの、精密作業用と分けて強化された。
後、良く分からないけど、エネルギーシールドが張れるらしい。た
だし、展開時は機動力がわずかに落ち、攻撃も出来ないと言われた。

出来たら困る。

因みに、電波妨害装置も強化されて、範囲と効果が大きくなった。とはいえこちらはいろいろな関係上そこまで強化していないし、する必要もないらしい。

そして、船内に作ってもらったのが重力力場発生装置搭載型鍛錬場。惑星ベジータには存在しない技術なので、早めに作っておいてもらわないと時期が悟空やベジータと被る。悟空みたいな主人公補正も無い私は間違いなく置いてかれる。

因みに、重力を1倍から200倍まで選択できる優れもの。ちよつと選択を間違ったような気はするものの、いくら私が下級戦士の出だとしても、ベジータだって300倍の重力の中で修行していたんだから、200倍くらいどうにかなるに違いない。

まあ、ほかにも細々と改造をしてくれたりしいけど、良く分からなかったのでこれもマニュアルをもらっておいた。勿論読んではいない。

代わりに私は半年ほど、惑星ジユースで暮らすことになった。【night knight】の改造期間と言つこともあるけれど、対価として私の気を差し出すことになった。

私が気を分け与え、それで彼らの生活が楽になるというだから凄いものだ。一緒に暮らしたり、子供と一緒に遊んだり。

時には、この戦士や戦士志望の子供たちを鍛えて、戦い方を教えたり。ただし八極拳は教えてない。簡単に体の鍛え方からサイヤ人として身に着けた戦い方 気を放出する方法や気を探る方法、爆発的に高める方法なんかを教えた。

後、その生活の中でバトルジャケットに関しても提供し、それに近いものを開発した。見た目はバーダックの様な肩当の無いものが主流らしい。

私は、白いシャツと黒いズボンのセットを、十着ほど作ってもらった。下着も同じ材質で作ってもらい、ついでにアンダーウェアもい

くつか作ってもらった。

そして、気付けばジューズの戦士の53名の戦闘力が5000を超えた。3787の青年は才能があったのか約14000にまで跳ね上がった。戦士として数えられる存在は74名。最弱でも5000を超えてしまった。

もしかしたらウイングさんよろしくとんでもないのを育成しちゃったのかもしれない。戦闘民族みたいな反則的な特性は備えていないけれど、才能に溢れた彼らが今まで大した事の無い戦闘力だったのはビームガンに頼りきりだったからだろう。

あのビームガン。実は原作で地球に来た当時のベジータ位なら倒せるかもしれない程の威力を秘めているのだ。たった一丁で。

当然ながら弾数は多くないが、戦士全員がそれを携帯しているのだから恐ろしい。

しかも最近では、少しずつではあるもののその威力や弾数も増加した改造版が量産されつつある。

「おい、アニスちゃん。俺の必殺技見ててくれよ？」

「うん、頑張れー」

ま、一番怖いのは私がまだ六歳と言うことだ。転生者だからっていくらなんでも、上手くいきすぎてる気がする。なんかしつぺ返しがないやいいけどね。

チートだチート。

そんな某高校生のつぶやきが聞こえた気がした。

ジューズに定住しないかと言う魅力的な提案を振り切って、私は惑星ベジータに帰還することになった。何が魅力的って、平和的な

民族だし、無駄に戦う必要はないわ、機械が発達してるせいか生活は楽だわ、娯楽は沢山あるわ、景色は綺麗だ、住民の皆は見た目変態だったけど心優しくったり。そして、一週間でサイヤ人のあのゴツゴツの髪が艶々のサラッサラになるシャンプーンスセットと肌がきめ細やかになるボディソープ。今では私の髪は背中を覆うほどの長さになってるけれど、絡まないし枝毛もない。ついでに肌も艶々だ。化粧いらず、お手入れいらずって世の女性をなめてるのかと言いたくなる。どれだけ私がこの髪の手入れにてこずった事かとりあえず二年分積んでおいた。まあ、瞬間移動でいつでも行けるんですけどね？

元々、通常航行でポッドの2倍近い速度を誇っていた高速艇の出力は異常なまでに増して、信じられない速さだった。サラマンダーよりはや　ゴホン。

行きは7か月近くかかった距離を二か月と少しで踏破し。実際は、ある程度近づいてから、行った時とほぼ同じ速度で帰ってきたので二か月程だけだ。

内乱鎮圧における献策及び、ミート星力ナツサ星侵攻時の献策、ビームガン、ビームカノンの改造成功なんかの功績により、私はいろいろと褒賞をもらうことになった。

「……不満？」

「いや、別に……」

部屋には私と、まだ年若いパラガス。そしてその腕に抱かれたブローリーとその妹ブローリーが住むことになっている。原作　というか劇場版においてブローリーに妹がいたなんて言う話は聞いたことが無いが、実際にいるわけだし仕方ない。

ブローリーの方は私が抱いている。パラガスが抱くと泣くのだ。頑張れおやじ。

褒賞というか立てた手柄で、殺されかけたパラガスとブロリーを救い 処刑光線からは救えなかったが 私はパラガスの養子でブロリー、リーフの義姉となった。その際、別に養子じゃなくともとか、ベジータ王にこっちの養子じゃダメなのかとか、それならベジータの嫁にとか言われたが、ベジータの姉、特に嫁とか御免こうむる。確実に原作の流れが崩壊する。

だが、それから僅かに十日後。フリーザへの反乱が勃発。どっかで日数調整間違えたっばい。或いは原作乖離か。

まあ、どっちでもやることは変わらない。ベジータ王がフリーザの宇宙船襲撃を実行し、バーダックが特攻かける前に私たちは脱出することにした。

【n i g h t k n i g h t】の出番ですね。分かります。

004 | ダイジェストでお送りいたします

私は、再び惑星ジューズを訪れていた。まさかこんなにも早く帰ってくることになるとは思わなかったが、皆は歓迎してくれた。不覚にも少し泣きそうになった。

パラガスとブロリーを見て夫を連れてきたということは永住してくれるのか、とか言われたので叩きのめした。せめて父にしろ。

その後、少し事情を話し、この星で住まわせてほしいと頼み込むと快く私達の家を作ってくれた。

「お前は一体何をしたんだ」

とかなんとかパラガスが言ってきたが、軽く無視しておいた。

そして再びキングクリームゾン！

エイジ742

ジューズで暮らし始めて、5年の月日が流れた。私は12歳になり、ブロリーとリーフは5歳になった。今の所、原作での面影はまったくない素直でいい子に育っている。

ジューズの皆と一緒に遊んだり修行したりしているブロリーは、非常に楽しそうだ。物凄く可愛く微笑ましい。これが弟萌えか……！

リーフはそんなブロリーと一緒に遊んでいて、それを眺めて和むことも多いが、何かがおかしい。素直でいい子、尚且つ大人しいんだけど 大人しすぎる気がしないでもない。

後、パラガスから聞いた話だと、ブロリー以上の戦闘力を持って生まれてきたらしい。生まれた時から戦闘力20000超えとかそれなんてチート。

ジューズの少年少女は私の指導の下、強くなる為に頑張っています。ただし、大人達は自主鍛錬。

そんな私はようやく47倍の重力に慣れた所。そう考えると10

0倍にあの短期間で慣れた悟空って化け物かなにかじゃないのかと思ってしまう。何が最下級戦士だ、畜生。こっちは下級戦士出とはいえ素質はエリート中のエリートなのに。

主人公補正とかチートと同義語だろ。

そしてこの五年の間に何処かから技術提供があつたらしく、限界が250倍まで上げられるように改良してもらったのだけど、早まった気がしてならない。

後、何故か力の制御が利き難くなってきたので、戦闘力を抑えるアイテムを開発してもらった。首輪型にした理由は単純に取り外ししやすいから。ネックレスとか怖くて扱えない。

ついでに髪を纏める為のゴムも戦闘力を抑えるためのアイテムにしてもらった。ポニーテールっていいよね！

エイジ747

そして5年の月日が流れた。私は17歳。ブロリー、リーフは10歳になりました。ブロリーが9歳の頃、友達が自分を庇って死にかけた時に超サイヤ人に覚醒、気を分け与えて回復させることを覚えさせたらしい。クウラ戦の悟空ですね、わかります。

自意識でできるのはまだ通常の超サイヤ人だけでまだ真の覚醒はしてない。それでも十分だと思っけど。

リーフは、同時期に超サイヤ人に普通になった。本人いわく「なんとなく出来た」らしい。

そして、私と同じ転生者の日本人であることが発覚している。通りでサイヤ人にしては大人しいし賢いわけだよ。

後、リーフの気は白色だった。もしかしたら転生者だから と思っっていたけれどどうやら私の黒は個人的なものらしい。

ジューズの平均戦闘力が30000を超えた。この星最強の彼は戦闘力60000を超えているのだけど、私はおるかブロリーやリーフに（あっさり）負けて少し落ち込んでいる。ちなみにパラガスの戦闘力も45000に達した。何このインフレ。まだ原作始まって

ないんだけど。

私は、ようやく80倍に耐えられるようになってきた。戦闘力も設置型スカウターを破壊するまでになった。つまり、100万以上は確実かな。もうフリーザ（ただし、第1形態に限る）とか怖くもなるともない。でもクウラ（通常形態）は怖い。ふしぎ！

エイジ752

そして5年の時が過ぎ、ブロリーは15を迎えた。穏やかな性格ながらもそれなりに元気のいい青年になり、家族思いなところを見せることも多く性格に原作の面影は殆ど無い。既に身長は170を超え、伝説の超サイヤ人状態にもなれるようになったが、どうやらある程度は制御下におけるらしい。原作より戦闘力も高いに違いない。

それでもまだ私には敵わないと言ってくれる辺りが姉として嬉し
いような悔しいような複雑な気持ちだ。

リーフも15を迎え、大人しい性格の美少女に成長した。身長は私よりも少し上で168。今では超サイヤ人でも完全に平静を保つていられるらしく超サイヤ人を超えた超サイヤ人になるべく頑張っている。

後、また「なんとなく」で気を探る方法を身に付けていた。ベジータかお前は。

ジューズの皆の平均戦闘力が100000（パラガス含む）を記録した。

パラガスはまだそれなりに若いが、原作と違い猫を抱いているのが似合うナイスミドルになった。外見的にも悪くはなかったのだから性格をよくすれば当たり前の話でもある。

ただ、天体観測で異様にテンションが上がるようで、その時の様子と言ったら口に来ない程だ。

それでも純粹に観測してるだけだから多分、ブローリーの劇場版の一連の流れは起きないに違いない。

私は、22歳になって漸く重力を120倍に引き上げたところ。まだまだ超サイヤ人は見えてこないものもうクウラ（通常形態に限る）なんて怖くない。でもメタルクウラは怖い。ふしぎ！

後、力を制御するためのアイテムを更に頼んでおいた。猫の手型のミトンとスリッパが追加されてそれに合わせて首輪のデザインが猫っぽくなった。髪留めも猫耳にされた。ついでに尻尾カバーもつけられた。

これただのコスプレじゃない？と言ってみたら、コスプレだが効果は保証する。と言われた。開き直んな。

後、技術の発展に伴って300倍まで限界が引き上げられた。

エイジ757

それから、5年。ブローリーは20歳を迎え、身長もすでに200を超えた。伝説の超サイヤ人であっても完全な制御下におけるらしい。劇場版を見た事がある私としてはチートな気がしてならない。破壊衝動のままに暴れまわるのも怖いが、その力が完全に制御された上で襲い掛かってくるのはそれ以上に怖い。

リーフも20歳になった。身長は171になり、既に超サイヤ人2になれるようになっていたりする。早いよ！まだ原作始まってないよ！？

そして、私は漸く150倍に耐えられるようになった。そして力を抑えるために首輪と髪留め（紐タイプ）腕輪に耳飾り（挟むやつ）を新しく作ってもらった。コスプレのあれは一応保管はしてあるけど、つけたいとは思わない。

サイヤ人だから見た目10代後半だけど、27にもなってコスプレなんてやってられるかと言う話だよ。趣味でもないのに。前世含

めればもう50近いんだよ？

ブローリー、リーフ成人記念と私150倍到達記念を祝して家族旅行に行くことになった。行先はナメツク星。

無論目的は不老不死。死にたくないから、原作知識だろうがチートだろうが何でも使ってやりますよ。

他にもいくつか目的はあるけど。

005 | 不老不死求めてナメツク星（前書き）

表記してなかったことが一つ、この作品において原作はドラゴンボールという作品そのものであり、アニメ版、漫画版、劇場版といった区別は基本的につけていません。設定なんかもそれらをごちゃまぜにした感じですよ。

005 | 不老不死求めてナメツク星

初めての家族旅行。私とブロリーにリーフ、パラガスの四人が【night knight】に乗っている。私とパラガスはともかく、ブロリーやリーフには初めての宇宙旅行だ。コールドスリープ装置などと言う無粋なものは使わずに道中の惑星の美しさとかを堪能しつつナメツク星に向かう。

ブロリーもリーフも喜んでくれているらしい。よかったよかった。1ヶ月後辺りにナメツク星につく予定。惑星ジュースのアナハイムがいるいと魔改造を施してくれた結果です。通常航行とは言わないうが、それでもこれ戦闘用機動じゃなくて日常用の機動なんだぜ？

ナメツク星に着いて、少しは警戒しつつその大地を踏みしめた。だが、今回はジュースの時と違って降りていきなり襲撃されるような事は無かった。異常なまでに発展したジュースの様に惑星全域を網羅した対空レーダーや迎撃兵器なんてものは存在しないし、惑星の広大さに反して集落の数は少なく、規模も小さい。恐らく、私達がこうしていることも察知できていないに違いない。

「さて、そんな訳でようやくナメツク星に来たわけだけど……どうする？」

「オレはどこでもいい」

「いいぞお」

そう言うのはブロリーで、そその後ろで腕組みしつつうんと首を振るのがパラガス。

2人の容姿は原作とそう変わらない。強いて言えばブロリーの制御装置の宝石の色が黒である事とパラガスの目の傷が無いくらいか。

前者はブロリーが自主的に制御装置を望んだ為にその嗜好が現れただけで、後者はブロリーが原作程凶暴に育たなかった為に目を潰す

イベントが発生しなかったからだ。

そしてその2人と同じ血を引くリーフは2人に余り似ていない。肩口辺りでラフに整えられた黒髪、切れ長の黒曜石の様な瞳。童顔ながらも目鼻立ちの整った、いわゆる同性にモテるタイプの顔立ち。太陽の光に照らされて輝く褐色の肌。

背丈は171程で華奢ながらも出る所は出て、引つ込むべきところは引つ込んだ理想的な肢体。

上に黒いアンダーウェア、黒い亀仙流を模した胴着を着込み（文字は滅）、下に黒い袴の様なものを穿いて、足は素足で草履を履いた和風の出で立ち。足首の辺りが絞られているために、一見すると空手偽のようにも見える。

制御装置を必要とするブローリーや私達とは違い、首に着けた首輪に力を制御する能力は一切ない。私やブローリーの真似をしたいらしい可愛い妹だと思う。

臀部の辺りでは猿の尻尾がふりふりと規則的に動いている。無表情で感情があまり表に出ない代わりにこの尻尾にその感情が出るので重宝していたりする。どうやら結構楽しみにしているようだ。

「……ん、あつちに沢山気がある」

「それじゃ、あつちを指して歩こうか」

そうリーフが指差した方向へ私達は歩くのだった。

ナメック星は地球とほぼ同じ重力で、その倍以上の重力を持つ惑星ジューズや惑星ベジータで生まれ育ち、重力力場発生装置による鍛錬に慣れた私やブローリー達からすればとんでもなく軽い世界だ。

そして、異常気象で荒廃しながらも生き抜く植物や生物達。その地球や惑星ジューズとは大きく違う星の在り方に皆で少し感動したり。惑星ジューズには存在しない蛙に飛びつかれてブローリーが物凄いビビったり。

恐らくはこの星独特であろう植物アジッサに興味を持ったパラガスが研究の

ために持ち帰ってみようと折ったはいいが、担ぐのも邪魔でまた植えなおしてみたり。

私とリーフが現地の水を飲んでみようと思いたったは良いものの水質調査とかそんなことを考える前にその色に勇気を折られたり。

そして、そんなこんなで時間を食っている内に気付けば半日が経過し、あれ夜来なくなね？と4人で話していて、私がそう言えばナメック星って複数の恒星の周りを回ってるから夜が無いと言う事に気付いた時には既に？日が経過していた。

「どうする？ 飛んでいく？ このまま行くと……」

「……到着に後3時間はかかる計算」

ちよつとげんなりした私の言葉を引き継いだリーフの言葉にげんなりした顔を見せるブロリーとパラガス。いろいろ遊んだりはいだりした疲れもあるのだろうけれど、この星は自然や生物が非常にまばらでその変化にも起伏がほとんどない。それで約半日を歩き続けたのだ。げんなりもするさ。

『飛ぶ』

当然ながら、そう満場一致したのだった。

そうして。

「……この星に何をしに来た、サイヤ人！！」

困まりました。私達が何をしようのか。

「……飛んだ」

そうだよ、流石に舞空術使えばれるよね。そして、ばれたらサイヤ人だし警戒されるよね。しかも、この星を見る限り他星との交流も無さそうだから彼らの中ではサイヤ人は滅んでないんだろう。いつそう厄介だ。

戦闘力と言えば大した事は無い。ナメック星人の戦闘タイプは総じて高い戦闘力を持つが、それでもこっちに比べれば単なる雑魚に過

ぎない。

数だって10を超えるかどうかと言った所。この星最大級と思われる気の数々がこちらに向かってきているものの、それを含めても20前後。全員同化でもされれば流石に厄介だろうが、そこまで単純な能力でもないし、それを見逃す私たちでもない。

「姉さん、こいつ等は潰すのか？」

「ブロリーっ!!」

言って気を高めようとするブロリーを一喝するとそれだけでブロリーは大人しく引き下がってくれる。確かに初めての家族旅行でこんな邪魔が入るのは嫌だろうけれど、流石に虐殺はまずい。出来れば対話で済ませたいところだ。

「……私達は、この星に観光にやってきたサイヤ人だ。お前達に危害を加える心算は無い。」

「ふざけるなっ！そんな言葉が信じられる筈が無いだろう!!」

「2年前の侵略を忘れたとは言わせんぞ!？」

本来、温厚な性格で、聡明で、礼儀正しく平和を愛するナメック星人にはあり得ない激昂。普通ならいかに怪しいサイヤ人と言っても話は聞いてくれるはずだ。

2年前……それが何か関係するのだろう。

「忘れた以前に……知らないな」

2年前と言うとエイジ755……既に惑星ベジータは爆発し、同時にサイヤ人は絶滅に瀕している。ラディッツ、ナツパ、ベジータでは無いだろうし、悟空はもつとあり得ない。

となれば、ターレスか？いや、それもあり得ない筈。

下級戦士ながらも神精樹の恩恵を受けているターレスの戦闘力は非常に高い。作品を見る限りでは少なくとも20万には到達していると考えられる。それが侵略を失敗する可能性は極々僅かであり、仮に失敗したとしても神精樹による天変地異の影響や神精樹そのものが存在していない筈が無い。

無論、自分たちは除外される。

つまり、高確率で原作には登場しない生き残りのサイヤ人が存在すると言う事になる。

恐らくは私達と同じ転生者か、或いは私達の行動が影響したのか。そう考え込む私のどこかが癩に障ったらしい。若者が一人、集団から飛び出してくる。

「……貴様っ!!」

「……っ!」

反射的に迎撃しかけて、飛びかかってきたナメツク星人の貫手ぬきてを流しつつ、もう片方でその腹を押さえて投げる。結局迎撃してんじやねーか。そう思ってももう遅い。

クルリと綺麗に回転して地面に叩きつけられ、呻く青年。それを皮切りとして戦端が開かれた。

やっちゃったぜ ミ。

戦端が開かれて十数秒。ナメツク星人の龍族の戦士達を叩きのめした私達は、続いてやってきた戦士族のネイルとその仲間達を倒し、最長老との対話する機会をもぎ取った。

そして、ドラゴンボールによる不老不死にはならなかったが、不老長寿にはなることが出来た。老いる事が無く、寿命は数百年から数千年と個人差が有るものの非常に長い。

不老長寿になった後に聞いたデメリットを挙げるともう元には戻れない事と精神と時の部屋とそれと同質の空間へ入ることが出来ないらしい。無理やり入ったり、入れられたりしてもすぐさま弾かれるとか。

つまり、今後私とリーフは悟空やベジータと違いリアルタイムのみで強くならなくてはならない。

限られた期限の中でそれを引き延ばせることがどれだけ有利なとか。

ちよつと泣きたくなくなった。

006 | 誰か説明ぶりーづ

ナメック星での家族旅行を終えて、再びジューズへ戻ってきた私達は平穏な暮らしを送っている。それから約4年後。

エイジ761

事件は勃発した。

「ハアアアアア」

気を高めるブロリー。

「ん……………」

構えるリーフ。

互いに睨みあい、小さいながらも確かに挑発しあう2人。

そしてその間でオロオロする私。やめて！私の為に争わないで！なんて言えたらどれだけ楽だろうか。

周囲には誰も居ない。最初はなんだなんだと集まった野次馬達もこの2人の全力全開（全壊でも可）バトルだと見るや否や全員が逃げ出した。

全部私に押し付けたうえで。

「…………逃げたい」

ぼそりと呟いたそれを開始の合図ととったか、2人が動いた。あか
ん、余計な事言った。

「オオオオオオ！！！」

ブロリーが気弾を大きく振りかぶると投擲する。ブラスターシエル
私を使うシエルブリッドに良く似た技と言うか、私が参考にした技
だ。

「…………ん」

それをリーフは事も無げに弾いて見せる。弾かれた気弾は少し遠く
の岩山に着弾し、その頂上部を消し飛ばした。

それに気をよくしたのかブロリーは笑みを浮かべつつ左手に気弾を
溜め、それを解き放った。リーフはそれを見ると自身も右手に気を

溜め、それを迎え撃った。

ブロリーの技はレイザーキャノン。リーフの技はエネルギー弾（名前はまだない）だ。

その2つはぶつかり合い、爆散する。遠距離戦は分が悪いと感じたか、リーフが地面を蹴ってブロリーとの間合いを詰める。

「ハアアッ！」

それを阻止するかのような2発目のレイザーキャノンは殆どタイムラグなしで放たれて、それに対しリーフは一步踏み込んで裏拳を横に薙ぎ払った。

「んっ！」

「ウオオ!?!」

ピッチャー返しよろしく跳ね返されたそれをブロリーはまともに喰らうが、その光の中から何事も無かったかのように無傷で出現すると間合いを詰めつつあったリーフに拳をふるう。それを片手で受け止め、もう片方に溜めていた気弾をブロリーに突きつけてぶっ放した。

気のバリアーを展開しそれを防ぐブロリーだが、その勢いに押されて数メートル後退する。

そしてその空いた間合いを一気に駆け抜けるリーフ。

「はあ!!!」

恐らくは全力の肘打ち。それをまともに受けたブロリーの巨体が揺れるが、一步後退し踏みとどまる。そして反撃の拳を捌くと同時、逆関節を極め、投げる。逆さまになったブロリーの後頭部にローキックを叩き込んだが、地面の衝突直前、右手を軸にして体勢を立て直したブロリーに堪えた様子は無い。

「……っ！」

舌打ちと共に正拳を叩き込むリーフ。それを悠然と受けたブロリーはお返しとばかりにその腕を掴むと放り投げた。

体勢を立て直すタイムラグも与えずに放たれる気弾。それに吹き飛ばされ近くの岩に激突するリーフ。煙が巻き起こり、どうなったの

かは分からない。

「……オオオオオッ！」

咆哮。いつも通りの声で、らしくない叫び声をあげ、岩山と煙を吹き飛ばしたのはリーフだった。

ポロポロになったたであるう胴着と尻尾を腰に巻きつけて。

胸元までの上半身を覆う黒い体毛。

眼の周りを縁取る赤。

体毛の色こそ違うものの、どう見ても超サイヤ人4です。どうもありがとうございました。

「続き」

そう言つて、リーフが構える。

「……ハアアアッ！」

距離を詰め、先手を取ったのはブロリー。今まで見た事が無い程に気を高めて殴り掛かる。

確かに直撃したはずだが、リーフは微動だにしない。

「ん」

そして、無造作にはなった一発の掌底でブロリーを吹き飛ばすのだった。

……何が起きてるのか、誰か説明して。

とりあえず、なんでこの2人が戦い始めたのか辺りから

S I D E R i e f

「私、そろそろ地球に行こうと思うんだ」

切っ掛けはアニス姉のその一言だった。父、パラガスはそうか……好きにしろと寂しげながらもそう認めたものの、兄ブロリーはアニス姉は美人だからそんなところに行ったら悪い虫がとか地球の性質の悪い病原菌がやら、アニス姉はまだ超サイヤ人にもなれないんだから等と理由をつけて引き留めようとしている。というか基本的に本音ダダ漏れ。

兄がアニス姉に恋心を抱いているのは周知の事実。知らないのは当人ばかりなりと。

ここまでではつきり言われても気づかないほどアニス姉も鈍感じゃない。

私たち日本人からすれば兄弟姉妹の間柄で恋心を抱いたり、結婚したりすると言う事は禁じられていることでイケナイ事。その認識が兄の言動にも適応されており、一応義理の弟ではあるけれど、既に実の弟として認識されている兄の言動は弟として姉を心配するものなニュアンスで伝わっている。

そして、安心させようと笑いながらアニス姉は爆弾を投下した。

「リーフも行くんだから大丈夫だよ」

「姉さんを……お前如きが守れるものか」

ああ！？やる気か？

ベネット！銃なんて捨ててかかってこい！

「表、出る」

007 | 地球へ向かう

ブロリーとリーフの喧嘩の翌日。

私たちが地球に行くと言う事で、パラガスやジューズの皆が見送ってくれた。その中にはブロリーの姿もあったけれど、どこか納得してなさそうな泣き笑いみたいな表情だったので、ブロリーにはこのジューズを守る為に残っていて欲しいと告げると笑顔で頷いてくれた。

うん、素直な弟の事はお姉ちゃん好きだよ？

ジューズから地球までは【night knight】を使って約32日の距離なのだけど。私達2人はサイヤ人らしく沢山食べる。朝昼晩、常人の数十倍の勢いで消費される食材。それらを計算に入れて途中の補給を考えると約40日程だろうか。

コールドスリープ装置を使えばそんなことを考える必要もないのだけど、今の私はこの40日で戦闘力の強化と調整を行わなくてはならない。

戦闘力の強化は今まで通り、自己破壊と重力力場内での鍛錬で事足りるし戦闘力を極限まで下げる事も容易い。

私がやるべきは望んだままの戦闘力を引き出すこと。出来れば制御装置の力無しで成し遂げておきたい。

制御装置に頼り切ったまま、フリーザやその先の敵に勝てる気はないから。

ボンツ！！スカウターが爆発し、その部品を撒き散らす。処理能力、計測値の限界を超えると個体差はあるものの、例外なく爆発する。普通に考えて物凄い危険な仕様なのだけど、何故かジューズの超科学をもってしても改善は出来なかった。どうもシステムの根

幹に食い込みすぎているらしい。改良できないわけではないが時間がかかるし、1から設計しなおした方が早いらしい。

当然、爆発しないタイプのジューズ製のスカウターも存在するには存在するが、あまり重要視されておらず、戦闘力も10000前後までで、100刻みで非常に大雑把にしか計測できない。私を迎撃するときに持っていた理由は、通信装置としての側面が強かったらしい。

これを改良しろよ、と思わなくもないというか実際口にしたらこんな粗悪品を改良してどうすると怒鳴られた。

そんな訳で、私が持ってきたスカウターを量産して、それを使って戦闘力の把握と制御をしている訳だけど、そろそろ耳が痛い。

実際、地球人であっても平気な位の威力しかない爆発だけど、音が耳が痛い。ぺちん、ぺちんと叩きつけられるネジとか板とかが不快で仕方ない。

「……はあ、まだまだ先は長いなあ」
ちよつと憂鬱な気分ですうため息を吐いたのだった。

私達が惑星ジューズを出て11日目。2回目の食糧補給で食糧保管室いっぱい詰り込んだ食糧も後2日と少し。本来なら明日にでも補給したいのだけど、この近辺には文明を築いた惑星が存在しないらしいから仕方ない。

私はどうにか自分の戦闘力を抑え込むことに成功した。と言うか案外楽な方法が存在した。

尻尾を締め上げる為の円環を即興で作ったのだ（リーフが）。尻尾を鍛えていたことを失念していたらしいが。しかし予想外にもこれによって発揮できる戦闘力が大きく減少した。これは私が尻尾を鍛えてはいたものの、独学であり鍛え方が中途半端だったことが原因らしい。現に、パラガスにやり方を教わってしつかり鍛えたリーフと同じことをしても無駄だった。

不十分とはいえ鍛えてある尻尾で弱るには相応の力が必要で、と

んでもなく痛いがお陰で戦闘力は低下し、そのコントロールも非常に楽になった。

そして、それを生かして気のコントロール技術の強化と必殺技の開発に勤しむことにした。

体術やその他の技に関しては問題ない。

戦闘スタイルは気づけばサイヤ人の戦闘センスを生かし、打撃や投げ、関節技、組技など様々に取り込んだ全面对応型格闘術なんてものに変化していた。

太陽拳や四身の拳は扱えないが、簡単な回復術と瞬間移動は使えるのだ。十分と言うしかない。

だが、気弾系の技はいまだにトラップシューターとシエルブリッドしか使えないのだ。

どうにも私は気を扱うのが苦手で、トラップシューターはもともと普通の気弾を放とうとしたら普通にはばらせるだけで正式に習得した技ではないし。シエルブリッドも着弾と同時に膨張する理由は私の圧縮が甘いからだ。本来なら貫通力の高い気弾と言うのを放ちたかったが、そうも行かなかった為、ブラスターシエルを参考にした技と嘘をついているのだ。たとえ嘘をついても姉の威厳は守らなくてはならないのだよワトソン君。

私達が惑星ジューズを出て21日目。5回目の食糧補給で食糧保管室いっぱい詰り込んだ食糧はまだまだ残っているが調味料が心もとない。本来なら明日にでも補給したいのだけど、この近辺には文明を築いた惑星が存在しないらしいから仕方ない。

気弾、気功波と一口に言っても単純なものじゃない。それは原作を見れば分かるとおりだ。

トラップシューターは気弾と見せかけて弾幕を張る技で、連続エネルギー系の技と比べると威力で劣る代わりに、一瞬で弾幕を張れ、

なおかつ相手の虚もつける技だ。

シエルブリッドは圧縮した気弾を相手の懐まで飛ばし、膨張爆発で巻き込む技だ。溜めが殆ど無い為に爆発の規模は小さく威力も大した事無いが、相手が弾く事が出来ないという利点もある。それでいながら、通常の気弾との差は微々たるもの。これも奇襲用の意味合いが強い。ちなみにこれを強化するとプロリーが使うギガンティックミーティアに進化する。

私はこの10日の間にトラップシューターとシエルブリッドを自在に操れるようになった。そして新しい技としてクラッシュヤーボールやシュートブラスターと同系列の技を習得。撃ちだし方はバレーのスパイクではなく掌に生み出した気弾を逆の掌底で撃ちだす、ピリヤードのショットに似た動きだ。

名前はバスターキャノン。どっかで聞いた気もするけど、それ以外に名前が思い浮かばなかったから気にしないことにした。

008 | 漸く出番だよ【night knight】

『多数の攻撃を確認、対象を敵性と判断。戦闘モード、起動』

AI、リュカの声と共に重力力場発生装置のスイッチが切られ、私とリーフにかかっていた重圧がふつと消えた。

リーフは私と違って低負荷で持続的な鍛錬を好むらしく、重力は50倍程度で固定されている。私としては物足りないのだが、代わりに実戦的な修行が出来るので特に言う事はない。

だが、50倍程度でも稼働には多くのエネルギーを消費する為、戦闘モードを起動するのは不可能に近い（正しく言うと起動は可能だが、戦闘中もガンガンエネルギーが減っていく為、推奨できない）。そうでなくとも様々な研究や食材の保管なんかにも多くのエネルギーを費やしているのだ。私やリーフがエネルギーを供給していればその限りでもないが。

「リュカ、お前に任せて問題ないか？」

『大丈夫だ、問題ない』

それ死亡フラグだ。一番いいのを頼む。

このリュカは【night knight】の管制人格だ。元々はマニュアル用だったらしいのだが、なんかどっかの星から技術提供を受けて重力力場発生装置が改良された折に、とばかりに各所が改造され、その影響を受けて管制人格へと進化したらしい。

そして、今こそ結構真面目であるものの、普段はそうでもない。私やリーフが燃料として気を注いだせいで性格に影響が出たと言っているが私達には似ても似つかない性格だ。

「……と、そういう訳らしい……どうする？ 観戦でもする？」

「……お腹空いた」

その言葉に苦笑しながら私はリーフと一緒に食堂に向かうのだった。

漆黒の宇宙に煌々と輝く光。これが何処かの惑星の地上でもあったならさぞやロマンチックな星々に見えたことだろう。

「実際は、ビーム輝くフラッシュバックだが……な」

展開したエネルギーフィールドに飛来したビームが弾かれる。わたしの前方に存在する海賊船から放たれたものだ。わたしの中にあるアニスとリーフの知識を使って、その海賊船を形容するなら機動戦士ガンダムのサラミス級巡洋艦だろうか。色はドドメ色だが、形状は酷似している。性能まで似ているかどうかは知らん。メガ粒子砲とかフアランクシステムが存在しているかどうかによる。

まあ、どっちにしろわたしに敵う相手じゃないんだが。

「さつさと終わらせるか……エネルギーフィールド解除、封印限定解除確認……」

アニスはマシンガンと思い込んでいるわたしのビーム兵器だが、それには幾つかのモードが存在する。まず、基本形態のマシンガンモード。（この世界の平均的な）戦艦主砲級のビームを分間200発程撃ち出すことの出来るチート武装。そして、キャノンモード。一発がフリーザ（第一形態）のデスポール級のビームを分間80発撃ち出せるチート武装パートツー。

次がライフルモード。キャノンモード以上の威力を誇るが、基本的に超遠距離用武装で距離減衰を計算に入れた攻撃力を想定している為、実用時においてはキャノンモードとそう変わらない。また、他には存在しない計算と言う過程が存在する以上、初撃には数秒の溜めが必要になる。それを考えなければ分間30発ぐらいか。ちょっとチートっばい。

最後がブラスターモード。威力だけを追い求めた結果の最強最悪のモードだ。こいつに関してはまだ試運転さえされていないからよく分かっていないが、その使い勝手が最悪なのは確かだし、たぶんこの先も使わないんじゃないだろうか。

今回解放したのはビームマシンガンモード。

「さて、滅び行く者の為に……君の生まれの不幸を呪うがいい……」

ああ、一応言っておくがわたしはガノタじゃない。なんか宇宙世紀っぽいから言ってるだけだ。いや、結構ロボット物は好きだけだな。

「ポチツとな」

そんな枕詞と共にスイッチを起動させる。押せないのがなんだか悔しいが、まあ仕方ない。

黒と白の気弾がバラまかれて、海賊船団を蹂躪する。黒と白なんて相反した色である割にこの2つの気の親和性は高い。何度見ても納得のいかない光景だ。

半分ほどが逃げ延び、ミサイルやビームを放ってくるが、そのどれもがわたしに到達する前にこの弾幕にかき消されていく。

最初にバラバラにしたせいか数十秒の時間がかかったものの、たったのそれだけで艦隊戦は終わりを告げるのだった。

ああ、そういえばこんな時に言う言葉があった。

「弾幕……薄くなかったですか？」

009 | 色々と超展開、だが私は謝らない

私達がジューズを発つてから43日目、どうにか地球につくことができた。食糧はまだ余っているが、明日まで持つかどうかと言った所。

「地球……地球かあ……」

「……懐かしい」

一緒に降り立ってスーハーと思い切り深呼吸。降り立つ前にカリオン塔も見えたとし私達がいた地球とは大きく異なるが、それでも地球。懐かしいことに変わりはない。

ただ残念なのは既に私の記憶の中から地球の空気がどうだったとか、重力がどうだったなんて言う記憶や感覚が残っていない事だろうか。

そうしてひとしきり感傷に浸った後、私達は一緒に西の都に向かうことにした。【night knight】の速度を落とし、独自開発したエアカー兼家屋と言う事で西の都に移住しようかと思っている。

【night knight】も反重力装置を積んでいる為、問題は殆ど存在しない。強いて言えば、これは結構大型で4人程までなら問題なく住めるのだけど、逆にここまで大型のものが地球に存在するのか。

そして、これを置ける土地が西の都にあるのかどうか。

結果、どうにか西の都に移住することができた。一応持ってきておいた食糧や燃料リキニウムと宝石を売り払い、その金で土地と市民権を得たのだ。お陰でもう食うものもない。

どうにか今日の分ぐらいは残っているが、それでも満腹には程遠い。せいぜい腹3分ぐらいか。

「さあ、3回表福岡サイクロンズ……ワンアウト、一塁、二塁。」

次の打者は打率に定評のある源選手。得点のチャンスです。」
テレビから聞こえてくる野球実況を何気なしに聞いていたら……
ティンと来た。

これだ！

「リーフ、ちよつと出かけてくるから」

「いつてらっしやい……」

尻尾を隠し軽く男装した私は簡単にスタジアムに侵入し、東響アヤックスのベンチにいた。

「……アンタが代わりにピッチャーをやってくれるって？面白い冗談だ」

「冗談を言っているつもりはないんだが……」

「そりや、冗談だけでこの東響アヤックスのベンチに入り込んでくるとは思っていないし、それが出来たのが凄いつてのはよく分かる。けどな、野球は素人だろう？素人がプロに勝てるほど甘くはないんだよ」

まあ、私もその意見には賛成だけど、それは人間対人間の場合だ。私達の様な化け物と一緒にしちやいけない。一応の野球経験があればどうとでもなるレベルだ。

「……監督？」

そういつて歩いてきたのは金髪碧眼、優男風の青年だった。恐らくはピッチャーなのだろう。

「おおレッドか……いや何、この兄ちゃんがお前に変わって投げてくれるらしいが？」

「勿論、断ります」

「だよ」

あれ？でも今思えばピッチャーってキャッチャーがいないと成立しないんじゃない？

アラレちゃんでも似たようなことがあったような……。

「仕方がない、じゃあ代打で」

「……打たせるつもりは無い」

「そうだな、レッドが打たれたら使ってやろう」

そういつて笑う2人。どっちもにやりとした不敵な笑みだ。相当な自信があるんだろう。

そして、マウンドに向かうレッドを見送りどっかりとベンチに座る。

「さて、じゃあ此処にいていいのかな？」

「構わんさ。素人がプロにケンカを売りに来るなんざ並みじゃで
きん。」

俺はアンタの事を気に入った。ほんとにレッドが打たれたら使っ
てやるさ」

負け試合だろうからな、と笑う。

「レッド・スミス投手、登板です………イケメンとか死ねばい
いのこ」

レッドが登板。最後の言葉は聞かなかったことにしておこう。そ
して、危なげもなく打者を打ち取った。

「ツーアウト、塁は変わらず。っとここで福岡サイクロンズ打者
交代です……南道選手に変わりました………ヤムチャ選手？ 二
軍の選手だったのでしょうか。全くの無名です。」

……負け試合として新人に経験を積みさせるつもりでしょうか？」

「……っ!？」

驚いた。確かにヤムチャが野球選手のアルバイトをしていること
は知っていたし、同じ様に野球をすることで金を手に入れることが
出来るかもしれないと考えたが……言葉を聞く限り、初めての起用
なのだろう。こんなタイミングで聞くとは思っていなかった。

「おいおい、どうしたんだ？ 鳩が豆鉄砲喰らったみたいな顔しや
がって」

「いや、これで私の代打が決定したな、と」

まあ、好都合ではある。私が活躍することでヤムチャが少しでも意識してくれば楽になる。

レッドは確実に打たれるだろうし、ここで私がいち早くヤムチャの実力を見抜いた的演出をしておけば、後々役に立つかもしれない。

結果から言えば、ヤムチャは残りの3打席全てでホームラン。レッドは少し悔しそうだったが、素直に負けを認めたくえでいつか超えてみせると燃えていた。

私は人のいい監督との約束通り、出場させてもらい長打を連発、ホームランを一発放った。ついでに守備もさせてもらい、球団でアルバイトさせてもらえることになった。

私、アルバイトオオオオ!!

009 | 色々と超展開、だが私は謝らない（後書き）

野球球団とかの元ネタ分かる人いるんだろうか。

あ、レッド・スミスが今後登場する予定はありません。

「起きろー、起きろー、超起きろー」

「……まだ眠いんだけど」

私の耳朵を震わせるどこか愛らしい声。次いでユツサユツサと遠慮なく揺さぶられる体。

「起きろー！」

「仕方ないな……」

身を起こし、そこで硬直した。

いつもより体が重いと思ったら、私の腹の辺りに幼女がいた。全裸の。

な、なにを（ry

誘拐とか拉致監禁とかそ（ry

「アニス姉……朝だよ、起きて……る？ …… …… …… おまわりさん、ここにロリコンの変態がいます」

ちよ、に、逃げないで！？ でも、流石に今の「義姉が変態だった、死にたい」的な半泣き顔を見るにこれがリーフの仕業と言う事はなさそうだ。性格的にはまず有り得なくとも、一応家にいる唯一の同居人だから疑ってみたがとんだ大外れらしい。

「くはっ…… はははっ…… あーはっはっは！！」

そして、私の目の前で腹を抱えて笑う幼女。この反応、間違いなく下手人かそれに近い。と言うか、このちよっとカッコいい感じのロリボイスはどっかで聞いたような、そうでもないような。

今度はしっかりと幼女を試してみる。

柔らかな金色の長髪に翡翠色の瞳。

その顔は東洋人風の造りで人形のように整っている。

肌は白い。白いが病的と言う事はなく、気品さえ感じさせる程の美肌だ。

一見すれば人形のような印象を受ける小柄で華奢な体軀だが、そ

れとは裏腹に鍛えられた肉体が与える印象は非常に健康的でもある。結論、会った事が無い。こんな人形とかブルーブラッドなんて形容が似合いそうな美少女。

「おや、お分かりにならないので……?」

残念！リユカとお答え頂きたかった!」

アタツク25!」

「って……ええええええつ!」?

リユカってあの【night knight】の!」?

「ああ、そのリユカで間違いない」

通りで聞き覚えが有るけど無いはずだよ。機械越しには聞いてたけど肉声は初めてだからな。

あれ? ちょっと待て?

「リユカって管制人格なんじゃないの?」

「ん、この肉体はわたしが造り上げた人造人間1号。まあ、造り上げたんだが……肝心の自我が存在しなくてな……こうしてわたしが操作してる。という訳で今はこっちが本体。ああ、後コレを渡すとく」

そう言ってリユカが投げ渡したのは、鍵?

「コンソールキー。それが無いと、この船は動かない。わたしがこの姿の時はこの船に対する干渉権を持たないから………今後は基本この姿で暮らすつもりだし、新しい管制人格が完成するまではそいつを使ってくれ」

「いやいや、ちょっと待って?

いきなりそんなことを言われても困るんだけど。」

「そう、困る」

いつの間にか、私の隣に来ていたリーフが私の右腕を掴んでいた。どうやら誤解は解けたらしい。よかったよかった。

「ロリコンアニスの前、貴女がいると襲いかねない」

「襲わないよ!」?

前言撤回イイイ!!」

ロリコンじゃない！子供好きなだけだ！

「さて、どうするか……バトルジャケットは……合わないだろうなあ」

こんな少女の加入は完全に予想外だった為に、私達が持ってきているバトルジャケットや外出用バトルジャケットは私達のサイズしかない。

開発生産しようにも、材料と施設がなきゃどうしようもない。

「普通の服、買えばいい」

「んー、まあ大丈夫だろ」

財布を開いて確認する。決して多いとは言えないが少なくもないに違いない。一昨日の野球の活躍で100万ゼニーをもらい、食料や貯金に使った残りだ。今日は夜に東響アヤックスと福岡サイクロンズの3戦目があるから使い切っても問題はないだろう。

そんな訳でリュカの服装はゴシックロリータ系のドレスに決まったのだった。いや、私の趣味じゃないよ？

011 | 最強主人公（笑）の嘆き

「……泣きたい、柄にもなく凄い泣きたい」

西の都から遠く離れた場所で私は一人黄昏ていた。そうして沈み行く太陽を見つめるだけで私の目からは涙が溢れてくる。涙は女の武器と言うけど、本当に武器にでもなってくれないだろうか。

あれからリユカとリーフの試合をすることになったんだが、その時判明した事実にはうちのめされていた。あのリユカはサイヤ人の細胞　つまりは私やリーフ、ブロリーの遺伝子と惑星ジューズの超科学、前世におけるアニメや漫画の知識を以て作られてた人造人間だ。

尻尾が存在しない為が大猿にこそなれないものの、サイヤ人としての特性と才能を持ち合わせた上で生まれた時の戦闘力が3000を超え。どう考えても私が足を引つ張っています。本当にありがとうございました。

そして、リユカが黒髪揃いの私達から作られていながらも金髪に翡翠色の瞳を持つ理由はデフォルトで超サイヤ人だからであるらしい。それなんてチートだよ。

重力力場発生装置や重力制御装置で構成された小型永久炉による無限の超パワー。

ナノマシンと融合した細胞組織による自己進化、自己再生、自己増殖を兼ね備えた劣化型DG細胞。

自己進化による一時的な戦闘力の上昇、死にかけても細胞が欠片でも存在すれば、そこから自己再生して生き返れる上、戦闘力が上昇する。細胞ごと滅してもその戦闘情報は「night knight」内に送られ、更に強力な人造人間としての改良に使用される。チートすぎるだろう。

しかも既に超サイヤ人2になれる様でもある。

ただでさえリーフの超サイヤ人状態第二段階（ベジータが超ベジ

「タと言いつつたあの形態」と互角以上に渡り合っていたのに、ここで共に超サイヤ人2になってからは終始優勢に勝負を進めていた。

「私は……バーゲンセールいけないんだね」

いや、それどころかフリーザ編以降では単なるお荷物に成り下が
る可能性もある。

別に超サイヤ人になれないだけなら私は何とも思わなかったら
う。まだ私は時期が来ていないんだと誤魔化して修行に明け暮れ
ばいいだけなんだから。

だけど、私の周りには気づけば超サイヤ人ばかりだ。ブロリー、
リーフ、リユカ。

ここに加わるのが悟空、悟飯、ベジータ、トランクス、悟天。

それだけじゃない。地球人だがクリリン、ヤムチャや天津飯だつ
て相当に強い筈だ。原作のせいで弱い印象を持たれているが、それ
でも最終的にはオリブーやパイクーハンに勝るとも劣らない屈強な
戦士にまで育つのである。

となればピッコロみたいに頭脳戦と行きたいところだけど、生憎
私は戦闘型のサイヤ人だ。日本人としては平均的な頭脳はサイヤ人
よりは上だが、聡明なナメック星人に敵うとは到底思えない。

そして、一番大きいのが、今私が自分への怒りと悲しみでかつて
ないほど苛まれているのに、それでも覚醒してくれないという事実
だ。女だから覚醒できないなんてのは既にリーフが否定している。
単純に私の才能が。

「あ？ ……いや流石にそれは無い」

私、リーフ、リユカ。

ブロリー、パラガス、悟空、ラディッツ、ナツパ、ベジータ、タ
ーレス。そして正体不明のナメック星を襲ったとみられるサイヤ人。
現在の純血のサイヤ人は全部で10名。私の知らないサイヤ人と
かを考えても十数名。内3名が女性な訳だが……まさかまだサイヤ
人は絶滅に瀕していない？

超サイヤ人への覚醒が種の保存本能によるものだと仮定すれば、

私が覚醒できないのも納得……出来る訳が無い。大体にして種族数20名以下が絶滅の危機でないはずが無い。

原作の残ったのは2人でどっちも男なんて状況よりはましに違いないが。

012 | そして原作介入へ

色々黄昏たり、考えたりしたのが昨日。色々考証したり、修行したりしたかったのだけど。

今日の日付は10月12日

……………ラディッツが来る日だ。

慌ててリーフとリユカをたたき起こして、戦闘力を100程度に抑えてもらう。この宇宙船内の気を探ることは非常に難しく、スカーターではまず不可能だし、気を探る能力の持ち主でも簡単じゃない。

かといって絶対があるわけではないし、一日中引きこもっているわけにもいかない。

尻尾も隠してもらい、今日は大人しくしていることにしたのだった。

「悟空の霊圧が……消えた？」

戦っていたラディッツ、悟空、ピッコロのものと思いき3つの気の1つが消えた。それと同時にラディッツの気も致命的なまでに衰弱していく。

恐らくは原作通りに進んだのだろう。衰弱していた気が一瞬で消え去った。

「準備出来た？」

私の言葉に返事をする代わりに、両肩に2人が手を置いたことを確認した私は瞬間移動する。

私達が見つめる先には胸に風穴を開け、倒れ伏した悟空とラディッツ。そしてそれを面白くなさそうに見つめるピッコロがいる。

既に余計なことをベラベラ喋り、1年後のサイヤ人の襲来が明らか

かになった後。

私や2人の実力をもってすればラディッツ如きどうともなかったが、悟空には死んで貰わないとならない。界王拳も元気玉も使えない以上、それを習得する人間は不可欠だからだ。

いくら原作にはない味方である私とリーフがいるにしても、それだけでフリーザ編以降のセルや魔人ブウ、劇場版の敵。そしてGT編の強敵達を倒せるとは限らない。下手をすればそれらを超える何かが出てきてもおかしくないのだ。

自身の力量以上を扱う界王拳も元気玉を覚えていて損はない。

その為に、悟空は見殺しにした。

だが、これ以上は必要ない。

ヤムチャ、クリリン、餃子、天津飯、ピッコロ。サイヤ人でない彼らは死に易く、戦いが激化すれば足手まといであることも少なくない。だが、彼らを鍛え上げれば？ 或いは、死ぬべき場所で死なせなければ？

前者は戦力の増強に、後者は願い事や仙豆の節約になる。デメリツトも存在するが、それを大きく超えるメリツトを手に入れることが出来るに違いない。

どちらか片方をするだけでも十分だ。

様子を見にやってきたヘリが去ったことを確認し、私達はピッコロの方へと足を進める。

ざり、と思いのほか響いた足音に私とピッコロがちよっとびっくりした。リユカはじろじろとピッコロを観察し、リーフはいつも通りの無表情。なんか既視感。綾とか、長とか、エス、タサとか。無表情っ娘最高！無口娘も大好きです！

………思いつきり話題がずれた。と言うか何をシャウトしてんだ私は。

振り向いたピッコロの顔が硬直する。そして、その視線は私の尻尾にくぎ付けた。

これ見よがしに振ってみると、猫のようにその視線が行ったり来たり。

そして、その尻尾を眼前に突きつける。反応できなかったらしく、一瞬遅れて目を見開いた。

「……そんなにこの尻尾が気になるの？」

「あ、ああ……その尻尾……… 貴様らもサイヤ人なのか……？」
「そうだが？」

質問を質問で返してくれたピッコロにテンプレを返す前にリュカが言う。にやり、とでも擬音が付きそうなくどい笑みだ。

ちよつと強くなった警戒を解すために、私が付け加える。

「ラディッツの言ってた1年後のサイヤ人とは違うけどね」

「何……？ 奴はサイヤ人は4人しかいないと言っていたが……」
「……あいつが知ってる分はね。」

君だつてこの惑星に何人の人間が存在しているかなんて把握してないだろう？」

「確かに、な……で、この俺様に何の用だ？」

余裕ぶつてそう言うけれど、警戒はまだ解かれていない。いつでも動けるように全身の筋肉が、気が張っているのがハッキリと分かる。まあ、さつきサイヤ人の強さ（最下級だけでも）を目の当たりにしたばかりだしね。自分が気をコントロールできることもあって、私達が実力を隠しているのにも気づいているっぽい。

「いやなに、君を鍛えてあげようかと思つてね？」

「鍛える、だと？何故」

「拒否権は無い」

「……好きにしる」

問いにぼそりと呟いたリーフの言葉、そしてそれから放たれる威圧感に降参とばかりに両手を上げるピッコロだった。

そして、その後ろでリュカがラディッツの亡骸を担いで飛んで行った。これも今回の目的の1つだ。ピッコロは既に気にしないことにしたらしく、触覚をピクリと動かしたただけだった。

いや、展開が楽で助かるよ。多分大丈夫。多分、リーフが説明責任を果たしてくれるさ。多分ね。

「リーフ、お願いね」

「分かった……」

私の言葉に応えるリーフを確認して飛ぶ。私はヤムチャ、クリリン、餃子、天津飯、ヤジロベエ、神様の修行を担当する。Z戦士たちは言うまでも無く、神様まで鍛えるのは後々のピッコロの合体の効果を高めるためだ。

ついでに言えば、この時期から修業を始めることで、更なる実力をつけてもらおうと思っている。

「ここが、カリン塔か……よし登ろう」

そしてあの猫仙人にあい、モフモフする。ついでに、正規の方法で神に謁見して無用な争いを避ける為だ。

あ、逆か。正規の方法で神に謁見するついでにカリン様をモフモフする。

よし、問題ない。ついでに修行になればいいなあ。

「……んー暇だ」

指一本を引っかけて、次の意匠にもう片手の指をかける。親指、人差し指、中指、薬指、小指と指を変えつつ、登っていくその行程は非常に暇だ。かといって修行になる訳でもない。

やる気を回復するべく、休憩することにした。

そして一時間後、唐突に空が暗くなり、神龍の姿が少し遠くに見えた。少し前から集めておいたドラゴンボールだ。リュカが上手く

やってくれたらしい。

願い事を終えたらしく、空を覆っていた暗雲と神龍は消え、ドラゴンボールが飛び散っていくのだった。

さてさて、いいもん見れたし登り再開かね。

013 「ねこまつしぐら」

「ここが、天辺……か」

天辺には横長の楕円形をした居住空間があった。キッチン、何故か洋服筆筒にしか見えない洗い場、風呂場にベッド。インテリアなのか家具なのか判別しにくいツボが各所におかれている。

そして、そこにいたのは

「オヌシ、ようここまで登ってきたのう……」

アニメや原作で見るよりも可愛らしい猫仙人ことカリン様だった。

「もふもふー!!」

しばらく、お待ちください

カリン様を撫でまわしていると思ったら、気付けば一時間近く時間が経過していた。

何を言っているのか（ry

催眠術だとか超ス（ry

もっと恐ろしい（ry

「ぜえぜえ……仙人をここまで骨抜きにするとは、やるなオヌシ……」

ふふふ、猫に関して右に出る者はいないとまではいかないものの、撫でテクには自信があるのだよ！宇宙に猫はいなかったせいで発揮する機会は殆ど無かったけどね！

最初こそ、残像拳とかを駆使して私から逃げていたカリン様だけでも、数分で捕まって、数秒撫でられた後はなすがままだった。

「ところでさ、上のほう誰かいるの？ だいぶ上に気配があるんだけど」

わざとらしく問う。

「むう、サイヤ人ではあるが悪人ではなさそうじゃし 悟空と言う前例もある……」

それにぶつぶつと呟くカリン様。あれ、カリン様ってサイヤ人の

こと知ってつたっけ？ 原作だと知らなかった様な、ああでもあの世から派遣されてきた人材だし、知ってても不思議ではないか。

「よし、合わせてやろう。猫好きに悪い奴はあんまりいないからの」

そう言ってカリンはゴロニヤーと鳴いた。それでいいのか、仙人

案外あっさりと言った神への謁見。その為の如意棒をひよいひよ
い上って、神の神殿へと上がる。

肌が黒く、ずんぐりむつくりの体型、丸い眼に厚い唇。ミスター
ポポが待ち構えていた。

「オマエ……ワルイヤツ、チガウ……カミサマ、アウ」

そう端的に言って、さっさと歩いていく。それに私は従うのだった。

一歩進むごとに威圧感が増していく。

そして、ミスターポポがそばに控え、姿を現したのは神様だ。実際に感じる気は大した事が無い。

だが、この威圧感はそれとは違う。気や戦闘力ではない。
それは神として生きてきた格であり、龍族としての力だった。

少し前に私はナメツク星にいき、そこで彼らの龍族としての力を
知り、魔術を習った。

単なる基礎でしかないが、それを習ったお陰なのだろう。私は神
様の異常なまでの能力を感じ取ることが出来た。

龍族の力は何ら特殊なものじゃない。非常に大きな魔術の素養。
ただそれだけだ。そして、それを扱う術が魔術。

戦士型のナメツク星人にも魔術の素養は存在するが、龍族ほど恵
まれてはいない。

ドラゴンボールや精神と時の部屋は魔術の延長上として存在する
ものであり、それ故に龍族の中でも才能ある者しか造り出せないも

のだ。

機能を限定した上で、様々な制約を求めた精神と時の部屋はそこまで難しいものではない。

だが、ドラゴンボールはそうではない。同じ人物に対する同じ願いは叶えない。製作者の能力を遥かに超えた願い、或いは魔術的に不可能な願いは叶えられない、使用後は1年の充填期間を必要とするなどと言う幾つかの制約を持ち、7つの珠を集めるという魔術的儀式、特定の呪文、7つの珠の共鳴、龍を模した魔術媒体による願いの成就と言う工程こそ必要になるものの。

願いを叶えるという一点に特化し、一部とはいえ概念事象せかいのほうそくさえ擦じ曲げて、ぶち壊し願いを叶える事を可能とするアイテムだ。

だが、彼は自身の低下した実力でそれを造り出し制御するだけの力がある。

もしも、これで実力を元に戻したときドラゴンボールを作ればどうなるのか。

考えたくもない。

ピッコロ大魔王が戦士型に近い、と言う事は無い。むしろ、ピッコロ大魔王は龍族のままだった。神の力の半分近くを奪っていったのだろう。そうでなければ、いくら紛い物とは言え同族を生み出すという龍族と同じ能力を持つことは出来ない。

ダイの大冒険で勇者のパーティが大魔王バーンを目の前にした時の絶望感に近い。

同じく年老いた存在で、目の前の存在が強いとは思えない。見えない。

だが、それとは別の方面から見ればそれは馬鹿げたほどに隔絶した実力者だ。

「……私が、地球の神だ。お前は何を望む？」

「1年後に襲来するサイヤ人への備えとして地球の戦士と神様の修業、そしてその監督だ」

「ふむ……何故そのような事を望む？」

「地球を気に入ったから……後は昔、知り合いが夢を見たからかな」

嘘じゃない。バーダックが悟空がフリーザと対峙する予知を見て、私にも話してきたのだ。私が3歳の頃に一緒に戦場に出て一緒に戦ったことから少しではあるが親交も存在したし、事前に私がベジータ王にエネルギーの存在を示唆していた為でもある。

「……もう一つ、分からない点がある。何故私を鍛える？」

「他が強くて、あんたがあっさりやられちゃ困るからな」

「……ふむ……ポポ、すまないが彼らを呼んできてくれ」

「ワカリマシタ」

014 | 一方その頃、下界では(前書き)

感想って、神龍に頼めばもらえるのだろうか。リアル友達からももらえない悲しさ。

014 | 一方その頃、下界では

- - SIDE third - -

「出でよ、神龍！　そして願いを叶えたまえ！」

アニスがカリン塔をせつせと上っている頃。

七つ集められたドラゴンボールを前に呪文を唱えるのはリュカ。

その呪文に応えて、世界を暗雲が覆い隠し、同時にドラゴンボールから神龍が出現する。

『さあ、願いを言え……どんな願いでも一度だけなら叶えてやる』
う

「えっと、ラディッツを甦らせてくれ！」

その願いに神龍は暫し、沈黙し、口を開いた。

「……サイヤ人の、か？　………了解した、暫し待て………体はその体か？」

「うん」

「………願いは叶えてやった、ではサラダバー」

そうして神龍はその姿を消し、暗雲も同時に存在しなかったように消えていく。

最後にドラゴンボールが各地にばらまかれて。

「細かいネタ置いてったよ」

あとにはリュカとラディッツ、何ともしがたい空気だけが残された。

「んう、はっ？………お、俺は死んだ筈では………」

そして、ラディッツは起き上がり。

「貴様が俺を甦らせたのか？　見たところサイヤ人………なのか？」

困惑の表情を見せる。それにリュカは肩をすくめて見せた。

「わたしはリュカ、お前と同じサイヤ人さ………ところで、肉体に不都合はないか？」

「いや至って………おい待てこの野郎」

訝しげに自分の体を見下ろしたラディッツが焦った声を上げる。

「……なんで俺が寝てるんだ？」

「……仕様です」

「……なんで俺が女になってるんだ？」

「私用です」

そう、ラディッツは女になっていた。

膝ほどまである艶やかな黒髪、切れ長の黒曜石の様な瞳。ちょっと悪役チックな姉御という感じで整った顔立ちなのだが、目つきと表情が悪い。子供が見たら確実に泣き出すレベルである。

180近い長身瘦躯にスレンダーな体つき。

スパッツタイプのアンダーウェアに旧型のプロテクター、ブーツ。カラーリングも元のラディッツのものに合わせている。

「……さ、さつさと元に戻しやがれ！」

「女の子がそんなはしたない言葉遣いしちゃいけません」

「俺は男だーっ!!」

叫ぶラディッツを見てひとしきり満足したリュカは説明の為に口を開く。

「名言入りました。これで勝つる！ まあ、そんなおふざけは置いといて説明すると。」

わたし達はカカロットの仲間になるつもりだけど、一応はサイヤ人のお前も仲間になりたい。となると、お前の肉体は邪魔なだけだろう？ こっちの一存で性転換させてもらった訳だ」

「……俺が、カカロットの仲間に、だど。ふん、馬鹿馬鹿しい……第一、こんな体にされてそう素直に従うと思うか？」

ギロリ、とリュカを睨むラディッツ。それを悠々と受け流し、不敵な笑みを浮かべるリュカ。

「思うさ、分かってるんだらう？ わたしには勝てないって」

「……ちつ、ふざけやがって」

ラディッツはスカウター無しには相手の実力を測ることが出来ないが、それでも自分の力量は心得ている。下級戦士の中でも最下級

に位置する自分は、他の種族であればともかく、同じサイヤ人に対しては勝ち目が薄い。女になったせいも、体にも違和感が残るし、勝てる気は全くなかった。

「まあ、反抗したければいいよ？　だけど……今のお前じやどう頑張っても無理だね、シユラ」

「シユラ？　なんだそれは」

「まさかお前、その姿でラディッツですとか言う心算じゃないよね。当然ながらお前の新しい名前だよ。んー、立場があんまり変わるものなんだし……お前は今日から孫悟空とラディッツの実姉、シユラだ」

「姿ばかりか名前まで………o r n z」

014 | 一方その頃、下界では（後書き）

漸く地雷の一つ、TSが爆発。お前かよ、そう突っ込んだ読者が何人いる事やら

015 | 強制イベント、イベントが強制なのか、強制的なイベントなのか

- - SIDE Rief - -

私とピッコロは比較的近辺の荒野にやってきている。巨大生物や危険生物の生息する未開拓地帯の1つで、ピッコロが原作で悟飯との修業場を選んだ場所でもある。

「おい、貴様……とりあえずこのガキも鍛えるんだな？」

「ん……えい」

近くに何も無いことを確認して、ホイホイカプセルを放り投げる。私が任されたのはピッコロと孫悟飯の修業。その為に用意されたのが、この小型重力力場発生装置搭載型鍛錬場。リユカが一晩でやってくれました。資材が存在しなかつた事と、小型化した事で【night knight】の1/10まで出力の最大値が低下したらしい。一応、ホイホイシステムを組み込んでもらっているから小型化しなくてもよかつた気がするけど。

「入って……あ、鍵はして」

「とことん説明責任を果たさん気だな、貴様」

呆れたように言いながら渋々、足を踏み入れるピッコロ。その腕に掴まれた孫悟飯はまだ目覚めそうにない。

「起きて」

「……ん、あう……お姉さん、だれ？」

「リーフ……君は？」

「そんごはん、よんさいです」

そう言っただけで礼儀正しく、一礼する。

「……そう、今日から1年間……私が君と彼を鍛える」

「え、で……でも、ぼくは学者に……それに今までそんな練習したことはないし……」

蹴り。とんでもなく軽い蹴り。それをまともにくらべて悟飯は地面を転がったのた打ち回る。

「何をしてる?!」

「黙って」

それだけでピッコロは何も言えなくなる。数年前の邪悪さこそ薄れているものの、まだ悟飯に対して親愛を抱いている訳でもないし、邪悪が消え去ったわけでもない。当然の反応。

「な……にを？」

「……さあ？」

こつちを怯えた表情で見ながら、悟飯は立ち上がる。

私が一歩近づくとびくりと震えて、手を挙げると小さく身構える。

「ほら、才能がある……勝ち目の無い相手だと理解した上で、立ち上がる。」

相手が構えたから抵抗する為に構える。

今まで練習してない？ それを補って余りある才能が君にはある。

たったの1年だ。その1年修行して、地球にやってくる敵と戦って、それが終わったら、学者にでもなんにでもなればいい」

アニス姉の口調と言葉を真似しつつ、悟飯に近づく。私に怯え、その視線は宙を泳いでいる。

「やりたくないならそれでもいい、だけど……私は、そして私の仲間は地球も大事だが、それ以上に命が大事だ。勝ち目が無いとなれば逃げてしまっただろうな。」

もしかしたら、そいつらの仲間になるかもしれない。

と、なると地球は大変だ。君の友達やお母さんも、皆が大変な目にあつ。

そうになったら、だれが地球を守る？」

「お、お父さんが守ってくれる!」

「残念だが、お前の父親はもうこの世にいない。」

そう言ったのはピッコロ。やはり、自分の実力で決着をつけたかったらしい。悔しそうに拳を握りしめている。

「ぼくが……やらなきゃだめ……なんですね？」

「そう」

「わかりました、やります……！」
決意を固めた悟飯はまだまだ怯えを隠せていないけど。
それでも、しっかりと私の瞳を見ていた。

「……さて、じゃあまず……1倍から」

「むっ……ぐうう……！」

「……ッ！」

私が機械を操作すると同時に、この鍛錬場内の重力が倍増する。
流石に戦士型のナメック星人とサイヤ人（混血）。結構簡単に耐えて見せた。

2人とも成長期。ピッコロもその見た目とは違って、まだまだ子供といつていい年齢で才能もある。

少し鍛えれば、それだけでサイヤ人に匹敵するレベルにはなるだろう。

「じゃ、基本鍛錬始めようか」

重力の中で軽く運動をする。まずはストレッチ。そして軽く遊ぶ
感じでキャッチボールとか。

「……はあ……はあ」

「……くそつたれ……」

たったのそれだけで疲れ果てた2人。10倍の重力は思ったより
きついらしい。

仕方ないので、少し休憩を入れることにした。

このままだと基礎を固める程度で終わるかもしれない。ピッコロ
はそれで構わないけど、悟飯には戦い方も教える必要がある。ちよ
つと方向性を見直して……。

「おお、やってんなー……」

「……はあ」

と、リュカに手を引かれたシュラが鍛錬場に入ってきた。楽しそ
うに笑うリュカとは対照的に、シュラはどんよりとした感じで肩を
落としている。

安心して、貴女の地獄はまだこれからだから。

そして新しく修行にシユラが、指導にリュカが加わることを説明して、互いに自己紹介をするという事になって。

「ピッコロだ……………目つき悪いな」

「そんごはん、よんさいです……………しつれいですよピッコロさん」
そう紹介する最後にはぼそと話す2人。キャッチボールや休憩を設けた時にどうやらそれなりに打ち解けてくれたらしい。しかし、その内緒話は筒抜けだ。

「……………俺はシユラだ。この星にカカロットがいると聞いてやってきた……………カカロットの姉だ……………その悟飯とは伯母さんと姪の関係になるんだが……………まさか、俺が伯母さんと呼ばれる日が来るとは、思いもしなかった」

「カ、カカロット……………？……………孫悟空の姉だと……………！？」

「わあ、シユラおばさんですか！」

驚愕するピッコロと、喜ぶ悟飯。

「それを見て、少し胸の痛くなったシユラなのであった」

「勝手なナレーションをするな！！」

016 | チート主人公とえばやっぱ、これだね (某CM風)

神の神殿はかつて無いほどの賑わいを見せている。

ヤムチャ対天津飯。

クリリン対餃子。

と言う2大好カード。東京ドーム地下闘技場で戦おうとすれば、清掃員の青年が見つけて、観客が押し寄せてもおかしくない。

そして、神様はミスターポポと一緒に鍛錬している。

後、何故かヤジロベエの連絡はつかなかった。

そして私は1人で5人の鍛錬を見ながら、ある程度の方角性を決めている。

基本的に足りない地力を伸ばしつつ、欠点を補って長所を伸ばしていくつもりだが、全員が違うタイプなのでやり難い。

「行くぜ！ 狼牙風風拳！」

ヤムチャは長所として技のキレ、スピード共に文句なし。欠点は荒削りで動きに無駄や隙が幾つか見える点だ。その殆どは無くせるものだ。ある程度時間はかかるだろうけど、才能の片鱗は見えている。それだけで今は押されている天津飯と互角以上になるだろう。

「甘いな」

その相手である天津飯は、高いパワーと無駄の少ない見事な体術を見せている。しかし、スピードはヤムチャほどではなく、多くの技と技量でそれを補っていると言った所だろう。後、気のコントロールに関しては少しヤムチャより劣っている印象だ。

「でやあー！」

クリリンは元々の小柄な体躯の為にリーチは短く、パワー不足も否めない。が、これを今更どうこうするのも難しい。長所としてはずば抜けて高い気のコントロール技術と見た目以上のタフさ。特筆すべきはその戦術構築力だろうが……これは実戦以外鍛えようもない。

「えい、はあ！」

餃子はクリリン以下のリーチとパワー。技量やスピードも高いとは言えず、技の数も少ない。

それでも彼が持つ超能力とそれを織り交ぜたトリッキーな戦闘スタイルは彼に十分な戦闘能力を与えている。惜しむらくはクリリン程の戦術構築力を持たないことか。超能力の強化を頑張っただけだ。

「ぜえ、ぜえ……ポポや、休まんか？」

「ダメ、ゼツタイ」

そして、神様は全てにおいてこの場の戦士全員を上回っているが、やはり寄る年波には勝てないのか、パワフルな戦闘は出来ないし、持久力においては圧倒的に劣っている。

と言うかミスターポポが軽いおにちくなんですけど。

そして、私も自分の戦闘力を上げる為に頑張っている。

「………投影開始」

そう呟いた私の周囲に降り注ぐ、数百の武器。剣であったり、槍であったり、斧だったり様々だが、その基本は白兵戦用のものばかりだ。時折、フランキスカとかの投擲用が混じっているぐらいか。

「壊れた幻想……！」

それらに込められた力が爆発。周囲に小さな破壊を撒き散らすが大したことは無い。所詮は爆竹レベルだ。

「………こんなところか」

当然のことながら、この技はオリジナルじゃない。正義の味方という理想もそうであろうとした経験もない。強いて言えば、戦隊ヒーローや仮面ライダーには少し憧れた時期があるぐらいか。

これは、神様から教わった物質召喚術を使い、武器を生み出しているだけだ。物質召喚とか名前だけ聞くとチート臭いものの、魔術でものを作るだけのものだ。それは術者の力量によって変わり、適当なもの、ピッコロが作った剣とか服程度は普通の術者なら普通に

作れる。

だから、ここに突き刺さっていた武器の大半は特殊な能力などなく。それに私が込めた気を爆発させることで【壊れた幻想】を疑似的に再現しているに過ぎない。

ただし私は弓が扱えないので手元で生成して投げつけるか、空中に生成して自由落下させる、或いは舞空術の応用で作りだすと同時に飛ばすぐらいしか手が無い。

「後は……あれか」

そう呟いた私の手元に生成されるのは私だけの宝具とでも言うべき、伝説の槍【*nameless*】だ。無銘の名を冠するという矛盾した槍は一見普通の直槍で、実際単なる直槍なのだけど。

その頑強さは折り紙つきだ。少なくとも私が本気で使っても折れるどころか罅一つはいらぬ。

因みに、どこが伝説の槍なのか。後々、フリーザ辺りを追い詰めた槍として語られるといいなあってな感じである。

特殊能力は今のところ存在しない。私にそれだけの実力が無いからだ。

それでも、いずれは宝具を造り出す事も不可能ではないだろう。一応ぼかして神様に話した結果、お墨付きを貰えたとし間違いない。

「……さてさて、時の運はどう動くかな？」

017「シユラ」(前書き)

またあつさりと金栗

017 | シュラ

シュラは、ラディッツと孫悟空の遺伝子（ラディッツの死体を運ぶ時についでに採取）とアニス、リーフとプロリーの遺伝子を使って生み出された人造人間0号だ。1号であるリュカとの大きな違いは、遺伝子操作しか行っていない為に永久式エネルギー炉やナノマシンなんてものは全く存在しない点。

そして、戦闘力の大きな差だろうか。リュカと比較すると、シュラの戦闘力は非常に低い。数値にして2000前後。サイヤ人の下級戦士としては高い戦闘力だが。

だが、シュラは急に跳ね上がった自分の戦闘力に満足できていなかった。初日こそ乗り気では無かったものの、その戦闘力が判明した次の日からは自主的に特訓を望むほどである。

カカロットと同じく、最下級戦士として生まれたラディッツはそれと同じく、親であるバーダックから相手にされていなかった。いや、息子としては扱われていたが、戦士としては扱われていなかった。

戦い方を知らず、尻尾の鍛え方すら知らなかった彼は辺境の惑星に送られて、戦い、惑星ベジータの崩壊を知った。その後はベジータやナツパと共にフリーザの部下として働いてきた。

何度も力不足を知ったし、その度に嘆き、2人に教えを乞うた。だが、ベジータもナツパも天才だった。最下級戦士で凡才の自分には理解できない高高度な教え。いや、教育としては底辺もいいところなのだが。どう努力しても尻尾の鍛え方すらよく理解できなかった。それをナツパやベジータはバカにし、ほかの仲間たちでさえ嘲笑う。

結果、彼の性格は歪んだ。自身がサイヤ人であることや、サイヤ人が宇宙屈指の戦闘民族であることを異様に誇り。また、勝てばいいというサイヤ人には珍しい思考を持つようになり。

ベジータ、ナッパ、ラディッツが揃っても苦戦するような惑星にカカロットを送り込んでも大した意味は無い。だが、それでも出来る限り仲間に引き込もうとした理由は自分より立場の弱い者を作るうという考えだったり、行動にもその歪みが表れている。

だが、今は違う。初日こそ嫌々した特訓だが、この身体は自分のものより遥かに強い上、自身が強くなったという実感も確かに得られた。尻尾の鍛え方もよく分かった。

ラディッツは、シユラの体を気に入り、強くなることの気持ちよさを知った。

今まで出来なかった事が出来るようになる喜び。
そしてそれを共に喜んでくれるものがある事の喜び。

「よし、かかって来い!!」

そう楽しみに構えるシユラ。目つきは悪いままだが、その顔に悪役チックな冷酷さや卑劣さはもう見えない。

「いきますよ、シユラさん!!」

「行くぞ、悟飯!!」

「がんばれよー」

「負けた方が食糧調達係だから……」

黒い海の中を揺蕩う私がいる。切れ長ながらの黒い瞳。特製ボデイソープのお陰できめ細やかな色素薄めの肌。華奢な体つき、身長166の長身痩躯。何故か鍛えても鍛えても見た目がそこまで変わらないのだ。これがサイヤ人の特性なのかどうかは知らない。

胸は並みと言いたいところだけど、バランスを見るとどう見ても貧乳です。どうもありがとうございました。しかも、申し訳程度には膨らんでるもんだから、それが尚更哀愁を誘う。

馬の尻尾を模した烏の濡れ羽色の髪を纏めるのは赤い結び紐。

そ男物の白いシャツに、だぼついた黒いズボンをベルトで止めているだけのラフな格好。首輪にはアニスの名前が彫られている。これは私を従属させるのは私だけと言う意味だ。

手には黒いフィンガーレスグローブ。厨二病のあのころを思い出すが、実はこれ、それなりに使えるのだ。

ここは、私の夢の中。

私の世界だ。

私の中に存在する常識、概念のみが力を持ち存在する、私だけの世界。

この世界に満ちるのは、私の気であり、私の魔力のその混合体。即ち、私の力そのものだ。

思考すると同時、黒い海が荒れる。

そうして形作られるものを見て、私は笑みを浮かべた。

この世界で不可能なことは、現実世界でも不可能で、可能なことは可能。

今私が思い浮かべたそれは可能と言う事だ。

技が一つ。

魔術が一つ。

たった一つでも増えればそれは私の手札になる。

例え、その手札が3でも13であっても。

ゲームと状況次第では唯一無二の切り札にさえなり得るのだ。

そして、私は目を覚ました。

眠気ですこし頭がくらくらするが、ぱちぱちと瞬きするとそれも消えた。

寝起きがいいのか悪いのか。

私がいるのは神の神殿に存在する居住区の一角だ。外見からつく大凡の予想通り、そこまで豪勢ではなく寧ろ清貧と言つべき内装と食事だった。

他の戦士たちは相部屋で泊まり込みだが、やはり女性と言う事で隔離された。

基本的にリーフと一緒に寝ていた私としては人恋しいが、流石にヤムチャやクリンと一緒に寝る訳にもいかない。

尚、私だけ消費量&食費の関係上、仙豆が用意された。どうやら、私は普通だと思っていたのだが、並みのサイヤ人以上の食事量が必要らしい。早いところ、貯金を崩して食料を調達してこようと思う。と言つかそうしないと仙豆が原作以上の速度でマッハ。

そして、約一月が過ぎて。

「さあ、はじめようか……」

今日は、私が四人を相手にすることになった。理由は単純。襲来してくるサイヤ人は2人。一応、何かあるか分からないので人数は

伏せておいたが、こつちだつてそれなりに数を増やしているのだ。それを上回る可能性はまずないだろう。多く見積もっても5、6名程度。

私

リーフ

リュカ

シユラ

天津飯、ヤムチャ、クリリン、ピッコロ、悟飯、餃子。

そしてそこに恐らくは遅刻する悟空。

つまりはまず間違はなく多対一の状況が出来上がる。連携技や合体技などと言う大仰なものはいらないが、他人との連携の経験があるか否か。それだけでも連携と言うのは大きく変わる。

そう言った経験を積ませようという考えだ。

私を囲むように布陣するヤムチャ、クリリン、餃子、天津飯。

最初に地を蹴ったのは、私の目の前の天津飯。それに遅れて、クリリンと餃子が挟撃し、ヤムチャが駆ける。

だけど、遅い。

天津飯の回し蹴り。それを私は片手で受け止め、同時にもう片方で衝撃波を放つ。体勢的に不安定だったせいか思ったよりも吹き飛んだ天津飯。

クリリンと餃子の蹴りを頭部で受け止める。何もしてないともいう。

そして、呆然としている二人の足をつかんで、地面に叩き付ける。最後に背後から迫ってきたヤムチャに肉薄すると同時に、その腹にひじ打ちを叩き込む。

たったのそれだけで、四人は悶絶している。無理矢理立てないと言うほどではないが、直ぐに立てるほどでもないのだろう。

まず、連携かどうかそのものを問い正したいところだったけれど、

初めてらしいので大目に見ておくことにした。

どっちにしろ、私が間違えていたのだろう。

甘くし過ぎた。

余りにも弱すぎる。

連携云々以前に、地力の底上げが必須のようだった。

黒い世界で。

揺蕩う。

私がいる。

その一方で、それを眺めている私がいる。

それはいつもと変わらない。

私が喰われていく。いや、私が喰らっている？

そのどっちかなどと言うのは私にはわからない。

私は神流。

私はアニス。

そのどっちがどっちでどっちが喰う方でどっちが喰われる方かなど分かりようも無いし、どっちにしても分かったところでどうしようもない。

ついでに言えばどっちもどっち。

どっちがゲシュタルト崩壊。

たまにあるよね。

ないかな。あるよね。

ないある。

どっちだよ。

そして、私は互いに喰らいあう。

約20年の時を生きた神流と

約30年の時を生きたアニス。

喰らいあって、喰い合って。

互いで違いを互いに補って。

私は、その時初めてアニスになった。

その、よしやく私に。

020「まだまだこれからさ」

「はっ……ドリームか」

昨日と変わらない神の神殿の居住区の一部、私に宛がわれた部屋で私は目覚めた。

今までとそう変わらないのに、どこか変わった風に見えるのは私が夢の中で神流とアニスとして同化した影響だろう。

「今まで相当無茶してたっばいな私は……」

ぎりぎりと締め付けられている尻尾を見て苦笑。すっかり痛みにも慣れたけど、こうして目にする痛みが増すと言っかぶり返す気がしてならない。

その機能をOFFにして抜き取る。それだけで私の体に力が漲り、気が溢れるほどに高まる。

それを完全に制御して抑制する。戦闘力にして4000前後で安定している筈。昨日までの私には確実に無理だっただろう芸当だ。

それは、色々な理由があったのだけど、面倒だからアニスと神流が合体したからで纏めておく。

「繰気弾……!!」

ヤムチャの繰気弾が

「ただただだっ！」

クリリンの拡散エネルギー波が

「そこだ、気功砲！」

天津飯の気功砲が

「ど、どどん波！」

餃子のどどん波が

「はっ！」

私のバリアーに掻き消される。

その一連の攻撃には確かな連携が見て取れた。まだ連携を始めて一週間ほど。

それでそこまで到達出来るのだから大したものだ。

後、今日気付いたのだけど、どうやら彼らは私が思っていたよりもよっぽど強かった。前、弱すぎると感じたのは私が手加減を間違えていたらしい。

そんな訳で、スカウターで計測した現時点における戦闘力は。

私が3700

ヤムチャは1207

クリリンが1322

天津飯が1498

餃子が1005

当然、戦闘力だけで戦いの全てが決まる訳でもないから全員の実力はそう変わらないけれど、私を知る限りではナツパやベジータを相手にする頃の戦闘力は2000前後だった筈。

このままいけばそれを大幅に上回って、戦えるかもしれない。

そろそろ、問題ない頃合いだろう。

そう判断した私は四人の特訓場所を、リーフ達がいる荒野に変えることを決めた。

ナメック星人やサイヤ人と比べて地球人は体が頑丈なわけでも重力に対する適正がある訳でもない。そんなことは当然の話だ。天津飯はなんかサード・アイとかなんとかという宇宙人の一種のようだけど、その性質は極めて地球人に近い。帰化したせいだろう。

彼らが重力力場内で修行を行うには基礎を固めなくてはならなかったのだ、こうして隔離して鍛えていたのだ。

つまり、ここからが本当の地獄だ。

よく見ておけ。海軍に行ってもこんな面白いトレーニングメニ

トーモ見らねんぞ。

021 | さらば私よ

「や、リーフ。元気だった？」

笑う私の目の前には口元に笑みを浮かべたリーフ。後ろには疲労困憊のZ戦士達。ここまで舞空術でほぼ全速力だったのだから当然と言えば当然だ。

「ん……元気………アニス、なんか変わった？」

いや、よく見てるねこの妹。昨日まではどうとも無かったような気がするけど、今日になって私の中の私の衝動が抑えられないというかなんというか。

「うん、変わった」

言いながら、リーフに抱き着き攻撃。ああ、ほんと私こんなことするキャラじゃなかったって言うか、今までの頼りになる姉的私はどこへ行ったというのか。

あれか、カニスが悪いのか。

「感動の再開のところすまないが……俺たちはどうすればいいんだ？」

照れたように後ろ頭をかきつつそう言ってくるヤムチャ。

「……なんでサイヤ人ってのは背が高い奴が多いんだ………」

「……元気出せ」

そして、私達を見て落ち込むクリリンとそれを慰める餃子。

「ん、あつちの……リユカが指導員」

「名前ではわからない」

「金髪ロリ」

「把握した」

グツ！と親指立てた天津飯はいい笑顔。まさかロリコンでは。いや、紳士なら構わない。だがもしもペドフィリアだった場合………いや、それは無い。単なる子供好きに違いない。

補足

- 1 / 読み飛ばしても構わない
- 2 / 間違っている可能性もある
- 3 / 私見や私情も混ざってる

ペドフィリア（病気）の条件

特定年齢以下の女性しか愛せない（好きになった女性がたまたまその年齢以下だった場合は除外）

ある一定の期間、特定年齢以下の女性に対する性的な衝動に対する実践や空想が頻発している。

特定年齢以下の女性に対する性的な衝動、空想により苦痛や対人障害が起こっている

また、その対象の年齢よりある程度年長

三次元のほうがいい。

ロリコン（風評）の条件

幼女好き

大体の場合不治の病的な何かだが、命に関わる事は稀
幼女を愛することはあっても、基本的に手は出さない

苦痛に思う人は殆どいない（基本的に手を出すのは二次元だから）
どっちかと言うと二次元

簡単に言うと直接的な苦痛や迷惑を被ったらペドフィリアで、そうじゃなければロリコンってことで。

補足終了

はっ……何かよく分からない電波が頭の中を駆け巡ってた。為になる様なならない様な、それでいてなんか投げやりな。

そして気づけば私は【night knight】の鍛錬場でリーフと向かい合っていた。体感的に重力は50倍くらいだろうか。

「鍛錬、鍛錬……たまにはのんびりしたいもんだけどね」

「……ん」

肯定の頷きと共に間合いを詰めるリーフ。私の拳をしゃがんでよけ、アッパーカット。スウェイバックで避けたそこに本命のサマーソルトが鼻先を掠めていった。

もう後一瞬遅ければ間違いなく鼻を持って行かれてた。

だけど、次は無い！

踏み込んで、同時に警告。サイヤ人の本能が、格闘家としての勘が危険を告げる。

それに従うままに片腕を上げてその踵落としを防ぐ。

リーフがした事はアッパーカットと見せかけてサマーソルト、と見せかけて逆立ちから踵落としという一連の流れだ。アッパーカットやサマーソルトは誘いでありながら、その技の変形として使える上でその威力も申し分ない。反則的なバトルセンスと言わざるを得ない。

「……ぐ、っ！」

そしてもう片方の手で気弾を放とうとして、その腕を軸足が弾いた。今度は私の腕に乗った片足を支点にサマーソルトしたのだ。今度はきれいに着地して、私に向かって手招きする。挑発だ。

お、落ち着け。あんな安っぽい挑発に乗るんじゃ……うおおおお

！！

「ッ」

リーフの左目が閉じる。私が口から吹いた唾が入ったか、防御したか。どっちにしても避けられない以上、片目を封じる技。圓明流的に言えば詭霞だ。いろんな意味で汚いが、気にしたら負け。

既に間合いは詰まっている。私の拳が空を切る。さっきと同じでリーフがしゃがんで避けたのだ。だけど、ここからは同じじゃない。リーフは軽くしゃがんで避けただけ。

そこに私の膝蹴り。絶妙のタイミングで放たれたそれにも反応して、両腕で防御。

その蹴り足がそのまま下がり、リーフの片足を踏みつける。

そして、残ったもう一本の腕でリーフの腹に掌底を叩き込む。同時に気を放って吹き飛ばす。

「っ！！……ごほっごほっ」

背中を壁に叩き付けられ、息が詰まったらしいリーフが地面に落ちるなり咳き込む。だけど、注意深く見て聞けば、それは演技だ。

「ごほっ」

演技がばれていることを悟ったリーフは一度だけ咳き込むと四つん這いのまま、地面を蹴った。

超低空、高速での肘打ち。それを私は前蹴りで迎撃しようとして失敗した。

肘の軌道が変わり、私の蹴り足に叩き付けられる。

その反動のままに跳び上がったリーフの蹴りを両腕で何とか止める。

そして、また間合いが開き仕切り直し。

リーフが気を高め、それに合わせて私も気を高めるのだった。

022「おい、主人公が最強じゃない系の不具合があるんだが？

「本気で、いく」

「……投影開始ッ！」

リーフのその戦闘力は確かにすごい。だが、戦闘力が戦力の決定的差ではないことを教えてやる！

「……はあッ……！」

短剣を手元で生成し投げつける。リーフが初めて見るそれに一瞬動きを止めるが、単なる短剣で大した気も込められていない事を察すると額で受けてそれを弾く。並大抵の武器じゃサイヤ人に傷もつけられないから当然の結果だろう。

だが、動きが止まった一瞬で私は間合いを更に広げている。

今度は槍。一見単なる槍だが、それに込められた気は並みじゃない。い。

投擲。

リーフはそれを片手で掴んで投げ返す。

「ちょ」

なんて、計算通り。

瞬間移動で、リーフの背後に回る。

その隙だらけの背中に気弾を叩き込もうとして、振り向いたリーフの胸に。

単なる気弾ではなく螺旋丸を模したもの。丁度いいから巨乳とかもげればいいのに。

リーフはその回転に数秒耐えたが、直ぐに耐えきれなくなり、回転しながら吹っ飛んだ。

なんか螺旋丸撃つたのに、スパイラルな気分。や、柳田ー！！

瞬間移動は確かに便利だけど、運動エネルギーが存在せず、その移動速度を攻撃に乗せる事が出来ない。それでも普通に相手の背後に回ったりするよりは隙も少なく、早い。

その特性を生かすのが、気弾での奇襲。悟空がやる瞬間移動かめはめ波とか。

「……計算通り、だったんだけどねえ……」

「……結構痛かった」

フリーザか。っていうか言うわりに結構びんびんしてるよね。ダメージ的には竜の騎士が極大呪文くらった程度だよな。

「……お返し」

そう言ったリーフの姿が掻き消えて、背後から衝撃。

吹き飛んで、壁にぶつかる前に、唐突に表れたリーフの肘打ちで叩き落される。

そして、そのまま地面にめり込んだ私めがけて踵落とし。両腕でブロック。防いだと思ったら、陸奥圓明流斧鉞でしたよ（二連続の踵落とし、痛い方が鉞らしい）。

慌てて気を放出して吹き飛ばす。

空中で体勢を立て直したリーフめがけて殴りかかる。それが空振りすると同時に、リーフの腹に吸い込まれる私の拳。それでも平然としてるリーフ。

そのカウンターで私の顔を掌底。同時に驚掴むリーフ。そのまま流れるように地面に叩き付けられて……巖風か！

慌ててリーフの腕を掴んで引き剥がし、膝を避け……様として失敗した。頭を少し動かしたぐらいじゃ、喉に落ちてきた膝を避けれるはずが無い。

「私の勝ち」

「……こう、さんだ」

こうも立て続けに慌てざるを得ないのはやっぱり力量差だろう。最初はリーフの知らない技を幾つか使って奇襲を成功させたもの、こうした真正面からの戦いになると圧倒される。

まあ、一回見ただけで瞬間移動を使えるようになる様なチートだから仕方ないような気もするけど。

戦闘力が戦力の決定的差ではないことを教えてやる！

なんて言っても、バトルセンスや技量においても負けてるから恰好つかないね。

023「ラディッツ シュラ」前書き

なんかのんびりしすぎてる気がするので修行篇は金栗。

ああ、金栗とかで飛ばした場所は気が向いたり、要望が有ったら過去編とか回想みたとして書く可能性もあります。

たぶん。

ラディッツ。

.....

最近、悟飯がピッコロにべったりだ。いや、兄弟っぽくていいね。俺もこんな関係を結べるのか、少し怖いが楽しみでもある。カカロットがいつ帰ってくるかアニス達に聞いておこう。

カカロットが帰ってくるのは再来月か。ベジータ達が来る直前か？

.....ラディッツの事も謝らないとならんし、姉として挨拶もまだしな。

そつえば結婚してるんだったな.....嫁にも挨拶に行くべきだな.....。

今のうちに文面を考えておくか.....。そつえば、カカロットの地球での名前は.....そつちで呼んでやった方が喜ぶだろうか？

さあ、来月頭にはやってくるだろうベジータやナツパをどう料理してやるべきか。

俺としてはラディッツの分を込めて殺してやりたいところだが、そうするとサイヤ人滅亡に拍車がかかるしな.....。

ああ、そつえばこの星には月がある。

.....厄介かもしれないな。

ぶっ壊しておこう。

023「ラディッツ シュラ（後書き）」

どうでもいいことですが、シュラっていう名前は、ラディツシュラッシュ シュラという感じで命名されたもので、ちゃんと野菜です。

リュカとリーフもちゃんと野菜です。

カリフラワーの一部をアナグラったり、もじったりして、リュカ。リーフ。という名前が生まれました。カリフラワーな理由は、形がブロッコリーに酷似してるからです。

024 | 戦力確認

今日は11月2日。明日にはサイヤ人が襲来するという事で、悟空を甦らせたけど、やっぱり遅刻するようです。

因みに、現在の戦闘力を簡単に言うと

私達三人は言うまでも無いので省いて、約で計算。

シユラ。改めてサイヤ人がチートだと思い直した。なんと戦闘力が200000まで上昇。だけど、ここでそんな実力見せられても困るので、力を軽く封印させてもらった。ここでもし私達が使うような制御装置を使ったら即座にはれただろうけど、魔術的な封印なので気付かれていない。

悟飯。戦闘力2900まで上昇。これが素なので怒り狂った場合、下手をすればベジータでも倒しかねない。でもまあ、特に問題なさそうなので放置。

ピッコロ。戦闘力4800まで上昇。もしかしたらナツパを一人で倒せるかもしれない。

ヤムチャ。戦闘力3300まで上昇。もうこれで栽培マンとか怖くないね。練気弾を応用して3つ同時に操る技を習得。今日から君はヤムロ大尉だ。いけっ、フィンファンネル！

クリリン。戦闘力3500まで上昇。拡散エネルギー波の応用技として一端上にあげて、上から気円斬の雨を降らすという拡散気円斬を習得。

天津飯。戦闘力5300まで上昇。まさかのピッコロ越え。あと百倍すればフリーザ様だ。応用技として連続気功砲を習得（ナツパ

戦時の片手気功砲を連発)。

餃子。戦闘力2600まで上昇。まさかの瞬間移動と気功砲を習得。実は一番成長してる。

そんな訳で、負ける気がしない。
悟空ー、別に急がなくていいぞー。

025 | 東の都は無事です

11月3日。私とリーフは東の都、上空に来ていた。スカウターを使って、リユカと会話する。

リユカは【knight knight】内で演算中だ。別にリユカ本体でも問題ないレベルの演算だけれど、無くせるリスクは無いに越したことはない。

「リユカ……所定の位置についたが、ルート変更は」

「無いな、もうじき視認できるだろ」

「……見えた」

上空からグングンと凄まじい勢いで落ちてくる宇宙船、アタックボールが二つ。やっぱり二人か。

それに合わせて私とリーフが気を開放する。

先に着弾したのは、リーフ。手が合わさると同時に瞬間移動。私達が修業した荒野に持っていく。

それを見届けた私に迫るアタックボール。

私はそれを手で止め損ね、数メートル押されてようやく瞬間移動。

そして、二つのアタックボールを並べて、少し待つ。

そこから出てきたのは禿げ頭に髭面の巨漢エリート、ナツパ。

そして、小柄な体躯にM字ハゲの異名を持つサイヤ人の王子、ベジータ。

両方とも原作と変わらない容姿だ。

二人は待ち構えていた私達に面喰らった様子だったが、直ぐに偉そうな態度に戻る。

「ふん、何故ラディッツが不覚を取ったかと思えば、サイヤ人が三人もいたとはな……」

「それも、女ばかり……戦闘力は大したことないが、サイヤ人再

興も夢じゃ無さそうだぜ？ ベジータ」

成程、面食らっていたのは自分達の知らないサイヤ人がいたからか。確かに今の私達の戦闘力は平均3000程度。ナツパやベジータからすれば雑魚もいいところだし、慌てる必要はどこにもない。因みに、リユカもこの場にいるが、金髪なのでサイヤ人としては数えられていない。

「……だが、カカロットが見当たらんのが気にかかる……それとラディッツの二の舞になりたくなければスカウターを外しておけ。こいつらは戦闘力を自在に操るようだからな」

そういつてスカウターを捨て、周囲を見回すベジータ。原作よりもどこか強かに見える。

ナツパもその言葉に従って、スカウターを外した。

「……さて、じゃあ手筈通りに行こうか……全員で巨漢を狙え！俺とリーフがチビを狙う！」

そして戦いの火蓋は切って落とされたのだった。

「……お前達は手を出すな、コイツは俺がやる」
言いながらシユラは一步を踏み出し、半身で小さく構える。同時に尻尾を左足に絡ませる。

ナツパは腰を落とし、どっしりと構え、尻尾を腹に巻く。

「ふん、下級戦士風情が生意気な口を………死にたいらしいな」
言いながら気を高めていくナツパ。大気がざわめき、地が揺れる。自身の力を証明するかのようなこの現象をナツパは気に入っていた。生意気な下級戦士はどんな反応をするのか。今、震えて謝って命乞いをすれば助けてやるうか。そんなことを考えつつ、知らず、口元が笑みの形に歪んだ。

所謂、どや顔だ。

「……その程度か？」
だが、シユラはそれを見ても動じない。腕組みしながら鼻で笑う余裕さえある。

嘗ての彼女が彼であった頃なら、間違いなく動揺しただろうが、今の彼女はそんな現象など既に通り過ぎている。

大気がざわめき、大地が揺れるのは、単純にナツパの技量が低いからだ。シユラが知る実力者、アニスやリーフは間違いなく目の前の大男以上の戦闘力の持ち主だが、その技量で完全に制御された力は特に影響を及ぼす事も無い。

「はあっ!!」

裂帛の気合いと共に地を蹴り、一瞬でナツパとの間合いを詰める。ナツパの目が見開かれ、驚愕で全身が硬直する。

その一瞬に叩き込まれる連撃。

金的を蹴り上げ、腹、鳩尾、喉に蹴りを叩き込み、顔面へ後ろ回し蹴りの五連撃。

そこでようやくナツパの反撃。右拳が唸りをあげる。シユラはそ

れを片手で流しつつ懐に潜り込んで肘、ついで拳を叩き込む。

そこに搦り上げる様なナツパの膝。それを掌で叩き付けるようにブロック。同時に地面を蹴って自分から飛んで距離をとる。

「ちょこまかと……ウザりたい野郎だ」

首や肩を回しながら、そう言うナツパにダメージは見られない。

シユラは舌を打って、言い返す。

「……ちっ、分かつてはいたが……タフな奴だ」

シユラは気を探ることが出来ないが、それでも昨日の計測では10000近い戦闘力だったし、ナツパはそれより大きく劣っている筈だ。知る限り、別れる前の戦闘力は5000前後。コールドスリプ装置を使ってきた以上、大きな戦闘力の上昇は無い筈だった。

それでもナツパを倒せないでいるのは、シユラがスピードタイプの戦士であり、パワーが無く。ナツパがパワータイプの戦士であり、耐久力に長けているという点が一つ。パワータイプの中でも特に耐久力が高いタイプでもある。

二つ目は、体格と体重の差。ナツパは縦にも横にもでかく屈強な体格で、シユラはそれより二回りほどは小さく、細い。まるで大人と子供である。

「仕切り直しだっ！」

言って、シユラは地を蹴った。同時にナツパも間合いを詰める。

先に攻撃を仕掛けたのはナツパ。大ぶりのパンチをかわしざま、肘と膝を叩き込み、挟み折る。

つもりが、折れなかつたうえにそのまま片腕だけで持ち上げられて地面に叩き付けられる。背中を強かに打ちつけて、一瞬息が詰まる。

呆れたくなるほどの膂力と頑強さだった。追撃のストンピングを転がって避け、体勢を立て直す。

そこを狙ってきた拳を避けると同時に、全力で鳩尾を殴りつける。相手の加速と、こちらの加速。

振り下ろし気味だった故に全身にかかった重さ。

沈み気味だった体勢からのショートアッパーじみた一撃。加えられた捻りが、筋肉の隙間を擦じ曲げて抉じ開けた。偶然が作り出した最高の一撃だ。

機を逃さないよう、更なる追撃をかける。

打撃が終わるとほぼ同時、全身の力を伝達させて全力で叩き込む。陸奥圓明流、虎砲。

そして、込められた気を開放した。

「うぐおあ!？」

光の帯を残して、数メートル後退するナツパ。その胸には拳型の陥没痕が刻まれている。

「はあ……はあ……」

シユラが出せる打撃の中でも最高の、いや、それ以上の一撃だ。ナツパも膝をつき、数秒の後、立ち上がる。平然としているわけではないが、致命的という訳でもないらしい。

「なんて野郎だ……」

今ので立ち上がってくるとは思っていなかった。仮に立ち上がったとしても既にそれがやっつというレベルだと思っていた。

だが、現実に目の前の男は戦う事が可能な状態で立っている。怖い。

彼女が彼であった頃、よく感じた感覚だ。

逃げたくもある。

「だがな……俺は決めたんだ……二度と逃げないって。今はいいラディッツに誓って……な」

だから、シユラは地を蹴って。

その瞬間に。

「はじけて混ざれ！」

煌々とした光を見た。

027 | V S ページ タ (前書き)

更新再開。

027 | VSベジータ

言葉と共に駆け出した、私とリーフ。リユカにはシユラ達のアシストを頼んでおいた。

「誰がチビだ、誰が」

「君しかいないだろう？」

ベジータは多少ではあるけれど、私よりも背が低い。リーフと比べると更に顕著だ。

「ふん、喜ぶがいい。貴様らの様な下級戦士が俺の様な超エリートに遊んで貰えるんだからな」

「下級戦士だの、エリートだの、下らないね……このアニスさんが現実を教えてあげよう。」

下級戦士でもエリートを超えられることを「

「私……リーフの方が強い」

「なら見せてやろう。超える事の出来ない絶対的な壁をな……」
ベジータが構えて、私達も同時に気を開放する。

まだつけっぱなしだったスカウターがその戦闘力を表示する。

ベジータ 18562

私 12000

リーフ 30000

「……おいイ、ちょっと手加減が謙虚すぎるでしょう（小声）」

「因みに、そういう私の戦闘力は現在の最大値だ。いつもの制御装置にラディッツに施したのと同じ魔術を加えている。」

「……私の方が強い（小声）」

「いいから、半分くらいにしておきなさい（小声）」

幸いにもベジータは分かっているらしい。

「ほう、下級戦士にしては出来るようだな」

とか言ってくれる。スカウターを捨ててくれて助かった。

「……ん」

ベジータ 18562

私 12000

リーフ 15000

よし。

「さあ、始めようか！」

まず動いたのはリーフ。それに合わせてベジータも間合いを詰める。

リーフが右ストレート。打ち下ろし気味のそれをベジータは頭を軽く下げる事で回避、そこに膝。

それを受け止めると同時に左ストレートをリーフに叩き込もうとして左手で流され、同時に顔面に迫る肘。

「……ぐうっ!？」

思った以上に重い一撃にたたらを踏む。顔をあげた瞬間、迫っていたのはアニスとその靴底だった。ドロップキックをくらい、更に吹き飛ばすベジータ。

その後ろに現れたリーフに蹴り飛ばされ、その先にいたアニスに叩き落され、最後に二人同時の踵落としを決められた。

グングンと迫る地上。

「ちい……面倒な」

慌てて体勢を立て直し、地面すれすれで急停止し、悪態をついた。どちらも自分に近い実力を有した上で、自分を大きく上回る体術を持った均整のとれた戦士だ。それが二人ともなれば、苦戦を強いられるだろう。しかも、連携もできるらしい。それがどれだけ厄介か。ナツパの馬鹿を相手しているのはどうやらもう一人のサイヤ人だけだが、それも一瞬見た限りではそれなりに好勝負をしていた。加勢は期待できそうにない。

逆に地球人は5〜6人残っている。栽培マンが丁度それくらい

たような気もするが、その程度で倒せる相手でもないのは分かる。

「くそつたれ……俺様がこんなにも早く……変身することになるとはな……」

大猿に変身し、この状況を打開する。

空を見上げるが、月が存在しない。

着地時の地点と現在の時刻から計算するに、既に月が出ていてもおかしくない筈だ。そして、公転を考えれば、今日、満月のはずだった。

だからこそ、本当なら一年未満でこれたものを一か月ほどぶらぶらと宇宙空間を彷徨い、先延ばしにしたのだ。

「……まさかつ！ 月を壊したのか……！」

考えられないでもない。サイヤ人同士であれば共に大猿化してしまふ為、月があるうがなかるうが戦力に大きな差は生まれない（ベジータは完全な例外）。だが、地球人を戦力として数えた場合、サイヤ人が大猿化すればそれだけでどうしようもなくなる。

「そうすると、俺様が来たのはアンラッキーだったな……選ばれたサイヤ人のみが惑星の酸素と気を混ぜ合わせることで、疑似的な月……パワーボールを作り出す事が出来る。」

そう、こうやってな……はじめて混ざれっ！」

そして、空に煌々と輝く白い月が姿を現した。

どくん、どくと血が疼く。本能が叫ぶ。解放を願う。

「はーはっはっは！」

俺様の勝ちのようだな……！」

パワーボールの破壊は不可能だ。一定時間、月としての役割を果たし続けるし、気弾や気功波による一撃も吸収して持続時間や範囲が伸びるばかり。

唯一、そのパワーボールを作り出したもののみが、解除を可能とするが。

全身に力が漲るのを感じ、ベジータは笑っていた。

それが、どんな結果を招くかも知らずに。

煌々と輝き、荒野を照らすパワーボールの光。それを目にした瞬間、シユラは自分の尻尾を引きちぎって、悟飯の尻尾も断ち切った。ベジータはグングンと高くなる自分の視点からそれを見ていた。いつものことながら、この時ばかりは相手を見下せるので結構好きな瞬間だ。

だが、ナツパの尻尾は切らないまま。ナツパも空を見上げて大猿へと変化する。

それを見て、ベジータは勝利を確信する。

サイヤ人が有する大猿形態は、通常では有り得ないほどの能力を発揮する。

まずもって、強靱な肉体はさらに強靱になり、十数倍程に巨大化する。それによる重量の増加。打撃力、攻撃範囲の上昇と、表面積の上昇による防御力の上昇。その上で打撃や気の攻撃を緩和する体毛に覆われており、生半可な攻撃は通用しない。

そればかりかサイヤ人の凶暴性や、気の絶対量も大きく増大する。そう言った様々な要因が重なることで実に十倍近い実力を発揮する事が可能となる。

スピードそのものが大きく低下し、舞空術も実質使用不可能になり、その巨体故に射撃のいい的であったり、ナツパやベジータのような特定の血を引く者でなければ理性を失ってしまうなどのデメリットもあるにはあるが、それを補って余りあるメリットだ。

二人の変身していないサイヤ人と地球人たちの攻撃は大したことはないし自分に近い戦闘力を有していたサイヤ人たちも大猿化してしまえば、そこまで怖くは無い。元々、大猿化した時の気の絶対量の上昇は個人個人の潜在資質によって大きく異なるという事もある

が、理性の存在しない大猿が先程までの見事な連携や体術を使えるはずもなく。大猿化を防いだなら、それはそれで戦闘力に大きく差がつく。

大猿相手に真正面から喧嘩を売るには大猿しかないのだ。

そして、その二人のサイヤ人を見て……背筋にぞつと寒気が走った。

サイヤ人としての本能が、びくびくと震えている。

強くなった本能がいつも以上に敏感に相手の強さを感じ取る。

片方の自分よりも長身だった女、リーフは尻尾を切り、つまらなさそうにこちらを見ている。

気のせいか、先程よりも威圧感が増している。

そっちじゃない。コイツも怖いが、そっちじゃない。コイツより怖い奴。

本能が叫ぶ。

パワーボールを見上げ、呆然としている自分と同程度の身長だった女、アニス。

壊せ。壊せ。壊せ。

大猿にさせるな。

殺される。殺される。

今なら、今なら？

殺される。

叫ぶ本能に理性でそれじゃ駄目だろ叫び返しつつも、咆哮。砲口。吐き出された膨大なエネルギーがアニスをけし飛ばそうと迫る。着弾した。

寒気は、消えない。

029 | ベジータの誤算、主人公の覚醒イベント

私がパワーボールを見上げた瞬間、私は私の世界にいた。

私の世界、黒い海からざばーんとゴジラよろしく登場したのは、大猿だ。

ちよつとその登場に虚を突かれて、私はその大猿の手の中にいた。掴まれた。

大口を開けて、こつちを飲み込もうとする。

これはまさか、私が大猿になるってことか？

そのことに思い至って気を開放、慌ててその手から脱出する。

喰われる、と本能おののこが叫んで、理性わたしが喰われたがっている。だけど、意思わたしは喰われたくない。

乙女が巨大な猿になるとかどんな拷問だっ！！

叫んで、全力で気弾を放ち大猿をけし飛ばした。お、必殺技が一つ増えたっばい。

そして、目が覚めた。と、同時に目の前に迫るエネルギー弾。慌ててエネルギーシールド展開。

着弾して消える。というか、目の前に着弾して余波がエネルギーシールドに来た程度。たぶん直撃してればただでは済まなかった。

そうして、巻き起こった砂埃が消えると見えたのは、大猿が二人……二匹というべきだろうか。

まあ、とにかくいた。多分ナツパばい大猿の方はシユラを中心にしてどうにか対処しているけれど、大猿ベジータは思いっきりこつちを見る。多分さっきのエネルギー弾もコイツの仕業。

動こうとした、その瞬間。

「え？」

私のバトルジャケットがケンシロウよろしくに裂けた。おおお、

大猿にならなくて済んだと思ったら、おっぱい丸出してどういう事！？

まだ一時的に全裸、その後大猿化よりマシだけど、どっちも私としてはアウトなんですけど！！？

同時に私から吹き上がる漆黒の気。それは、天を衝くかのように立ち上り、私の姿を隠す。

「……これが世界の修正力か」

……流石に乳首露出はどうかと世界が考えてくれたみたいで。じやあもとから露出させるなよとは言わないでおくよ。

まあ、そんな冗談は置いといて。

「……て、え？」

手が黒い。

慌てて魔術で手鏡を取り出してみると、目の周りを縁どった赤。

私の上半身の鎖骨下、へその上辺りまでを服のように覆う、黒い体毛。

どう見ても超サイヤ人4です。本当にありが……たくないよ！

大体、なんで胸”だけ”は露出してんの？

私露出狂じゃないよ！？

仕方なく、魔術で布を取り出して、胸を隠すようにして縛る。本当なら服を作りたいけれど、デザイナー的に自信が無い。

まあ、どっちにせよ、なんか超サイヤ人にはなれたっぽいし構わないでおこう。

気を操って、収束させていく……どうにも、私の戦闘力は数倍近くに跳ね上がってるらしい。扱いにくい訳ではないけど、私の制限魔術を無理矢理押しつけて戦闘力を発揮しているのでちょっとつらい。

「……ふん、何かと思えば……訳の分からん服を着た程度か」
ベジータの声が響く。

分かってはいたけど、大猿化したらしい……ってあれ？

主人公は？

「……さあ、仕切り直しだ」

主人公が来てないような気もするけれど、それは些細な事。

リーフは尻尾を切ったポイので、シユラ達の支援をしてもらう。

私は、ベジータの足止めだ。

……なんというのか、今の私からすればあんまりにも簡単すぎる
気がしないでもない。

「は、ハハハッ！ なな、何も起こらないから拍子抜けしたぞ？

さ、さつきまでは二人がかりだったが、いまばっ……今は一対一……

……しかも俺様は大猿だっ。勝てると思うのか!？」

……そう言うも、体は正直なのか、言葉の節々でどもるは囁むは
瞳にも微妙に恐れが見て取れる。

「……ま、仕方ないね」

なんというか、最近私は、性格と言うか考え方がお気楽な感じに
なっている。メッキが剥がれてきただけともいうけど。

もともと真面目に考えるのは苦手なのだ。

だから、そろそろはっちゃけていこうと思う。

「行くぞ、デカブツ……体と胸はデカければいいものではないと
いう事を教えてやる!」

前世で192センチ、Gカップだった私の悲哀、受け取るがいい
! ! !

叫びと共に地を蹴って、ベジータの目の前まで駆ける。

そして、その巨大な柱の様な脚に軽く蹴りを叩き込む。

メキイ、と嫌な音を立てて軋むのも柱の様だ。折れてはいないが、
罅くらいは入ったに違いない。

これで単純な肉体的能力だと言うんだから今の私もリーフ並みのチ
ートだろう。

あくまで肉体的には、だが。

「ぐうおおおお！？」

足を振り上げ、私を踏みつぶそうとするが、重量が足りない。

私が軽く掲げた片手に止められる始末だ。

力を込めると、その巨体が宙に浮く。直ぐに離脱して、体勢を立て直したベジータの目の前に。

蚊でも叩くように両掌で挟まれるも、私が横に伸ばした両腕がアツサリと止める。

「……オオオ！」

そして、口から放たれたエネルギー波が私を狙うが、腕を引くと同時に加速して避ける。

そこにベジータの拳が迫っていた。まるで巨大な壁が迫ってくるような威圧感だ。

流石に私が習った八極拳にも壁が咄嗟に迫ってきた時にどう防御するのかは無かった。元々防御って概念自体が無かった気もするけど。コマンドは攻撃のみ。攻撃⇨防御、防御⇨攻撃。なんか間違った攻防一体。

そんな訳で成す術も無く吹っ飛ばされた。

岩山を三つ四つぐらい粉碎してようやく停止。あんまりにも現実味が無かったせいかちよつと時間かかった。

ぶつちやけ、痛くなかった。

だけどもあ、一発は一発と言う理不尽を振りかざして。

一気に接近して顔をぶん殴った。

そのままナツパにぶつけてやろうとも思ったが、そうすると他の皆にも被害がいくので、車田ぶつ飛びで我慢した。

滞空中の大猿目掛けてコマンド K（スタグラ的コマンド）ジャンプして犬歯、牙を掴んで、地面に叩き付ける。

ベキイツと思ったより軽い音がして牙が真ん中あたりから折れた。思ってたよりも私は強くなったらしいので、牙をそのへんに適当に放って、少し様子を見る事にした。

「(…………くそっ、なんだと言うんだコイツは!?)」
ベジータは目の前の存在に混乱していた。

本能の警告は鳴り続け、ベジータとしても状況の拙さは理解していたが、それを打開する方法が分からない。

まずもって目の前の存在が理解不能なのだ。

尻尾がありながら月を見て、大猿化しない。

大猿を凌駕するパワーを持ち、大猿の一撃をもともしない耐久力、そして非常に高いスピード。

大猿を圧倒するただのサイヤ人など見たことも聞いた事も無い。

大猿がまるで相手にならない生命体など、ベジータは自身の上司であるフリーザぐらいしか思いつかない。

……フリーザ?

何かが引つ掛かる。

「(…………まさか…………奴は伝説の超サイヤ人だとも言っのか?)」

それならば納得も行く。

千年に一度生まれると言われる伝説の超サイヤ人ならば、サイヤ人としての戦闘能力を大きく超えていても不思議ではないし、文献そのものが殆ど存在しない為に、どんな特殊能力を持っているとも知れないのだ。

だが、気にかかるのはそうだとすれば何故、始めから全力を出さなかったのか。

何か理由があるのか。

それと、先程から聞こえる壊せと言う叫び。

何を壊せと言うのか。

いや、待て。

一つある。

「消し飛ばせ!」

パワーボールが。

思えば、あれを見て、奴は戦闘力を大きく上げた。

伝説と言われてもサイヤ人である以上、月に影響を受ける可能性は非常に高い。

つまりは、今まで抑えていた伝説の超サイヤ人としての一面がパワーボールを見たせいで強まった可能性もある。

手加減していたのだ。理由までは分からないが。

そして、手加減していることなどから考えて、恐らく殺す気はない。

壊せと言う本能の叫びはそれを示唆していたのかもしれない。

そのことにもう少し早く気づいていれば、歯が一本折れずに済んだだろう。

少し、後悔した。

031 サイヤ人帰還

大猿へと変身し、暴れまくるナツパ。

「は！」

唸りをあげる拳を避け、リーフが気弾で牽制するが、全く効いた様子は無い。微妙にウザったような視線を向けて腕を振るうが、それも当たらない。

「こつちも忘れるな！」

注意がリーフに向くと、リュカが気弾で牽制し、注意力を分散させる。

その隙に他の戦士たちは準備を済ませている。

「悟飯！」

「ピッコロさん！」

「爆力まはー！」

悟飯とピッコロの同時爆力魔波。実はピッコロが使える技の中では最強なのだが、貫通力においては魔貫光殺砲に負けるし、範囲や燃費においては爆烈魔光砲に負ける。

普通に放つにしても長い溜めが必要である為にあまり実用的ではない。

と様々な欠点を抱えながらも、その威力は気功砲さえ凌駕する。

「行くぞ、皆！」

「かめはめ波！」

クリリンの号令を合図にクリリン、ヤムチャ、天津飯、チャオズの同時かめはめ波。ピッコロ達の爆力魔波を後押しする。

それを迎え撃つはナツパの口から吐き出された気弾だ。

相殺されて、空中で爆散する。

その隙を狙って、シユラが気弾を解き放つ。この一年で修行し編み出した新必殺技。

「ウィークエンド・キャノン！」

大猿ナツパの顔ほどもあるそれはナツパが迎撃するまもなく着弾する。

直前で防御されるものの、それが目的だ。

そして、その瞬間にリーフとリュカがナツパの尻尾をぶった切る。直後に上空のパワーボールも弾けて、ナツパは元の姿に戻り、そのまま崩れ落ちた。

パワーボールが消えると同時に私の中で漲っていた力は消えさつた。たぶん外見も元通りだろう。ベジータもナツパも元に戻ったらしい。ナツパはどうやら気絶しているだけで、死んではいない。

ベジータはカツと目を見開くと、空高く跳び上がった。嫌な予感がする。

「この星ごと……消えて無くなれ！ ギャリック砲　！！」
放たれたのはギャリック砲。原作においては悟空が死ぬ気で押し返したけれど、ここには悟空はいない。というか今更来てもらっても困る。

かといって今の私じゃあどうにも出来ない。

仕方ないので、気を少しだけ解放して

「……バスターキャノン！！」

気弾を撃ち出した。

出来れば拮抗させたかったけど、そこまで器用な真似が出来るはずも無く。

「うばあー!？」

直撃した。なんか変な悲鳴を上げて、更に空高く舞い上がってベしゃつと地面に落ちてきた。

「くくく……ははははっ！」

よろよろと立ち上がって、笑いながらナツパとスカウターを回収

して宇宙船に向かっていく。

高笑いを残して去っていくサイヤ人。それにとどめを刺そうとしていたクリリン達はリーフやリュカが止めてくれた。

殺すのは無し。サイヤ人がまた滅亡に近くなる。

「嵐のような人たちだったね」

ヒーローものっぽく締めておこう。

032 | サイヤ人襲来

まあ、そんな感じで地球の危機を救った私は、皆を【night knight】に招いて祝勝パーティ。リーフやリユカを中心に盛り上がっている。

私はちよつとベジータの大猿の牙（大猿化した状態で別れた部分は、元に戻ってもそのまま）を忘れ物したので、取りに荒野に帰ってきた。

そしたら。

「オメエ、サイヤ人だな？」

なぜか悟空に出会った。つか、今更来たのかお前。ああ、でも原作でも三時間待ったりしてるし有り得なくもないか。

多分もう、飯そんな残ってないぞ？（勿論私の分含めて）

「皆をどこへやったんか、聞かせてもらっぞ」

「……私の宇宙船にいるが？ああ、そういえば息子が泣いてたぞ？」

「そうか……わりいけど手加減する余裕はねえぞ！」

そう言っただけで殴りかかってくる悟空。あれ、何事？

躲しつつ、さっきまでの会話を思い出してみる。微妙に悪役っぽいというか、勘違いしてもおかしくはないかな？息子の一文がいらなかったね。

こんなことならいろいろ説明しとけばよかった。

「界王拳……！」

悟空が赤いオーラを立ち上らせて、突進してくる。それもあっさり回避した、と思えば急激な方向転換と同時に突進。速度もさらに上がっている。

「三倍だー！」

「やば……」

私の力は基本的に封印されている。自由意思でどうにかしている

わけではないので、封印を外す工程が必要になる。故に、この一撃は甘んじて受けるしかない。

吹っ飛ばされた。そして追撃とばかりに拳を叩き込まれて岩山に叩き付けられた。

「さあ、言え……皆を、悟飯をどこにやった!？」

まあ、私に非が無いとは言わないけども。

一方的にやられて、はいそーですかと流せるようなヘタレでも聖人でもないんだ。

「はあっ!!」

気を開放した衝撃波で吹っ飛ぶ悟空。余波で岩山が崩れ落ちたがどうでもいい。

反撃の悟空の拳を避け腕に抱き着いて、それを軸に回転。膝蹴りが悟空の側頭部に直撃する。

手加減はしたが、いい具合に脳が揺らされたらしく悟空は簡単に気絶した。

界王拳がまだ持続していればともかく、使っていない状態ではどうしようもないという事だろう。

とりあえず、牙を回収して、帰ることにした。

033 | シリアス（笑）

あれから、悟空を連れ去って、親子の感動の体面とか、生き別れの姉と弟の感動の再開とか。

いろいろと必要なイベントをこなした後で。

「はい、という訳でナメック星に行こうと思います。異議のある人は？」

「いやいや、ちょっと待ってくれよ。よく分からないけど、星ってことは宇宙なんだから……？なんでそんなところに行く必要があるんだよ……旅行かなんかか？」

そついうのはクリリン。

「んーまあ、それでいいや」

「……それでいいやという事は違うという事だろう……何を考えている？そもそも一年前に姿を見せた時から貴様たちの考えが全く読めん。」

あのサイヤ人とやらが変身した猿の様なアレはどう考えても俺達の手に残る怪物だった。

貴様はそれを簡単に倒した。

元より俺達の助力は要らなかつただろうに、わざわざ俺達を鍛えてそれを求めたのは何故だ？」

腕組みしながら言うのはピッコロ。既にそれなりの信頼関係は築けているが、少しの不信感はあるらしい。というか、よく見てたな。

「確かにそう考えると奇妙な点が目立つな」

同意するのは天津飯。各々で想像を膨らませたりしているのかちよつとまずい空気になってきた。

……仕方ないか。

「楽しいから、じゃだめかね」

「だめにきまっています」

悟飯からもだめだしされた。

「……私はね、ハッピーエンドを夢見てる。誰もが笑って、時にはちよつと不幸になって。でもそれも笑い飛ばして、笑い過ぎて泣けるような、そんな夢みたい現実を。」

最初は、私の幸せに皆を利用しようと思ってただけ」

その言葉にしーんと静まる皆。いや、シリアスは苦手なんで、少しは笑い飛ばしてもらえると助かるんだけど。

まあ、今でもそう思っていないと言えば嘘になる。

私は、私の家族とジューズの皆がいれば幸せだ。でも、その幸せを壊しかねない奴がこの世界にどれだけいることが。

だけど、その尽くは悟空達が打ち砕いてくれる。

そう盲目的に信じていられるほど私はバカじゃない。

私がいる。

リーフがいる。

他にもいろいろな相違点がある。原作開始の前から多くあった変化。その一つ一つが何処かでバタフライエフェクトを起こし、原作以上の苦境になるかもしれない。

そうならないように、私達は努力して強くなり、悟空達に干渉していた。死なないように。私達が平穏で暮らせるように。

転生して、歴史にifがあると知り、トラックに轢かれた時の事を後悔していないと言えは嘘になる。庇わなければ、恋人は自分で助かったかもしれない。そうすれば自分は死ななかつたかもしれない。

そんなことを考えなくてもない。

あの時、一緒に助かろうとしなければ、恋人だけでも助かったかもしれない。あるいは少し方法を変えれば一緒に助かったのかもしれない。

私はこうして転生したけど、恋人はどうなのだろうか。転生したとして幸せなんだろうか。

そんな意味のないことも考えて、後悔したことも何度かある。

そうして助かった世界の if を夢見て、その幸せな世界を認めたくなくて飛び起きたこともある。

だからだろうか。

私はひどく自分勝手。

ハッピーエンドが恋しくてたまらない。

少しの不幸とそれを笑い飛ばせるだけの幸福に満ち溢れたハッピー

ーエンドが。

他の誰かにバットエンドが訪れようが知ったことじゃない。

私は自分が、皆が笑っていられるならそれでいい。

そう考えて、そう思って、そう行動してきた。

地球の皆にあったせいなのか、お蔭なのか。私は転生の前の自分を少しだけ思い出して。

今の私が醜く見えた。力を失くして犠牲になって、迎えるバットエンドが怖くて。

私だけが幸せになれないなんて未来が怖くて。

でも、今は違う。

彼らも平穏に暮らせるように、私が笑っていて、そのそばに彼らもいるように。

仲間が増えただけ。私の内心が少し変わったただけだ。

やることは変わらないけれど。

口に出して言ってみるのも悪くは無い。

「だけど、今は違う。皆も、私のハッピーエンドの中で一緒に笑って、泣いて欲しい」

少しだけ見えた私のハッピーエンド。

それに向かってもう少し努力してみよう。なんて思った。

034 | 元、戦略家は伊達じゃない、のかー？

そんな訳で、一応心情を簡潔に吐露してみた訳だけど。

爆笑されたり、それを慰められたり。まあ黒歴史的なものが増えたけど、皆私を認めてくれるらしい。

「だが、そのナメック星とやらに行つてどうなるんだ？」

そうというのはヤムチャ。

「私達サイヤ人を従えている一人の宇宙人がいる。名前はフリーザ」

『……悪い事は言わん、フリーザには手を出すな』

そういつて響いてきたのは、ナレ、界王の声。一瞬、ナレーションと間違えた私は悪くない。

「誰だか知らんが、放つて置く訳にはいかない……フリーザが不老不死を求めているのは割と有名な噂話だったが、地球にあるドラゴンボールと同じ様なものがナメック星には存在する。

なんでかと言うと、もともとドラゴンボールはナメック星発祥の魔術礼装で、地球のものじゃないからだ。そして、それを作り出した神様もナメック星出身のナメック星人だ」

ちなみに、この事実は既に神様には話してある。ちょっと落ち込んだみたいだが、原作と同じくそこまで重くとらえてはいないらしい。

「……それはつまり、俺もナメック星人と言う事か？」

道理で俺だけ……他の奴らと少し違うなーと……魔王だから当然だと思つていたが……」

そして、やっぱりもとは同じ人物と言う事か、似たような反応を見せるピッコロ。ちよつと赤くなつた頬が可愛い。

でも今は、そんなことはどうでもいい。重要な事じゃない。

狙い通り、ピッコロを会話に集中させず、今は畳み掛ける時。ピッコロとは違い、ここにいる殆どが馬鹿という訳でこそないが異常

なままでな聡明さを持つわけではない。ちょっとばかり言ってることが矛盾しても勢いで十分押せる。

「そーなるね……そして、多分あのサイヤ人たちもそのことに気付いただろうし、フリーザに伝わるのも時間の問題なんだよね。

不老不死になったのが単なる雑魚ならどうとでもなるんだけど、フリーザはあの大猿が相手にならないほどの化け物。正直、私やりーフ（黒髪）でも勝てるかどうかわからない。

一番の問題は、それでも全力を出して無さそうな感じな部分……今は殺せるけれど、不老不死になんてなられたら……どうしようもなくなる」

『それも、確かにそうじゃ……仕方あるまい』

界王様の後押しもあってそれで納得した皆。

ナメック星行きが決まったよー！

多分、原作よりはフリーザ遅れるけどね。

23 | クレス

おれの名前は、クレス。名前からは少し想像もつかないかもしれないが、サイヤ人として生を受けた元日本人だ。

黒髪黒目に身長は154センチ。一見すれば女にも見える、所謂男の娘の顔でよかったと思う。最下級戦士の生まれながら、幼い頃から修業しまくった為に戦闘力は非常に高い。思えばそれで成長阻害されたのかもしれない。

まあ、その戦闘力と忠誠心を買ってもらって、フリーザ様の部下として働いている日々だ。一応立場上はフリーザ様の腹心で、ギニューとほぼ同等の権限を持っている。

逆らう気は毛頭ない。いくらおれが高い戦闘力を誇っていたって、戦闘力28万じゃあフリーザ様相手に敵う筈もないからだ。まあ、それ以上の理由もあるけど。

恐らく、超サイヤ人に目覚め、フリーザ様を超えたとしても、逆らわないだろう。

フリーザ様は、そのドSで冷酷な性格から残虐な印象を受けがちだが、その実部下に優しくカリスマに溢れた指導者なのだ。

失態は三度までであれば許してもらえ、少しばかり無礼を働いても、実害が存在しなければ、許してもらえる（ギニュー特戦隊とか）という寛容さ。無意味に部下を殺すレッド総帥とか、ベジータ、ベジータ王とは大きく違う。

サイヤ人が既に数えるほどしか残っていないとはいえ、最下級戦士の一人に過ぎないラディッツの顔と名前を覚えている。

部下の功にはしっかりと報い、労う事も欠かさない。

おれも、何度か功をあげ、望みを叶えて貰ったことがある。

その時の事は、口に出すのも恥ずかしい。ちなみに、フリーザ様

がドン引きした。

まあ、とにかく、フリーザ様は最高の主だ。今日は、ナメツク星の座標と詳細な情報を手に入れたという事になっている。これでフリーザ様の願いである、不老不死が叶えられる。

ついでに、おれの願いも叶えて貰いたいので、そこはお願いしておこう。

二年くらい前に願いを叶えようとして返り討ちにあったけど、今回はそんな失敗をしないように頑張ろうと思う。

035 | 再びナメック星へ

エイジ762

11月6日

今日、ナメック星に旅立つ事になった。誰も入院せず、宇宙船に
関してもそこまで問題は無い。コールドスリープ装置を寝床代わり
にすれば、ベッドが足りない問題も解消できるだろう。

問題は、食糧だ。平均的なサイヤ人の倍は食べる私とリーフ。サ
イヤ人らしい大食いを見せる悟空と悟飯、リユカにシユラ。平均以
上には食べる天津飯とヤムチャ、普通に食べるクリリン、餃子。水
だけでいいピッコロ。

間違い無く一日やそこらで食糧が尽きる。

ワープ航行なんじゃないかと言いたくなるレベルの航行速度を持
つ【night knight】を使うなら、通常でも六日から八
日、全力航行で一日や二日でナメック星まで行くことが可能だが、
道中で修行もしておきたいので、日程は1か月前後を目処にしてい
る。

それが可能になったのはいつの間にか、カプセルコーポレーシ
ョン勤務になっていたリユカのお陰だろう。

カプセルコーポレーションに僅かなら技術提供し、多くの資金と
資材を見返りに貰ったのだ。

それにより完成したのが、食糧保存用大型コンテナ。機体下部に
専用の接続用端子を増設して取り付けられるようになっていて。冷
蔵や常温保存などと様々な食糧保管が可能で、エリア分けされてい
るため、見た目よりも食材が入る量は少ないが、それでも私とリー
フが二か月は補充しなくて済む量が入るといふ。

その姿はなんとというか、ビッグロがビッグ・ラングになった感じだろ
うか。微妙にアンバランスだ。アレはまだクローアームがあるお陰
で格好良くも見えたが。

流石に機動力も落ちるらしい。ついでに作った補助スラスターを使えば通常通りの航行は可能だが、流石に元の通りの軽快な戦闘機動は不可能だ。という事らしい。

まあ、とにかく、一晩でやってくれたリユカのお陰で、私達は出発できるのだ。

リユカが悟空やピッコロ達の修業を担当してるため、鍛錬場は使用不可。私はリーフと一緒に動力部で気を与えつつ、パワーボールを作れるように頑張っていた。

限られたサイヤ人にしか作れないと言われるパワーボールだが、別にエリートでも王族である必要性も無い。単純にそのレベルの戦闘力を有する者であれば、誰でも扱えるような簡単な技だ。

まあ、一部のエリートや王族にしか伝承されてない技だから、間違ってもいけないけれど。自身の気と酸素を混ぜ合わせ、1700万ゼノ以上のブルーツ波を発生させることが出来れば、それでパワーボール完成だ。

リーフはそれを自身の気と酸素を混ぜ合わせると言うベジータ（原作）の発言をもとに自力でこの技に到達したのだからチートと言わざるを得ない。

そして、私がパワーボールを頑張って会得しようとしているのも訳がある。

別に大猿になりたいわけじゃない。寧ろなりたくない。

私が変身する前にもリーフが既に見せていた（006参照）変身は、リーフ曰くサイヤパワー解放。

月を見たときに発生する大猿化を抑え込み、支配下に置くことでその力を自分のものとする変身だ。

理性はそのまま、大猿並の膂力を得たうえで、スピードはむしろ上昇し、防御力もそう変わらず、気の絶対量は増大というチート状態になることが出来る。

だが、大猿化という現象を抑え込むこととなる形態であるため、尻尾や満月無しにはどうしようもない形態でもある。いくら戦闘力が高かろうと、超サイヤ人のように手軽になれるものじゃない。

戦闘力の低い私としてはパワーアップの手段は多い方がいい。故

に限られたものであっても習得しておいて損は無い。

抑え込むことは一度出来たし、感覚も覚えていてる。後は大猿化するだけだ。

まあ、失敗してもリーフが止めてくれるだろうしね。

037 | 不足？いいえ、不測です

そして、一か月が経ち、ナメック星が見えた来た頃、私以外は目覚ましい成長を遂げていた。

私はパワーボールを使えるようになるのに必死だったけど、リーフモリユカも新技を開発したらしいし。そんな訳でまた戦力の計算をしてみた。約だけどね。

シユラが戦闘力1000000以上に。設置型スカウターが壊れたから間違いない。他の追隨を許さぬ弱さと言われていたラディツツはどこに行ったのか。技もいくつか習得したっぽい。

まあ、それ以上に問題なのが、私の封印をシユラが自力で解除したことだろう。正式に魔術を習ったわけでもなく、勘と勢いでだ。多分、私以上に魔術に向いてるんじゃないだろうか。悔しいから言わないけど。

悟空は戦闘力110000。まあ、原作よりは強いものの、そこまで上昇した訳ではない。ただ、界王拳は未使用だし、体内における気の扱い方が非常に上手い為に、数値以上の戦闘力を発揮するという技巧派なのは変わっていない。

悟飯の戦闘力は35000。原作よりもだいぶ強くなったけれど、学者になりたいとのことだったので、修行よりもリユカのスパルタ教育を重視している。ある程度は強くなってもらうけど、嫌なら戦わなくてもいいとだけ言っておいた。実際、セルとは戦わなくて済むようにするつもりだ。来るかどうかも分からんけど。

そしてその兄弟子、ピッコロの戦闘力は420000。異常なまでの成長を見せてくれたけど、それに負けず劣らず地球人の皆も成長している。この一か月地力をみっちりあげたんだらうか。

クリリンが戦闘力210000。

ヤムチャが戦闘力230000。

天津飯が戦闘力220000。

餃子が戦闘力120000。

誰もフリーザ第一形態には届いてないけど、それでも全員がギニーを倒せるレベルってどういうことなの……？

私の一か月の成果

パワーボール及び、サイヤパワー解放を習得。

自分に施していた魔術的封印が八つから四つに（一つが効率の上昇による減少、三つが周囲のインフレによる解除）

戦闘力が12000 750000にまで上昇（封印解除によるもので、正確には上昇ではない）

本当に………どういう事なの………？

038 | 想定外（前書き）

何が想定外って、連続更新が。

なにこれ、不定期って大体増えるもんじゃないよね。

減らそうと思ってても減らない不具合。

でも勢いだけで書いてるから書くのが楽しい。

「馬鹿なっ!?!」

ナメツク星についた私が見たのは、黒煙を上げる村。そしてナメツク星人に襲い掛かるフリーザ軍兵士達。戦士族のナメツク星人が抵抗するも、多勢に無勢と言った感じで押されていく。

早すぎる。今は12月10日……ベジータから情報が行った訳でも……待て?

少し前、ナメツク星を襲ってきたサイヤ人が、いたんじゃなかったか?

そいつが、フリーザ軍兵士であつたとすれば、それから帰還し、準備し……十分すぎる。むしろ今日でよかったレベルじゃないか。下手をすればもう既に願いを叶えられていてもおかしくは無かつた。

「……全員、手分けしてこの星を探索する。あのピッコロそっくりのがこの星の原住民、ナメツク星人。で、あの趣味悪いジャケツト着てるのがフリーザの私兵だ」

「……了解」

「んじゃ、わたしは【night knight】を守っておくから」

リーフとリユカが頷いて。

リーフが一人で先行する。

「ち、胸糞悪い……感傷に浸る間さえないとはいな……」

「ま、待って下さいよピッコロさん!」

そう吐き捨てて飛んでいくピッコロとそれを追う悟飯。

「……確かに気分のいいものじゃないな」

「ああ、行くぞ」

「俺達も行こう」

「うん」

ヤムチャと天津飯と一緒に、クリリンと餃子と一緒に飛び立って、各方面に散っていく。

「……行くぞ、悟空」

「そうだな……お、お姉ちゃん？」

「くっ……呼びにくければシユラでいいぞ」

どうやら私と同じく弟萌えに開眼したらしいシユラ。微妙に悔しそうな顔をしていることから、困惑した悟空もいいが、それをさせてしまうのはどうかと言う葛藤に襲われているっぽい。

両方とももう結構いい歳とか言っちゃだめだ。シユラはまだ生まれて間もないし。

「じゃ、行くか」

「おう……シユラ」

ひと悶着あったものの、飛び立った二人をしり目に私はリーフの向かった近くの村へと瞬間移動。リーフはどうやら忘れていたらしい。

「死ねえ！」

そう言っただけで拳を振り上げたフリーザ軍兵士とナメック星人の間に割り込む。

「お前がな」

有言実行。手からエネルギー波を放ってけし飛ばす。

そして、同時に手に気を溜め、トラップシューター。

一発一発が統制されたそれは、村にいたフリーザ軍兵士を全て吹き飛ばした。

戦闘力の差ってすごいね。

「……ごめん、遅れた」

そこで漸くリーフが来て謝罪する。

「構わないけど……さて、どうしようか？ ……おい、長老いる？」

ドラゴンボールは無事？」

「……その声はアニスか……まあ、ドラゴンボールは無事じゃが

……村のものは何人か、のう。まあ、ワシらが助かっただけましじやが」

「おいおい、てめえら……何のんびり昼寝なんかしてやがんだって……死んでる……」

そういつてやってきたのは、新手のフリーザ軍兵士。見る限り、原作には登場しない兵士らしいけれど、その威圧感はかなりのものだ。

「……ナメツク星人如きにやられたって訳じゃ無さそうだな……というかその外見……サイヤ人が貴様ら……まあ、例えサイヤ人でも俺を超える事なんか出来ないがな……どっちも俺の好みだし……ここで倒して乳揉んでおこう」

思春期の少年かお前。そこはせめて奴隷にしてやるぐらいは言えよ。いや、なりたくはないけど。

いまいち危機感でないだろうが。

「アニス姉の胸は私のもの……そして私のはアニス姉のもの」
いや、リーフのものでもないし胸を貰った覚えもない。いや、欲しくないわけでもないけど（豊胸の意味で）

「ふふん、俺様の戦闘力は120000……しかも俺は変身をあと一回残している……この意味が分かるかな？ つまり、その姉とやらとお前の胸は俺のもの、という訳だ……！」

確かにギニュー並みの戦闘力に変身を残してるとなれば、それなり以上の実力者だが。

そう思えないのは私の周囲のインフレか、それとも目の前の男の馬鹿さ加減なのか。

「……あくまでそこに拘るのかお前」

「私のものだと、アニス姉のものだと言った……！」
リーフもそこで張り合うな。

「さーて、強気なのは結構だが、君たちの戦闘力は……？」
ピピピピ……ぼんっ！

当然ながら、私もリーフもスカウターの計測外の戦闘力なので計

測しきる前に爆発する。

「へえ、中々出来るみたいだけど、俺に勝てるか？」

言いながらその姿が変わっていく兵士。不細工だったのが、気付けば結構イケメンなヒューマノイドタイプである。ザーボンのイケメン顔三割増くらいで。

特に興味もないが。戦闘力はもう既に詳細不明だが、相当上がっていることだろう。

まあ、それ以上に我が妹はプツンしてるみたいだけでも。

「……………死ね」

そう言いながら気を開放して超サイヤ人化。

「う、嘘だろ……………超サイヤ人……………？」

そう言っつて狼狽える兵士、転生者だ。そうでもなければ超サイヤ人を見て分かるはずもない。ついでにこっちが転生者であることも、転生者として気付いていることも分かったらしい。

「た、助けてくれ……………ど、同郷の好じゃないか……………なっ？」

残念ながら私にプツンしたりーフを止める能力は無い。

だが、無駄死にはないぞ。

多分。

「私が死ねと言った以上……………お前の死は、絶対だ」

ぐしゃり、と思ったより軽く、湿った音がした。

039「ピッコロ、倒れる」

「……なんだ、貴様……ナメック星人とやらか？」

「目が霞んでよく見えないが……お前もナメック星人だろう……？
それも、どんな鍛錬を積んだのか想像もつかないほどの戦闘力だ
……」

道行くピッコロの足を掴んだ行き倒れの名は、ネイル。原作においては、フリーザの足止めの為に散ったナメック星人最強の戦士だ。悟飯やクリリンと言う希望が無い中、彼は最長老を守るべく、戦って、戦い抜いて。

今、その命を終わらせようとしている。

「だが、それだけに残念だ……もしもお前が一人のナメック星人としてここにいたなら……フリーザさえ倒せただろうに……」

だが、その死の間際、彼は希望の灯を見た。

「ふん、奴と再び一つになるなど御免だ」

「ならば、私はどうだ……自慢じゃないが結構いい男だぞ？」

そう小さく笑うネイルにピッコロは一步引く。悟飯は空気を読んでさつきから三步ほど離れている。

「すまんが、俺にそういう趣味は無い」

「なんか勘違いされている気がするが……お前が、私を取り込む……ただそれだけで済む」

「尚の事趣味じゃないな、俺は俺のまま強くなる」

そう言って踵を返したピッコロだが。

「そうか……すまん」

そんな言葉と共に、ネイルが、飛び起きると同時にピッコロの腹を貫いた。

「貴様っ!？」

首だけを使い、振り向くピッコロ。そして反応は遅れたものの、ネイルに飛びかかる悟飯。

それを気合だけで吹き飛ばし、ネイルはニコリ、とさわやかに笑った。

「そうだな、代わりに……この星を救うか……アニスさん達を連れてきてくれ……彼女たちなら或いは……さらば、だ」

そして身体が発光し、ピッコロと同化する。それは、同意の上ではない、強制的な同化だ。

「ぐ、あ……あ」

身体を貫かれた激痛と共に襲い来る、全身の異様なまでの体の熱と痛み。

それに耐えかねたピッコロは、意識を失い、支えも無く地面に倒れ伏した。

「狼牙、風風拳……はいいい！ かめはめ波！」

狼牙風風拳、拳が唸り、蹴りが冴える。原作では、蹴りを使う方が新狼牙風風拳だったが、別に区別する必要はないだろうとのこと、バリエーションは増えたが、全て狼牙風風拳で統一されている。最後に気合で敵を吹き飛ばし、襲いかかってきた敵をかめはめ波で吹き飛ばそうとするが、威力が強すぎて顔だけが吹き飛んだ。グロイ。

「繰気連弾！」

言つて、繰気弾の構えをとるヤムチャ。その掌に一つの気弾が生まれ、それを中心として、六つ。合計で七つになる気弾が生まれた。それを同時に動かして、フリーザ軍兵士たちを相手取る。多方向からの打撃に翻弄されている間に間合いを詰めたヤムチャが狼牙風風拳を叩き込む。

「ヤムチャの奴、張り切っているな！……この技を見せるのも久しぶりか……マシンガン突き！ 気功砲（弱）！」

マシンガン突き、その名に違わず、驚異的な速度の手技が兵士に叩き込まれる。拳、手刀、掌底と様々な連撃をくらい、パンチドランカーと化す兵士。

その仲間の姿に怯えた所に片手での気功砲を放つ。生命を削ると言う危険性は最小限ながらも、威力は低く、拡散しがちだが、それでも元の能力に差がありすぎる。

その一発で固まっていた兵士の殆どが消し飛んだ。頭部とか下半身とかが中途半端に残ったりしているあたり、視覚的に性質が悪い。

「かめはめ波！」

そして、残っていた数人をかめはめ波で吹き飛ばす。避けた者も、曲がったり、戻ってきたかめはめ波に吹き飛ばされて死んだ。

フリーザ軍フルボッコタイム。ヤムチャと天津飯が大暴れ。二人

は自分の実力を過信せず、に不必要なほどの力を以てフリーザ軍を蹂躪していた。

ついでに言えば、ほぼ同時刻、クリリンと餃子も同じ様にフルボッコタイムだったりするが、余談である。

「おやおや……何やら気になるからやってきてみればまあ、わたしの部下の不甲斐ない事……やはりサイヤ人を基準に考えない方がよさそうですね……」

二人が、全てのフリーザ軍兵士を倒し、一息ついたところで響いた声。強者の余裕に満ち溢れた、丁寧で穏やかな口調。それでいながら、相手を見下している不愉快な声音。

その声の主は、黒い円錐状の角、子供のように小柄な体躯の持ち主だった。

比喻ではなく雪のように白い肌にピンク色の四肢。爪や頭部は紫色で、それをイメージしたのか、バトルジャケットも紫色を主としている。

「単なる雑魚って訳じゃあ無さそうだな……」

「貴様は……何者だ？」

ヤムチャと同じく緊張しながらも相手の正体を探るべく、口を開く。

その答えとして相手の口から飛び出したのは。

「他人に名を訪ねる時は、自分から名乗るのが礼儀ですよ？」

まあ、聞かれたからには答えてあげるが世の情け……フリーザと申します。

以後、お見知りおきを……」

そう言って、フリーザは優雅に笑った。

041 | VSフリーザ

「名乗られた以上こっちも名乗っておかなきゃな……ヤムチャだ」
「天津飯だ」

そう名乗った後、後ろ頭を掻きながら、ヤムチャが口を開く。

「それにしても、お前がフリーザなのか？ 俺達はもっと恐ろしい化け物を想像してたぜ……」

「おや、拍子抜けしましたか？」

フリーザが意外そうに言う。

「ああ、拍子抜けだ。吹けば飛ぶような子供じゃないか」

「確かに、大人しくおうちに帰って遊んでたらどうだ？」

軽口をたたいて、笑いあう二人。

その二人の言葉にフリーザは耐え切れないとばかりに吹き出した。

「くふ、くふはははは……ははははは、愉快な方達だ。」

例えハツタリでも、このわたしを前にそこまで言えた者はいませんよ？

ましてや初対面では、ね」

ハツタリと言う言葉にどきりとする二人。

見切られている？

いや、決めつけるのは早い。

そう内心で自己完結し、どうにか平静を保つ。

フリーザの言う通り、二人の態度は単なるハツタリに過ぎない。

二人を合わせてもフリーザの足元にも及ばないだろう。戦いにおいて数は力だが、絶対ではないし、その計算式も複雑怪奇なものだ。二人が強力な連携を出来れば、もう少し状況は変わったのかもしれないが。

だが、低く見られてはいけない。

動揺、恐怖、混乱。それらを悟らせてはいけない。

その瞬間自分達は完全な格下となってしまう。
故にハツタリでも構わないから。大物が出てきた、だからどうした。と言う態度で、この場を切り抜ける自信があるように見せなくてはいけない。

何が打つ手があるように、思わせなくては。

……知られてはならない。

もしここで戦えば、勝ち目が微塵も無い事を。

だが、フリーザが、予想以下だったことは本音でもある。

気は揺らぎ、常に安定していない。確かに気をぴたりと安定させることは難しいが、それでもフリーザのそれは意図的に乱しているのではないかと思わせるほどに揺らいでいる。流石にナツパほど顕著でこそないが、気を扱う技量が無いのは想像に難くない。

フリーザの体躯は130程度と非常に小柄で、180以上の長身であるヤムチャと天津飯の方が重量差、リーチ差共に大きく勝っているのは間違いないだろう。つまりは、格闘戦において大きく分があると言う事だ。

そう。フリーザを化け物足らしめているのは、その馬鹿げた気だけだ。

その馬鹿げた気こそが、恐ろしいのも確かなのだが。

ひとしきり笑ったフリーザは満足したのかポッドから降り、大地を踏む。

「……では、遊んで差し上げましょう……どこからでも、どうぞ？」

「ならそうさせて貰うぞっ！」

背後に突然出現した、クリリンと餃子の同時攻撃。

それをいとも容易く受け止めて、フリーザは小さく笑った。

「今の一撃はいささか予想外でしたよ。最近、退屈していたので……しっかりとわたしを楽しませてくださいね？ はっ！」

気合で吹き飛ばされたクリリン達はヤムチャ達と合流し、体勢を立て直すと、作戦会議を始めた。

「ヤバいな、こりゃ」

「手が無い訳でもないだろ……」

「しかし……あつちが、奥の手を隠していた場合は」

「終わり、だね。けど天さん、やらなきゃ奥の手が無くても負けるよ」

「おやおや、どうしました？来るのが怖いのでしたら、こちらから行きますよ？」

そのフリーザの言葉にコクリと頷いた四人は一斉に気を開放する。

「……界王拳！」「……」

そして、地面を蹴った。

この一か月で、悟空との組手の中で全員が新しく習得した界王拳はまだまだ未熟で、全員2倍が限度だ。これは、アニスやリーフ達の知らない、彼らの隠し玉である。

「狼牙風風拳！」

目にも止まらぬ連撃が、嵐の様にフリーザに叩き込まれる。

防御で手いっぱいながらも、時折見える隙に攻撃を加えようとするが。

「どどん波！」

フリーザとヤムチャの周囲を回る餃子がどどん波や超能力で牽制し、それを防ぐ。

逆に、餃子を狙うと、ヤムチャの連撃をまともに喰らう事になる。

「今だっ！」

そこに加勢として入ったのが、クリリンだ。一瞬の間をついて、全力の打撃を叩き込む。

ぐらりとフリーザの体が倒れかける。そこでフリーザは演技をやめ、クリリンに尻尾で反撃しようとして。

「太陽拳！」

その眼を焼かれた。同時に、クリリンはその体を蹴って後方に飛

び、尻尾は明後日の方向で空を切る。

「気功砲ー！」

そして、上空で待機していた天津飯の気功砲が、炸裂した。地面に巨大な穴が穿たれる。

地の底が見えない程の大穴だが、フリーザの気は消えていない。それでも間違いない足止めは出来ている。

天津飯は餃子の元に駆け寄る。餃子は既に瞬間移動の為の気の探知をはじめていた。

ヤムチャは、クリリンの太陽拳で巻き添えを食った目を抑えている。尊い犠牲だ。

瞬間移動には、気の探知と言う致命的な隙がある。ある程度の範囲内や視界内であれば問題ないのだが、そのある程度を離れると、気の探知に時間がかかるのだ。

今回は、リユカを探すため、こうして足止めを行ったのだ。そこまで離れているわけではないが、気を探知しにくい宇宙船内にいる為、同じ様に時間がかかるのだ。

即興ながらもサイヤ人襲来前からしていた連携修業が役に立って上手く行ったと言えるだろう。

そうして、四人はその場から逃げだした。

2A「召喚される者」

フリーザ様が、怒り心頭で帰ってきた。まあ、隻腕ともなれば怒ってもとうぜ……ん？

「フリーザ様！ その腕は一体、どうされたんですか？」

「クレスさんですか……ヤムチャ、天津飯と名乗った者達、名前も知らないガキ二人の四人組にやられたんですよ」

「……ヤムチャ、天津飯……？」

何故その二人が生きている。ナツパに殺されたはずじゃないのか。しかも恐らくは餃子まで生きている。何故、原作より少し早いこの日に既にこの星にいる。

それどころか、フリーザ様を第一形態とは言え負傷させる程の戦闘力を有している。

流星に一人で匹敵するなどと言う事があるとも思えないが。いろいろとおかしい事はかりだ。

「探索は、暫くの間中止します。分かっていますね？」

「はい、全軍に守らせますので、安心してお休みください」

フリーザ様は今からメデイカルマシンで傷を癒すおつもりだ。そこを襲撃すればいかなフリーザ様でもメデイカルマシンごと吹き飛ばされかねない。

それでも、凄まじいまでの戦闘力が必要になる為、このフリーザ軍でそれが出来るのはおれぐらいしかいない。おれはフリーザ様に絶対の忠誠を誓っているし、実質不可能ともいえる。

だが、今回は違う。敵がいる以上、その襲撃に備えなくてはならない。おれ一人いれば十分だろうが、それでも相手が複数である以上、万が一が存在する。大体そいつらが四人だけという訳が無い。

かと言って、ザーボンやドドリア如きじゃあ、どうしようもないだろう。

「あいつらを呼ぶか………気は進まんし、間に合うとも思わん

が……」

『はい、こちら、ギニュー！』

『……いちいち格好つけるな、まあ単刀直入に言っと、ヤードラツト星の侵略を取りやめて、ナメック星の掃除を手伝え。

フリーザ様だけでも十分だろうが……流石に数が多い。何やら異星人も敵に紛れ込んでいるようだしな。……そうだな、この仕事を終えたら、全員に好きなだけパフェを奢ってやろう。いい店知ってるんだ』

『クレス……お前がいて苦戦する程とは……な』

『否定はしない』

『……よし、直ぐに向かう』

『頼む』

とりあえずは、ギニュー特戦隊を戦力として追加。ヤードラツト星の位置とナメック星の位置、支給されている新型宇宙船の速度からしてそう遠くないうちにこちらにつくだろう。

『……なんだ？』

フリーザ様は、ターレス達が神精樹を手に行っていることを知らない。と言うか知っていても気にしないだろう。実際に逆し、目障りになるまでは基本的にフリーザ様は寛容に見逃す。

寧ろ、おれの良い部下になる可能性もあるのだ。推奨していると云っても過言では無い。

『ナメック星は知ってるな？ 手伝いに来い』

『……ちっ、折角、木が良い実をつけたつてのに』

『ふ、趣味の園芸か……別に惑星はどこにでもあるんだ、一度や二度、どうだつていいだろう？』

おれとしても、ターレス達はどうでもいい。おれに勝てないレベルの戦闘員に過ぎないし、神精樹の効果を考えれば、フリーザ様を

超えることは不可能に等しいのだ。

神精樹は確かに戦闘力を大きく上昇させるらしいが、それは大きな間違いだ。

神精樹は、食したものに、惑星の力を分け与えるだけだ。潜在能力を開花させたりするというものじゃない。つまりは、足し算でしかないのだ。

10000+30000は確かにすごいだろうが、99000000+10000だとそうたいしたものじゃない。

そして、惑星の力などたかだか知れている。それに神精樹の成長にも大きく力を使う。

多くとも、数万、少なければ数千以下の上昇だろう。

ついでに言えば、フリーザ様は変身型で多くの惑星を滅ぼし支配している。神精樹を植える為に襲い掛かれば、即反逆者だ。例えばフリーザ様以上の戦闘力を有しているようが、フリーザ様が変身すればそれだけで事足りる。

相性最悪ともいえるのだ。

『き、貴様……なんでそれを知ってやがる!?!』

『さあな?!』

だから、特に放置しても問題ないが、ここで密告されれば困るターレスにとっては、急ぐ理由が出来た。

惚けた振りをして、無線を切る。これで焦ったターレスとその軍団がやってくるだろう。

その理由がおれに対する懇願なのか、或いは口封じなのかは知らないが。

だが、残念な事に、おれにはこれ以上の戦力の当てがない。

後は人事を尽くし、天命に身を任せるのみだ。

天津飯たちの活躍で、フリーザはそれなりの怪我を負ったっぽい。詳細は聞いてないけど、気功砲を直撃させたらしい。下手をすれば腕の一本や二本、吹っ飛ばしてるんじゃないかなろうか。

部下の殆どが侵略や襲撃をやめ、宇宙船周囲での専守防衛に徹している。これはつまり、フリーザがメデイカルマシーンでの治療が必要になるほどの怪我を負ったとみていいだろう。

メデイカルマシーン内では、そちらの方が治療の効率がいい為、睡眠状態になるのが一般的だ。旧型の中にはそういった機能が無いものも存在するが。

当然ながら、寝ている間は無防備だ。そして、サイヤ人やナメック星人の様な、比較的高い自然回復能力を有する種族ならともかく、そうでないコルド一族のフリーザは回復に数日かかるだろう。

数日間、無防備な状態が続くとなれば、こういった防御策をとるのも仕方ないと言える。

気功砲の威力を身を以て知っただろうし。

だが、これで数日は安全。私達は襲撃を仕掛けないつもりだ。恐らくは、もう少ししたらベジータがやってくるだろう。動くのはそれからだ。

12月11日

ベジータがやってきた、と思えば宇宙船は二つでナツパの気もある。

……そういえばナツパ死んでないからなあ。

何か影響あるとも思えないけど。

戦闘力的にはベジータが25000、ナツパが8000ぐらい。

少しずれもあるかもしれないけど、そうたいした上昇じゃない。ま

あ、サイヤ人の特性だけに頼った上昇じゃ、こんなものだろう。
ここで、いきなり仲間を引き入れるのも面倒だけど、仲間がいな
いと実力不足のベジータ達じゃあ、ドドリアやザーボンに殺される
だろう。

それだけならまだ原作の様にどうにかなる可能性もあるが、リク
ーム達の様なそれ以上の戦士と相対すれば、絶対に死ぬ。

ならば、とリュカが引つ張り出してきたのは幼女。黒い髪に黒い
眼、見た目的には尻尾があつてちつちやなリュカ。

ついでに大きめの手甲とフットマンズ・フレイル（フットマン・
フレイルだったかもしれない）を装備させて、リュカは口を開いた。
ロリっ娘に巨大武器ってロマンだよね。なんでだろうね。

補足

- 1 / 読み飛ばしても構わない
- 2 / 間違っている可能性もある
- 3 / 私見や私情も混ざってる

フットマンズ・フレイル、フレイル。

長い棒と短めの棒、或いは長い棒と鉄塊等を短い鎖などで繋げた
武器。

遠心力を使って、叩き付ける武器で、防ぎ難く、威力は高い。
しかし、扱うにも相応の力がある。

その利かさから似たような武器は多い。

補足

「……これを使って、ベジータを襲う」

「なんとという社会的抹殺兵器!？」

「違う違う。そっちじゃなく」

リュカが言うには、これでベジータを半殺しにして、パワーアップを図るらしい。

でも回復しないと意味ないので、疑似的に作り上げた仙豆を用意した。実際は単なるグリーンピースだが、私が込めた魔術で仙豆並みの回復力を誇る……と云うのは言い過ぎだが、結構な回復力は期待できる。

そして、十粒で力尽きた。

まあ、十分だろう。

043 | 襲撃の結果

そんな訳で幼女にその手を赤く染めてもらい、ベジータ達の戦闘力上昇に一役買ってもらった。

因みに、幼女はこう言った人手がいる場合の助手のような立場で、後数人、培養ポッド内で寝ているらしい。名前はチビリユカ。そのまんまじゃないですか、やだー。

というか培養ポッドって、バイオ化しないよね？ ドロリーにならないよね？

気になるベジータ達の戦闘力の上昇は。

ベジータ 25000 96000

ナツパ 8000 52000

予想以上の上昇ってレベルじゃねーぞ！？だけど、インフレについてきてるかどうかは不明なのが悲しいところだ。

尚、二人にはバトルジャケットとスカウターを渡しておいた。出来れば、チビリユカの奇襲に備えて気を探る訓練ぐらいはして欲しかった所なんだけれど、どうやらまだ出来ないらしいからだ。

ついでにチビリユカの正体を訝しんでいるに違いないので、手紙を同封して、フリーザにやられた昔のサイヤ人と言う事にしておいた。まあ、リユカに似てるし、下級戦士の一人だと思っただろう。

死者は一日だけ、この世に帰ることが出来ると言うルールを知らない二人は、今頃顔を青ざめさせているんじゃないだろうか。

あ、ドラゴンボールがあるからダメか。

044 | ドドリアさん、ザーボンさん、マジ空気

ベジータ達を半殺しにして、パワーアップさせて二日が経過。

もうギニュー特戦隊が近づいてきたので、ベジータ達をスネークさせていたチビリユカを帰還させて情報を貰う。どこかの妹ネットワークみたいなものがあれば便利なのだけど、残念ながら、チビリユカたちにその能力はあるものの、リユカとは繋がっていないらしい。

貰った情報からすると、既にドドリアとザーボンは死んだらしい。ドドリアは呆気なく。ザーボンも変身まではしたがそれでも一瞬で吹き飛ばされたとか。

そして、既にベジータ達と相対しているだろう特戦隊。戦闘力のこのちぐはぐさは間違いない。

「そろそろ、手伝ってくる」

ギニュー特戦隊は相手にならないだろう。ギニューを除けば、だが。そして、ギニューを相手にするには私が一番適任だ。アニス達にはピッコロ達を鍛えておいてもらおう。一週間前後だろうが、それでも十分に強くなれる筈だ。

ひゅん、と瞬間移動。私が空中から見下ろすと、そこには確かにギニュー特戦隊がポーズをとっていて、ベジータとナツパは冷や汗をかきつつもそれを眺めている。

その隣に降り立って。

「やあ、お二人さん、こんにちわ……いや、こんばんわかな？

見かけたのも何かの縁、ここは加勢させてもらいましょうか。」

「……ふん、構わん。存分に加勢しろ」

「な、ベジータ！本気かよ!？」

そう言って認めるベジータと認めないナツパ。ベジータが一瞬押し黙ったのは、私の実力をわずかに感じ取った為だろう。流石はサ

イヤ人の超エリート。まだまだ拙いけれど、私とは違って単独で気を探れるようになってるとは思わなかった。

そこに声をかけてきたのは、ギニュー。と言うかそろそろ股の間から顔見せるのやめる。

「ん……新手か、ならばもう一度最初からスペシャルファイティングポーズを」

「……させるか!」

言いながらギニューとの間合いを詰める私。それを妨害しようとしたバータとジースがナツパの一撃を受けて吹き飛び、次いで襲い掛かってきたリクームをベジータが迎撃し、そのまま流れる様な動きでグルドの頭を掴んで地面に叩き付けた。ピクリともしないどころか、頭部が砕けて中身が散った。とりあえず私の精神衛生上、詳細は不明。

流石は、特戦隊最弱。見せ場どころか攻撃も出来ずに死ぬとは思わなかったが。

「おおおおっ!」

叫んで、私に殴り掛かるギニュー。それを受け流しつつ、片手で生成した杖で反撃。

ギニューの体はくの字に折れ曲がり、そこに蹴りで追撃する。

吹き飛ぶギニューに杖を投げつけ、着弾と同時に気を開放する。

「壊れた幻想!」

爆発、それをギニューはどうにか防ぎ、体勢を立て直す。さて、コイツが怖いのはここからだ。

ボディチェンジ。相手と自分の体をとりかえ、相手から戻ろうとすることは出来ず、技の発生と同時に相手は動けなくなるという、よく考えるとこれ最強じゃね?とも言うような性能を見せつけ、よくよくフリーザに使えばいいんじゃないかねとか言われては物議を醸しだしていた技だ。

私の推測では、別にフリーザが強すぎて通用しないと言う理由で

はないだろう。今までも、自分より強い相手に乗り移ってきたのだ。強い相手には通用しないのではなく、当たらないと言った方が正しいだろう。

が、ここにも穴が一つある。フリーザほど隙だらけな奴も珍しい。慢心せずして何が王か、とでも言いたげなほどの自信と慢心。そこを突けば、いかなフリーザでも一撃だろう。

まさか、ギニューが何もなしにフリーザに従うとは思えないからおそらくは戦っただろうし、ボディチェンジを使わないとも思えないのでボディチェンジを真正面から打ち破ったとみていいだろう。

「ふふ、気に入ったぞ……その身体」

まさかボディチェンジそのものに相手の体を拘束する能力は無いが、ギニューは原作において、サイコキネシスのような能力を見せている。

これが超能力の類か、魔術の類か知らないが、原作の餃子の様に未熟ではないだろうし、リーフ達にそれに対抗しろと言うのも無理な話だろう。特に魔術であった場合は。

もしも、それでリーフが体に乗っ取られてしまえば、ジ・エンドだ。

間違いなく銀河の危機だ。

対抗する為には、魔人ブウぐらい連れてこないと。それはそれで銀河の危機だけだ。

考え事していると、目の前でギニューが自分の胸を貫いて。

「チエーンジー!!」

あ、ヤバ

045 | ナツパVSジース&バータ

「ギニュー特戦隊の赤いマグマ、ジース！」

「ギニュー特戦隊の青いハリケーン、バータ！」

「行くぞっ！」

吹き飛ばされたジースとバータ。見た目勢いよく吹き飛んだものの、実際そこまでのダメージは負っていない。すぐさま体勢を立て直し、ナツパに挟撃を仕掛ける。互いに何も言わずともある程度通じるほどに連携を磨いてきた、その成果だ。

が、相性が悪いと言わざるを得ない。連携とそれを可能にするためのヒット&アウェイを重視した連撃はあまりにも軽く、ナツパに大したダメージは無い。

スピードタイプの戦士がパワータイプの戦士に劣ると言う事は無い。

それはシュラが地球で証明している。シュラは、ナツパを倒し切れてこそいないが、それでも一撃もくらってははいない。そしてシュラは知らない事だが、ナツパも実際の所は大ダメージを負っていた。シュラも消耗してはいたが、それは大技を放ったからであって、ダメージではないし、あのまま続ければ勝っていたのは間違いないだろう。

ジースとバータはそのシュラ以下だった。確かにシュラよりも速度は速く、一撃も重い。

「ハッハー！」

「死にやがれえ！」

が、自身の安全を重視したその連撃は別段、急所狙いという訳でもないし、シュラのように気を集束させて叩き込む様な攻撃もない。こちらの事を舐めきっているせいかな、その攻撃もパターン化してお

り、読む事は容易い。

高い戦闘力を生かした高機動戦闘とでも言えば聞こえがいいだろうが、実際、高い戦闘力を生かして楽をしているだけである。

「……死ぬのはテメエらだ」

ぼそり、と口の中でだけ呟いて、拳をぎりぎり握り締め、体を回し、ねじる様にして構える。

その間も二人の連撃はやまない。そして、機を見るべく十数秒待ち。

「ばつは！」

「しゅーべると!?!」

バータを思い切り殴りつけると同時、ジースの蹴りを掴んで、地面に投げつけ、身動きが取れないように顔を片足で踏みつける。いけ好かない顔が苦悶に歪み、耳障りな悲鳴が聞こえる。

「キサマツ！」

バータが再び攻撃を仕掛けてくるが、その攻撃に鋭さは無く。代わりにある僅かな怯え。

「ふん！」

バータが繰り出した拳がナツパに叩き込まれる直前、ナツパの拳がその腹を突き破っていた。

同時に足に力が入り、その顔を踏みつぶした。

いつもの自分なら自身の強さを知ると共に喜んでいただろうが、どこか面白くない様な感じがして、ナツパは小さく鼻を鳴らした。

「下らない」

046 | ベジータVSリクーム

ナツパがジースとバータを相手にしている頃、ベジータはリクームと対峙していた。

「ベジータちゃん、俺達も遊ぼうぜー！」

「いいだろう……後悔するなよー！」

リクームの膝蹴りを片足で蹴って、その顔面目掛けて膝蹴り。所謂、シャイニングウイザード。額で受けられ、逆にひざが痛むが無視。その後頭部を掴んで、顔を両膝で抱え込み、後ろへと投げ込んだ。

鈍い音がして、頭が地面に叩き付けられる。

が、それでもリクームの首は折れていない。平然と飛び起きると、予想外の事態に軽く硬直しているベジータを引きはがして、軽く放り投げた。

そこに再び膝蹴り。慌てて避けようとするものの、遅い。両腕で防御するのがやっとだった。

踏ん張る事も出来ずに吹っ飛ばされて、体勢を立て直したそこに迫る気弾。

「うお!?!」

慌てて弾き、リクームとの間合いを詰める。

迫ってきていたリクームのシールドータックルを躲しながら、足元に滑り込んでその足を刈る。

倒れこんでくるその巨体に膝を叩き込んで、同時に手も使って投げ飛ばす。

案外あっさりとは投げ飛ばせて、それがリクームから飛んだのだとすぐに理解する。

今度はリクームが膝を落としてきた。狙いは、顔面。

みっともなく地面を転がって回避。体勢をどうにか立て直す。くらっていればただでは済まなかっただろう事態に僅かながら呼吸が

乱れていた。

「……おいおい、ベジータちゃん。もうおしまいかい？」

「面白い冗談だな！」

肩をすくめて笑うリクームとそれを鼻で笑い飛ばすベジータ。

それを見てリクームの顔つきが変わる。

「……いいねえ、いいねえ。これがあのベジータちゃんとは、見違えたよ！」

リクームは理解している。どんなに強い奴であっても、精神的な均衡を崩した奴は脆い。そして崩れにくい均衡の一つが余裕だと考えていた。自分が道化を演じるのも余裕の一つだ。

以前のベジータには余裕が無かった。自身の力に慢心している姿は余裕とも取れなくないが、それはどちらかと言うと若さゆえだろう。それ故にその慢心が崩れた後のベジータは脆かった。

それが、今のベジータには余裕が見て取れる。戦闘力が大きく増した為じゃなく、しっかりとした経験を積んで、一人前の戦士になったのだろう。

現に、自分は少しではあるが余裕が無くなった。

「ここからが本番だ、なあ、ベジータちゃん」

「……ふん」

047 | 決着、なのか？

そして、私の目の前に生成される一本の槍。私としても隙を突かれたのはちよつと吃驚したし、超能力が思いのほか強くて一瞬で解除出来ないのも予想外だった。

やっぱりもつと研鑽すべきか。と考え直すと同時、ボディチェンジが槍に直撃する。同時に糸の切れたようにギニユーの体が崩れ落ちる。ボディチェンジ成功だ。

いつものように「壊れた幻想」を使えば、この槍ごとギニユーを殺せるが、それじゃ少し面白くないだろう。

かと言って話せるようにしてインテリジェンスソード、とか言ってみてもこの世界じゃあ需要ないし、下手に言語機能をつけるとブルマみたいにチェンジされかねない。

まあ、後で考えればいいか、と軽く回して地面に刺しておく。

「……なんだ？ギニユーの野郎はどうしやがった？」

と、どうやらリクームを倒したらしいベジータが、懨然とした顔でこっちに向かってくる。その後ろには申し訳なさそうな顔のナツパがついている。

……リクームと戦ってて、サイヤ人の本能に火がついたところでナツパの助力で片がついちゃって不完全燃焼って所だろうか。

「ギニユーならここだよ、この槍の中」

そう言っ指差してやるとがたがた、つと震える槍。

「……世の中不思議な事もあるもんだな……」

ナツパがしみじみと呟いて。

「でだ、貴様は何の用で俺達を助けた？」

「いや、特に用は無いんだけど、見かけちゃったし、ついでに言っておくことがあってね」

正直に言えば、フラグ立てに来ただけ、それを言ってもどうしようもないので黙って置く。

「……？」

「フリーザを倒すつもりなら気を付けて、どうにも変身型っぽいし」

ここで、フリーザが変身型宇宙人であることを明かしておく。原作で誰が言ったか覚えてないけど、今のところ誰も口にしてないんだよね。

因みにいうと、私達サイヤ人は変身型には含まれない。この変身型っていうのは、完全に自由意思で変身できる者を指すので。

「んー、後……治療したら帰るわ」

言ってナツパとベジータに回復魔術をかける。見る見るうちに二人の傷はふさがって、完全回復。戦闘力が爆発的に上昇したのを見届けて。

「おい、待ちやがれ……！」

まあ、そんなことを言われて待つ奴はいない訳で。

瞬間移動。

「んー、やっぱりフリーザ様に演技とか腹芸をさせるのは無理があつたか……良くも悪くも自分に正直な人だしなー」

元々、激しやすい性格だ。長い慣れがあるにも関わらず、少し感情が昂つただけであれだけ単純に素を見せる事から考えても演技向きではない。

故に、クレスは自身の中にある計画を練り直していた。クレスは、高い忠誠心と戦闘力、そして軍師としての才を以てフリーザ軍でも屈指の位置にいる。

いつもは侵略予定の惑星の情報から攻略法などを見つけ、戦術を構築することが主だが、今回のナメック星への侵略を提案したのも彼だった。

「……クレスさんはわたしに腹芸をさせるおつもりですか……というか、忘年会はまだ先ですよ？」

ちよつと呆れたようにクレスの部屋に入ってきたのはフリーザ。

「ああ、フリーザ様……お久しぶりです。忘年会で腹芸をお見せいただけるのは非常に喜ばしい事で今すぐにも叫びたいほどですけど、残念ながらそう言った腹芸ではなく、所謂隠し事に分類されるものです」

「隠しごと、ですか？ わたしは特に貴方に隠していることなどありませんが……」

クレスの言葉に小首を傾げるフリーザ。確かにクレスには出自から自身の本性、真の姿まで曝している。特にこれと言った隠し事はしていない。

「いえ、隠し事をしていることが問題なのではなく、隠し事できなかったのが問題なのです」

「……???」

困惑の表情を浮かべるフリーザ。

「フリーザ様が傷を癒しているこの一週間に、ナメック星人達が今回の襲撃がフリーザ軍のものであると言う結論を導き出しました。今はまだ噂の段階ですが、ここまで来るとそう認識されているとみて間違いないかと」

「……クレスさんは確かに、区別できないようにしたんですよ？ 何故そんなことに？」

今回、クレスが献策しフリーザが採用したのは原作とは大きく違うものだ。

簡単に言えば、ザーボンとドドリアを主体とした混成部隊を造り上げ、それにナメック星を襲わせる。フリーザとそれが率いるフリーザ軍がその二人を倒して追い散らし、ナメック星人たちの信頼を勝ち取ると言う単純なものだ。

別名マッチポンプ。

聡明なナメック星人であれば気づくかもしれないが、それ以上に平和主義者で温厚でお人よしだ。それに、そう言った可能性はクレスが考える内に思いついた分をどんどん潰していった。怪しまれない様、フリーザ達が観光の為と言う理由で滞在した三日後辺りにザーボン達が来襲したり。ジャケットのデザインを少しながら変更してみたり。武器を変えてみたり。

それが崩れたのは、地球からやってきた奴らのせいだろうが、それ以上の失言があった。

「フリーザ様が地球の四人組と出会った時の「おやおや……何やら気になるからやってきてみればまあ、「わたしの部下」の不甲斐ない事……やはりサイヤ人を基準に考えない方がよさそうですね……」

と言う言葉です。あの時はまだフリーザ軍が到達していませんでした。その状態でこんな言葉を漏らせば、誰かが聞いていてもおかしくありません。そして、聡明なナメック星人からすれば、今の様な答えに行きついてもおかしくないでしょう？」

あくまでもこの作戦の成功は、フリーザ軍とザーボン軍が無関係

である場合だ。不倶戴天の敵と言うならともかく、或いは既に乱戦が始まっていれば何の問題も無かったが、フリーザだけが先行し、いつもの侵略とそう変わらない態度で臨んだのが悪かった。

「わたしが……悪いのですか、すみません」

「ええ、まああれちゃった以上は仕方ないのですけど……これからは、いつも通りの侵略になると思います。ただし、気を付けていただきたいことが一つ、ナメック星人を決して殺さないください」

「……何故でしょう」

「ドラゴンボールは、願いを叶えてしまうものです。おれたちの知らない、何かしらの秘密があってもおかしくありませんから、難しいとは思いますが、出来る限り殺さずにお願います。」

「……分かりました、善処しましょう……では、すみませんがわたしはこれで、失礼します」

神妙な顔をして部屋を出ていくフリーザを見送って、これで少しはましになるかな、と呟いて、クレスは不要になった紙をぐしゃぐしゃに丸めて捨てた。

048「の必殺技の一つ」

あれから、私達はごく普通に修行していた。けれどたったの五日でフリーザが目覚めて、再び攻勢を開始しそんな動きを見せている、しかも今回は前よりも少し大規模っぽい。

「……アニス、大気圏外から接近する熱源反応、恐らくは新手」
リユカがそう伝えてきて、手元のコンソールをのぞく。恐らくはフリーザの新手なのだけど、少なくともこれは単独用の宇宙船じゃない。

或いは、大型の宇宙人ならその限りでも無いだろうけど、態々狭い上に設備のサイズが合わない様な宇宙船を使う必要もないだろう。普通に考えれば、複数の敵が来たと考えるべきだろう。

私が考える限り、フリーザ軍に新しい援軍が来ると言えば……恐らくはターレスか。

まあ、そうであっても無くても、まず間違いなく敵なので。

私達は外に出て、気を高める。

「……リーフ、思いつきり行くこうか」

「ん」

リユカが演算。私達はそれに合わせて角度や方向を調節して。

「スローイング」

「オメガ」

「「ブラスター！」」

一緒に放つのは黒と白の気弾。名前こそ違うものの、ブローリーの必殺技の一つであるギガンティックミーティアと変わりない。

昔ならここにブローリーが加わって、三人で一緒にきょうだいギガンティックとかだったんだらうけど、今回は私とリーフしかいないから姉妹ギガンティックだ。

因みに、ブローリーと二人でやるときは姉弟じゃなくて、ギガンテ

イック あげるよに技名が変わる。更に因みに、命名はシヨタリ。
着弾、手応えのような何かを感じて脳内でSEを再生。
デデーン！

あれって実は単なるBGMの一部なんだよね。多分、仮面ライダー
I BLACK RXのOPの導入部みたいなもの。
どう考えても効果音なんだけど。

まあ、やることはやったし、一眠りしようかね

049 ナツパVSクレス

「……キサマもサイヤ人のようだな」

「ケツ、フリーザの腰ぎんちゃくなんざどうせ大したことないだろつよ」

そう言っただけで吐き捨てるナツパ。ドドリアを殺したのは彼だが、その時の事と、先程のジース&バータ戦のせいで、フリーザ軍そのものには既に大した奴がいないと決めつけていた。

「フリーザ様に反旗を翻すか……それとお前、おれをあんまり舐めない方がいいぞ？」

「そうだ、ナツパ。地球ではそれで痛い目を見たばかりだろう」

「……確かにそうだな」

対峙するのは、ベジータ、ナツパとクレス。ベジータは既に自分より上のクレスの実力を見抜いていたが、その戦闘力程の強さは無いとみている。恐らくは互角程度には持ち込めるはずだと。

まずもって言えるのが戦闘経験の不足。フリーザの側近であるザーボンやドドリアでさえ、第一線に出ることは少なく、その実力は衰えている。彼らは鍛錬さえ怠っていたことが原因でもあるが、鍛錬していようと長き平和と多くの勝利は戦士の感覚を鈍らせる。

自分の父がそうだった為に、ベジータはそのことをよく知っていた。対するこちらは、幾度となく激戦を戦い抜いてきたのだ。

体格においても小柄でベジータと比べると頭一つ分ほど小さく、ナツパと比べると大人と子供と言うよりもう別の生き物じゃないかと言っほどの差がある。

「……かかって来いよ、エリート」

クレスのその言葉を合図に戦いは始まった。

最初に戦うのはナツパ。

本来なら、二人で戦うべきなのだろうが、元々二人での連携などといった事が無い。それを今やるよりは二人で連戦した方が良いだろうという判断だ。

「ふん！」

クレスは唸りをあげるナツパの拳を躲し、そのまま捻りあげて投げ飛ばす。

「は……？」

くるんとその巨体が回転し地面に叩き付けられる。自分よりも小柄なものがそれをした事実にはベジータもナツパも間抜けな声を漏らした。

それを見て、クレスは小さな笑みを浮かべた。

十分に通用する、と。

「くそつたれ！」

ナツパはずきずきと痛むのを無視しながら、殴りかかる。

クレスはそれを流して足を刈り、同時に顔面に掌底。

勢いよく地面に倒れこみ、そのまま後頭部を打ちつけるが、そこまでのダメージは無いようで顔をしかめもしない。

ベジータが考えた通り、クレスは殆ど戦った事が無い。戦闘力こそ鍛錬の賜物で普通のサイヤ人を大きく超えはしたが、戦闘経験は前世を除くと片手の指で数えられてしまう。

しかし、前世では両親から護身術として合気道を学ばされており、それなりの実力……段位を持つ腕前ではあった。まあ、護身と言っても人生最大の有事に頭上から降ってきた鉄骨相手には何の意味もなさなかったのだが。

故に彼の戦闘スタイルは合気を自分なりにアレンジしたものとなる。打撃も放てないではないが、流石にナツパ相手に通用するとも思えない。地球の時そのままの戦闘力であればともかく。

だが、合気道なら、合気道ならきつと何とかしてくれる。

合気道は中国拳法の影響を受けた武術の一つで、勘違いされやすいが、相手に手も触れず、軽く触れただけで投げたり吹っ飛ばしたりするような、気功や妖術の様な怪しい技を扱うものではない。

確かに合気道は気を使うとも言われるが、その気と言うものがどんなものなのかまだ説明されている訳でもない。

元々、中国武術に存在する気功そのものも基本的に自身の体内で使用される特定の動きや呼吸法などによって生まれるものであったり、心構えや打撃のコツとなる動きを指すもので、波動拳やかめはめ波の様な相手に触れずに倒すような技ではない。

合気道はそう言った気の様な少し神秘的な点を除いた上で単純に言えば、関節技と投げ技の複合だ。関節の可動範囲を熟知した上で、それが動かないように関節を極めたり、逆に痛みを与えてそれから逃げようとする反射を利用して、投げたり。

空手なんかを習っていても、掴まれてしまえば合気道から逃げる事は難しい。関節を外したり、反射を無視すれば容易いだろうが、そんなのはもう人間じゃない。

故に、ナツパは非常に苦戦していた。何度攻撃しても訳が分からないままに投げられて地面に叩き付けられ、訳が分からないままに片腕を折られた。実際、クレスは折る気は無かつたし、折るだけの力も無いのだが、ナツパが無理矢理に暴れたせいで折れ、ついでにナツパの心も折れた。

「くそ、なんなんだテメエの技は!？」

高い戦闘センスを持つサイヤ人だが、なまじ超能力や魔術と言った技の知識があるだけに合気道をその筋のものだと勘違いし、理解できないものとしている。

もしも単なる武術だと見ていれば、一端だけでも理解できたかも

しれないが。

「まだ続けるか？ おれとしてはお前達が反旗を翻さなければどうだっていい、このまま引き下がるっていうならもう何もしないさ。もし、フリーザ様の元に戻って忠誠を誓うならば、おれから口利きでもしてやろう」

「待て、まだ俺様の相手が済んじやいないぞ………？」

ナツパの前に出ると、そう言ってベジータはにやりと笑った。

049 | ナツパVSクレス（後書き）

猫は一応武術経験者ですが、合気道は、基本的に練習風景を見させていただいた限りであつたりするので、間違っていたりした場合、指摘をお願いします。

流派ごとに違いもあるでしょうが、クレスの流派は特に決めていません。大雑把にこんなもんだよ、とでも教えていただければ幸いです。

050 | クレスVSベジータ

「ハアアアアー!!」

「くっ」

クレスはナツパの時とは打って変わって防戦一方を強いられていた。

ベジータが繰り出す、息を突かせる間もない連撃。間合いを読み、当たると同時に引かれる腰の入らない手打ちパンチを繰り返す。時には虚実を交えるが、それもクレスは読み切って受け流している。

見る限りにおいては、バータ達がナツパにした悪手のようにも見えるが、大きく違う。

これは誘いだ。

この攻撃は痛いだけでこちらを倒すことは出来ないが、痛いものは痛いしウザいものはウザい。

かと言って反撃しようにも、掴むのは難しい速度の連撃。掴めば無理矢理引きはがしてそれを阻止してくる。

ベジータは少なからず合気道を理解したに違いない。

合気道は掴めなければ、どうしようもないのだ。少なくとも末端しゅつごのちゆうを使って投げるにも極めるにも。衣服が掴めればまだどうにかなるのだが、相手はグローブを捨てているし、ゴム質のアンダーウェアを掴めるはずもない。

そして、近づいて投げをしようと思えば、肘か膝、或いは投げか。強力な一撃が来るだろう。こちらは必殺の一撃じゃないのに相手だけ必殺とか、そんな賭けに乗る気は無い。

対戦で必殺使うなよ、とか言う羽目になりかねない。

故に、こちらも必殺でいく。

リスクは高いが、仕方ないとも言える。流石にフリーザが偶然こ

こを通りがかつて助かるなんて言う都合のいい展開は無い。

自分一人で決着をつけなくてはならない。

「やあ！」

拳を受け流して、その拳が引き戻されるよりも早く、クレスは間合いに飛び込んだ。

「喰らえっ！！」

叫びと同時に繰り出されるベジータの拳を避け、膝蹴りを避けると、クレスはベジータの背後に回り込んだ。

「ぐ……が」

技の名前は、裸締め。

その技を外す技は存在しない。力で外すか、或いは後ろに転んで地面に叩き付けるかぐらいだろう。少なくともベジータに前者を可能とするだけの力はない。幾らクレスが小柄で華奢とは言え、サイヤ人ではあるし、それなりに鍛えてはいるのだ。後者はまず察知できし、この世界であれば、一瞬の隙に畳み掛ける事も難しくない。両腕も足でがちりとホールドされており、気弾を使う事も出来ない。

決まった時点で、クレスの勝ちは決まっていた。

だが、そうして小さな笑みを浮かべたクレスは、頭部に衝撃を受けて意識を失った。

051 | 酸素欠乏症

ナツパにベジータは厳しい目を向けていた。

「……なんのつもりだ、ナツパ」

当然、先程クレスとの勝負に水を差した件だ。明言こそされていないが、これは1対1の真剣勝負だった筈なのだ。リクーム戦の時とは訳が違う。

「今あいつに起きててもらおうと、都合が悪い」

「……なんだと？」

「気を探ってみてくれ」

気を探れたのか、と驚きつつも言われたとおりにするベジータ。直ぐにその顔に驚愕が浮かぶ。

「……………このとんでもない気は……………フリーザか！」

フリーザが此方に向かってきている。まだまだ二人で勝てるような相手じゃない。しかもあの女の情報だと変身型。確かに、少しぐらいルールを破っても逃げるべき事態だ。

今度、コイツにあつたら謝っておこう。

「逃げるぞ、ナツパ！」

そう思いながら、ベジータは逃げ出した。それにナツパもついていく。

二人が逃げ出して数秒後、そこにアニスが瞬間移動で現れた。

ベジータとナツパが存在しない事に小首を傾げながらも、倒れているサイヤ人に近づいていく。

なんか結構な強さの戦闘力の奴がベジータ達と戦っていたからフリーザかと思えば、それなりに怪我したサイヤ人が一人倒れこんでいた。気を見るに、ベジータ達と戦っていたらしい。多分こいつも転生者なんじゃないだろうか。

「……おい、大丈夫かい？」
ぺしん、ぺしん、ぺしん。

軽く何度かビンタしてみるも、起きる素振りは一切ない。ここで慌てては負けだ。ギャグやコメディの様に連打してしまえば、起きたのにまた気絶するなんていう事態になりかねない。

ぺしん、ぺしん、ぺしん。

「あの、わたしの部下に何をしていらっしやるのでしょうか？」

「あ、上司の方でしょうか、こちらの方がた……おおおう!?」
顔をあげた私が見たのは、青筋立ててぶるぶると震える、フリーザだった。思わず、女らしからぬ奇声を上げて後ずさったよ。

「まあ、クレスさんは俗にいう……あー、えー、ド、ですし……
……ボロボロな事やビンタまでいいとしても……膝枕など！ え、えと、貴方だけり、リア充なんて許しませんよ!？」

「……ごめん、意味が分からない」
「一から十まで分からないことだらけだよ。」

まあ、フリーザがド とかりア充なんて単語を知っているのは十中八九、私が頭を逆向きに抱えているせいで膝の上で寝ている、ように見えるこのサイヤ人のせいに違いない。

なんだろうか、少し俗っぽいフリーザが可愛く見えた自分が憎いや、別に自分がね付き合いたくなるとかそう言ったのじゃなくて……そう、微笑ましい。なんか知らんけど。

「くっ、ここまで見せつけてくれたお馬鹿さんは貴女が初めてです。……薄汚い雌猿め、絶対に許さんぞ！ ……じわじわと鬨り殺しにしてやる!!」

フリーザ、酸素欠乏症にかかって……この光景のどこがリア充なんだよ。どう見ても朝幼馴染が起こしに来るシーンとか、海で溺れて嬉し恥ずかし人工呼吸と言う名のキスシーンとかには見えないだろうに。

だが、相手さんはやる気だ。流石に変身する程でもないらしいけど。

今の私は【n i g h t k n i g h t】に燃料を与えてすぐな為に、フリーザ以下の戦闘力になっている。封印を解除すれば上回るだろうけど、そうになると変身を促す羽目になる。それは互いに全力で殺しあうと言う事。私はまだ超化出来ないけど、死ぬ気であればフリーザに追隨出来るだろう。

痛いのはごめんだけど、やらないと、駄目そうです。

……どうしてこうなった？

自問しても答えなんて返ってこない。

「行きますよ！」

「……仕方ない、か」

構える私と突っ込んでくるフリーザ。サービス期間とか期待してたんだけど、早々上手くはいかないらしい。間合いを詰めたフリーザの連撃。その拳を受け流して、蹴りを受け止め、変幻自在に連撃に組み込まれる尻尾を受け流す。

「ふっ！」

隙を狙って呼気と共に蹴りを繰り出す。フリーザはそれを受け止めようとして失敗。中段回し蹴りから上段回し蹴りへと変化した一撃に対応しきれなかったのだ。そしてそれと同時に叩き込まれる二発目の回し蹴り。

双竜脚と呼ばれる、左右の回し蹴りをほぼ同時に叩き込む技だ。

「う、ぐう……思ったよりもやるようですね……」

フリーザと今の私は殆ど同程度の実力だ。フリーザはパワーとスピードで私を超え、私は業と技でフリーザを超える。

フリーザは強いが、余りにも正直すぎるのだ。虚実もなく、無拍子でもない単なる攻撃が早々簡単に当たるはずもない。急所までを一直線の最短距離で抜ける打撃も怖いと言えば怖い。

逆に、防御においても殆どこちらを見てから動く為に虚実に非常に弱い。それでも虚実を交えなければ普通に防御したり受け流した

りする以上、その実力は確かだ。

「見せてあげましょうか。わたしの変身を……」
そう言ってプロテクターを破壊、気を高めている。

「やるしかないか……！」

既にフリーザは二メートルを超える大男、所謂第二形態になっていた。もう少し時間をかけて変身してくれば瞬間移動で逃げられたんだけども。

どうやら戦うしかなさそうだ。

052「フラグブレイカー」

「くつくつく、こうなったらもうさっきほど優しくは無いぞ？
なにしろ力が有り余っているんでな……そうだな、1000000
以上は確実かな……」

そう言っている間に封印を解除しようとしたが、フリーザはそれを許さない。

「ばっ！！」

その言葉と腕の動きに応じて、私の足元が発光し、そこから気が立ち上る。

「っ！」

舌を打ちながら、解除を中断して回避。消耗さえしてなければ、まだどうにかなっただろうが、今の私じゃあフリーザの足元にも及ばない。

フリーザが突っ込んでくる。さっきとは違ってその突進は早いだけじゃなく、力強い。

「……ふん！」

回し肘打ちから裏拳への繋ぎを受け流して、勢いそのままに放たれた回し蹴り。

一歩前に出てそれを受け止めつつの崩拳を叩き込む。

空手で言う中段突き（縦拳）のだけど、その打撃としての質そのものは大きく違う。叩き付けるのではなくどちらかと言えば、槍を突きこんだ感じに近いだろうか。

その反撃として放たれる、膝を後ろに下がって避け、続いて放たれたサマーソルトもどきを後ろに飛んで躲す。尻尾が顔すれすれを掠めて、とはいかなかった。尻尾が私の首に巻きついて、ぎちぎちと締め上げる。少し、予想外の攻撃だ。

「はあっ！」

そのまま、尻尾を引き戻して……解放されたその瞬間には既に私

は、フリーザの角に体を貫かれていた。どこだっけここ、脾臓だったか肝臓だったか。ともかく即死するような事が無かったのは幸いとも言える。

「……ぎっ……が……あ……」

フリーザがユツサユツサと首を振って、その度に激痛が走る。なんとという鬼畜系乗馬マシン。

痛いから、振るなって。悦楽のフリーザタイムはまだまだ先だから。痛いって。

いや、だから痛いって、聞けよ。

「痛いってんだろぅが！」

叫びながら、膝を叩き込もうとするが、流石にこんな状況で高い威力が出る訳も無く、あっさりと受け止められた。

まあ、本命はそっちじゃなく、つつかそろそろ揺すんのやめろって。

「……投影開始」

手に生成するのは、短剣。それをフリーザの背中に突き刺した。

「……がぁぁぁ!？」

叫ぶフリーザ。同時に僅かだが角が抜けかけ、その隙に脱出する。

「はぁ……はぁ……」

風穴に手をかざして魔術で傷を塞ぐが、所詮は応急処置に過ぎない。重症が軽傷になった程度。いつ傷が開くかも分からない。こっちもそろそろ、真っ向勝負はあきらめないと、駄目かもわからんね。「貴様はなかなかやるな……どうだ、オレの部下にならんか？」

そうすれば命は助かるぞ」

「断る」

「残念だ」

言って、掌をこちらに向ける。気が収束し、それが放たれる。

「バニシングブラスター! ……消えたっ!？」

「はぁっ!?!」

それを瞬間移動で紙一重に避け、フリーザの背後に回る。そして

その短剣に蹴りを叩き込んだ。

短剣は更に奥深くに突き刺さり刃が見えないほどに埋まった。

「ぐううう！」

蹴りそのものはあまり効かなかったらしい。直ぐに振り向きざまに裏拳を放ち、私がそれを避けて距離をとっている間に、尻尾で抜いていた。

「返してやろう」

そんな言葉と共に飛来する短剣。それを弾いて、同時に【n a m e l e s s】を生成。

「こつちも全力で行かせてもらおう」

さて、これで時間稼ぎでも出来ればいいんだけど。

そして、蹴りを受けて折れた。

「オイイ！？」

初撃で折れるとかどういう事だよ。不良品ってレベルじゃねーぞ！？ 因みに、後々調べてみた結果、これ剛性が全く無かった。固いの脆いそんな槍だった。やっぱ計算上のスペックなんてあてにならないね。

ぎりぎりでかわしたものの、直撃してたらちよつとまずかっただろつ。

「……ふっ」

「ござかしい！」

崩れた体勢を立て直す為に折れた槍二本を投擲、薄笑いを浮かべたフリーザはそれを軽く避けて気を掌に収束させて、横合いから吹っ飛ばされた。

「無事か、アニス」

ちよつと予想外な事に、私を助けたのはシユラだった。

「あ、うん」

「アニス姉、今のうちに封印を解いて」

私の傍にやってきたリーフ。後ろには悟空とピッコロがついてき

ている。

「ん、他の皆は？」

言われた通り、封印を開放する。四つとも解放して、これでフリーザにも負けないだろう。こうなるなら最初から気を開放してればよかつたとも思うが、まあ、済んだことを気にしてもしょうがない。

「万が一の為に、ドラゴンボールを集めて貰ってる」

確かに、フリーザがこの星を消すとか言い出しても、止められるとは限らない。備えは必要だろう。

ただ、クリリンがいなくてことは、これ……悟空の超化フラグ消えてるよね？

053 | 沢山変身する奴って、絶対なんか印象薄い奴が有るよね。

「ぐう……キサマ、サイヤ人か。オレの知らないサイヤ人がこうもいるとは思わなかったぞ……」

吹っ飛ばされたフリーザは大したダメージを負っていない。反射的に気を集めた掌で防御したからだ、シユラもそれでダメージを負っている様子は無い。

「ふん、このまま叩きのめしてやってもいいが……流石にそれじやあつまらない。変身しろ、フリーザ。今のお前じゃ俺には勝てない」

「ふ、ならお言葉に甘えさせて貰おうか……かあああ」
先程までは、ただ子供から大人になっただけの様な変化だったがそれは正に変身と言えた。

身体が僅かに小さくなる代わりに、首が伸び、肩が肩当のように変化し、頭部が巨大化し、角が小さいものと大きいものの二組に変わる。ただそれだけだが、その圧倒的な程の気と相まって化け物としての印象は充分だった。

「思った程の化け物じゃないな」

それでもシユラは余裕の態度を崩さない。腕組みしたまま、そう呟く。

「……ふっふっふ、では小手調べと行きましようか」

そう笑って、フリーザはシユラに肉薄すると手刀を放つ。それをシユラはあっさりと見切って、フリーザを蹴り飛ばす。

追撃の鉄槌を受け止めて弾き、そこに蹴りを返すフリーザ。それをいとも容易く受け止め、地面目掛けて投げ飛ばすシユラ。

地面を削りながら漸く停止したフリーザを見下して、シユラは笑う。

「まだまだ本気じゃないんだろ？ 見せてみるよ、フリーザ」

「ほっほっほ、では行きますよ!」

フリーザはそう笑い返して地を蹴る。

「……ピャピャピャピャー！」

フリーザの蹴りを受け流したシユラの腕を尻尾で掴んで投げると、そこに連続で二本指で突きを放つが、その先から放たれる気弾はシユラの肉体を穿たず、周囲に張り巡らされたバリアーに掻き消される。

「ふ、くだらんな……ただ奇声をあげるだけの技か。プレゼントをしてやる……手本を見せてやろう、サタデークラッシュュー！」

「何!？」

シユラが反撃に放った一撃がフリーザを吹き飛ばし、岩山を一つ粉々にする。

そして粉塵が巻き上がり……数秒後、渦を巻いて吹き飛んだ。

「ふふ、これがボクのの真の姿さ……滅多に見られるものじゃないよ。しっかりと目に焼き付けて、あの世で自慢でもすると良い」
140ほどの小柄な体躯。全身が白い肌に覆われ、特徴的だった角は消え、手首や足首に存在した殻は無くなり、紫色の結晶のようなものが露出したシンプルな形態。もともと人間に近い、がその威圧感は今までのそれとは段違い。外見で判断するべきではないと言っている見本だろう。

「さあ、君達に死よりも恐ろしい恐怖と言うものを教えてあげるよ」

「ち、出来れば一人で倒したかったがそうもいかないか」

シユラは舌打ちして、気を高める。それでも眼下のフリーザには届かない。

「……シユラー！」

それに並んだのが、悟空。2対1だ。卑怯とは言えないね。それでも、フリーザに届くかどうかは怪しいところだが。

「シユラ、悟空、おれも混ぜてもらおうぞ……」

そついう訳でピッコロさんも二人に並んで構える。

054 | 戦闘力差は人数と戦術次第でひっくり返る

「……行くぞピッコロ」

「ああ、まさかまたお前と一緒に戦う事になるとは、な」

悟空とピッコロは界王拳を使い、その戦闘力を増大させる。それでも、フリーザの余裕の表情は崩れない。

悟空の戦闘力は今現在、180000程度。界王拳を使っても200000に届かない。ピッコロは素での戦闘力で界王拳を使った悟空を大きく超えるが、界王拳そのものが未熟であり、そこまで上昇させられるわけではない。

シユラはそのピッコロを大きく超える戦闘力を有するが、界王拳そのものが使えない。

「ふふ……じゃあボクからいかせてもらおうよ？」

フリーザはそのシユラよりも遥かに強い。真正面から突撃してきたフリーザの前にピッコロが躍り出て、両手でがっちり組み合った。力比べだ。

体格では大きく劣るフリーザだが、それを補って余りある戦闘力でじりじりと押していく。もう既に体格差でどうにかなるほどの戦闘力差ではなく、一瞬で片がつけられるが、フリーザの嗜虐心というか遊び心が態々この勝負に付き合わせた。

「化け物かつ……」

ぎりぎりとおぼつかれているピッコロからは余裕そうに微笑むフリーザがよく見えた。

これほどとは思っていなかったが、それでも無策で化け物の前に現れるほどピッコロは不用心ではない。

フリーザには思いもつかない。自身が強すぎる故に誰かと連携を組んだことは無く、また自分を前にして連携を組めるほどの強者に会った事も無かった。

故に、ピッコロが一人で挑んできたと言う事にさして疑問を覚え

ていなかった。ピッコロは、ちらりと後ろを確認すると後退してフリーザの体勢を崩し、投げた。

「かめはめ波ー！」

悟空のかめはめ波。十倍界王拳で増大した気をしっかりと溜め、収束した上で放たれたそれは二十倍界王拳の後押しを加えてとてつもない威力を内包している。

だが、それは呆気なくフリーザの掌に受け止められ、そこから放たれる気功波が押し返す。

「まだまだっ！ マンス・フラッシュ！」

そこに当然の様に追撃されるシユラの気功波。両手を合わせて放つ、シユラ版かめはめ波と言った所だろうか。フリーザの顔に驚愕が浮かんで消え、直ぐにその顔が顰められる。

「くう……！」

ぎりぎりとし出しては押し戻されて、一進一退の攻防が続く。

ここで悟空が界王拳二十倍をもう一度発動できれば間違いなく押し切れるのだが、元々体の負担が大きい技なのだ。その限界を一瞬とは言え一度超えた以上、悟空としてもやれる保証は全くないし、シユラはさせる気そのものがない。

「爆力魔波っ！」

「んなっ!？」

その硬直を打ち破ったのは、ピッコロの爆力魔波。三つの気が混ざり合い、一つの奔流となって突き進む。フリーザの気は容易く散らされて、その残照が周囲を取り巻いてさらに威力を増しながら突き進み、フリーザを飲み込んだ。

「……死んだか？」

アニスはその光景を見ながら、ぼつりと呟いた。

光が収まると、フリーザはそこに悠々と佇んでいた。見る限り裂傷とか打撲に近い、軽いダメージこそあるみただけで致命傷には程遠い。

「今のは、痛かった……痛かったぞー!!」

叫んで、一気にシユラとの間合いを詰めて蹴り飛ばし、ピッコロを殴り飛ばして、そこに悟空を投げつけた。

「お返しだつ！」

そこに放たれるデスポール。シユラ達がもう一度力を合わせればどうにかできなくもないけれど、体勢とタイミングが悪い。

「やつぱ私つて、天才かも？」

言いながら、射線上に割り込んで、両手を前に。デスポールに指を突っ込んで、それを引き裂いた。

「昔から天才だよ」

ちよつと無茶っぽかったネタ振りにしっかりと答えてくれるリーフ。

「リーフ、三人を頼んだ。」

さ、第二ラウンドと行こうか、フリーザ……!!」

「やけに自信満々だけど……勝てるつもりなのかい？」

じゃなきゃ、リーフを退かせたりしない。

それに、気付いていないらしい。さっき私がやった馬鹿げたことに。

幾ら全力ではないにしろ、凄まじい威力を秘めたデスポール。それを弾いたり受け止めたりするならともかく、力技で引き裂くなどそうそう出来る事じゃない。

因みに、なんで引き裂いたかと言うと、弾くとナメック星に当たりそうだったからで、受け止めるのが苦手だからだ。前世でもドッチボールとか苦手な部類だった。逆に片手で掴めるものなら、硬球

とか飛矢でも楽に受け止められるんだから人間ってよく分からない。

「…………ふっ」

フリーザに回し蹴りを叩き込む。フリーザは間合いを詰めて蹴りの威力を軽減しつつ、私の胸に拳を叩き込む。私がフリーザにやった事をそのまま返された形だが、大きく違う点がある。

フリーザの時とは違って、私の反応が早い。フリーザの拳が当たると同時にフリーザの腹にめり込む私の拳。そして、浅い打撃では今の私に大したダメージを与えることは出来ない。

もう片方の手から気弾を放って、フリーザを吹き飛ばす。岩山とか植物をなぎ倒し、フリーザはようやく止まった。

そして、私に人差し指を向けて。デスビームか、と理解して。閃光が奔った。

直撃。

二発、三発と連続で放たれるが、避ける気も起きない。

「…………馬鹿にしてるのか？」

確かにデスビームのその速度に関しては凄まじいものがある。だが、威力も効果範囲も最小限。

格下相手ならともかく、同格かそれ以上の相手にはどうやっても通用しない。私には避けられないが、気を集めて防御することくらいは出来る。しかもそれで殆ど無効化できるのだからどうしようもない。

と、平然としている私によく気付いたらしいフリーザが驚愕の表情を浮かべている。指先に気を集めて、それが途端に数十メートル程の大きさを持った気弾に変わる。

さっき、引き裂かれたばっかなんだけどね。

今度はしっかりと余裕を以て相対して、それを受け止めて押し潰した。

と、そこで…………フリーザがない事に気付いた。

空が、暗く。

「……おいおい、不味いか……？」

フリーザが向かう先にいるのはポルンガ。とんでもない速度で向かっている。そのポルンガの位置にいるのは地球の戦士達。

ちよつと不味いことに、今のポルンガは宇宙公用語に対応している。私が、ナメツク語でしか使えないの不便だから、と魔術の練習がてら弄くってしまったのだ。

そして、直し忘れていた。

つまり今、ギャルのパンティーおくれー、とかオレを不老不死にしろーと叫ばれると普通に願いを叶えられてしまう。

それはマズイ。いろいろと。

瞬間移動をしようとして、そこにさつき介抱^{びんた}してあげたサイヤ人が気弾を放ってくる。大した事の無いそれをぺしんと弾いて。

「ここから先は一方通行だ……！」

「……退いてくれそうにはないね……」

因みに、フリーザが驚愕したのは、アニスが考えていたこととは違う。クレスが立ち上がった事と、クレスからの言葉だった。クレスは喋った訳ではなく、気を用いて文字を描き、それをフリーザに伝えたのだ。

「向こうにドラゴンボールが揃っているから願いを叶えに行ってください。こっちの方が自分で何とかします」と。

クレスは本来、ナメツク語でしか受け付けてくれない事はすっかり忘れていた。それが吉と出たともいえる。アニスが弄くつてなければどうしようもなかったのだが。

37 | フリーザ、願う

クレスは、内心の恐怖を押し隠しながらも構える。その構えにアニスは小さく呻いた。

「師匠……」

正しく言えば彼女の弟子ではないし、師匠ではないのだがそう呼べと強制してきた、近所のお姉さんのそれに酷似していた。

そう言えば、あれぐらいの背丈だったような、あんな感じの顔だったような。

同時に、そのスパルタ教育がリフレインして、小さく震えるアニス。

「……師匠」

実際、構えが似るのは同じ合気道である以上、仕方ない事でもあるがアニスは目の前のサイヤ人が転生者らしいこともすっかり忘れていた。それに、そこまで似ている訳でもないし、それ以前に別の世界なのだが、混乱したアニスにそんな考えは既がない。

「師匠、今日こそ私はアンタを超える！」

「（え、誰それ？）」

ぐっと拳を握ってアニスは叫び、突貫した。

当然の様に軽く投げられたのは言うまでも無いだろう。

フリーザは今までにないほどの速度を以て空を駆ける。自身の悲願を叶える機会が漸く巡ってきたのだ。クレスの事は特に心配していない。あれほどの男が死ぬとは思えなかったし、願いを叶えたらすぐさま戻るつもりだった。万が一死んでいてもドラゴンボールで甦らせれる。既にフリーザの未来予想図にはクレスが不可欠なほどになつていたし、甦らせないと言う選択肢は無い。

だから、フリーザはポルンガを前にして叫んだ。

「オレを地球人の……美女にしろー！！」

フリーザの未来予想図は、既に父や兄を超えての宇宙の帝王から、
クレスの妻（或いは夫）に書き変わっていた。

宇宙は今日も平和です。

37「フリーザ、願う」(後書き)

誰得だよと言いたくなるTSパート2

38 | もう少しだけ続くよナメック星編

「……了解した、では、二つ目の願いを言え」

「いや、ボクはもういいよ、で……もう変わってる？」

「うむ、聊か私の趣味が入っているが」

フリーザに確認するすべは無いが、その姿は確かに望んだとおりに美しい。

薄紫色のショートヘア、パツチリとした紅色の瞳、すつと通った鼻筋にぷつくりとした唇。

少年を思わせる中性的な顔立ち。白くきめ細やかな美肌、起伏に乏しい小柄で華奢な体躯。

白いブラウスシャツに男物の紫色ズボンというラフな格好。

美女というよりはボーイッシュな美少女といった感じたが、ベクトルこそ違えど美しいことに変わりはない。

「はははははっ！！……はははははははっ！！」

ふさふさの髪をさらりと流し、フリーザは笑って地を蹴った。

「……待ってるんだね、クレス……くくく、はははははははははっ！！」

「……あれ、フリーザだよな」

「ああ、姿形は変わったが、気はフリーザのものだった」

「不老不死求めてナメック星、じゃなかったのか」

「……なんだったんだろう」

「さあ、お前たちの願いを言え」

後には困惑する地球人組み四人と、巨大な竜、ポルンガだけが残されるのだった。

056 クレスとアニス

「……………」

アニスとクレスの戦いはほぼ互角で膠着状態に陥っていた。アニスは最初こそ冷静さを失っており、容易くクレスに捌かれていたが、今は冷静さを取り戻して、じりじりとクレスとの間合いを詰めていく。

元々二人の戦闘力の間には天と地ほどの差があるのだ。アニスも一応手負いだが、その差を埋めるには至らない。

というより、アニスとクレスを比較すればクレスに勝ち目は無いと言っていい。

どこをとつても、武術家としてクレスがアニスに勝る点は無。あくまでもクレスのそれは護身術に過ぎないのだ。

強い者と戦い競うわけではなく、強い者に勝つためでもなく、身を護る為の術を学んできた。

ストリートファイターや喧嘩屋じゃああるまいし、護身において不必要な争いは起こさないものだ。それを体現するために、合気道は約束稽古で十分な力を身につけさせる。

だがその合気道でもアニスには大したダメージが無い、と言うか受け手として余程熟知しているらしく、殆どの技を外され、抜けられた。

こうなってしまうえば、クレスは前世で言えばそこらにいる一般人に過ぎない。一般人が武術家、武道家に勝つ簡単な方法は背後からナイフで刺す、だが相手は武術家どころか戦車や戦闘機の類に近い隙を作ってナイフで刺そうにもまず刃が刺さらなければどうしようもない。比喻や物の例えではなく、前世には存在しない気という存在が実際にそれを可能としている。

だが、二人の戦いは互角だった。アニスにクレスの合気道は通用

しないが、クレスにアニスの攻撃も通用しなかった。

それは防御と言うより逃避だった。アニスが一步間合いを詰める
とクレスが一步引く。攻撃その全てを紙一重で避け、さらに避ける。
反撃も防御も考えない回避のみに専念した動き。

当たらない、当たらない。虚実を折り込もうが、まず間合いその
ものから離れてしまうのだからどうしようもない。ために尻尾も
振り回してみたが、流石に殆ど遣ったことの無い部分を自在に使う
ことは出来ず、邪魔なだけだった。

「ちょこまかと……っ……この気は、フリーザか!？」

こちらに高速で戻ってくる。と言うことは願いを叶えたと言うこ
とだろう。

十中八九、不老不死に違いない。

不老不死を倒す方法は無い。精々、封印する程度しかない。

救いと言えば、流石に不老不死になったからと言っていきなりパ
ワーアップは不可能だし、回復力が大幅に上がるわけでもない。た
だ死なくなるだけだ。

今なら、アニスカリーフが全力を出すだけでフリーザを叩きのめ
すことが出来る。だが、封印することは不可能だし、不老不死を願
いで取り除くことは不可能だ。そんなことが出来るなら、どこぞの
魔凶星出身の魔族にでもやっっている。

「おいおい……まじですか?」

勘弁してよ、と嘆いてみるも自分が元凶だと言う自覚があるだけ
に後ろめたさが増しただけだった。

057 | そして事態は終息に向けて収束する

「クレス、ありがとう。お蔭様でボクの願いは叶ったよ」

「……どちらさま？」

……とりあえず、降り立ったフリーザに度肝を抜かれた。まさかのボーイツシュ系美少女に変身……え、これ第何形態？原作にこんな登場しなかったんですけど、え、何これ。誰得？

いや、可愛いけど、可愛いけどさ。大事な事だから二回言いました。でも、もう既にヒロイン枠充分だと思っただ。チチ、ブルマ、十八号、ビーデルと言う原作ヒロインに私、リーフ、シュラと言うヒロイン。そこにフリーザを追加。

バトル漫画つてもっとこう、男臭いっていうか、汗臭いと言うか。言うなればグラップラー刃牙とか、修羅の門的な感じでいいと思うんだ。と言うかこれ以上美少女が出てこられると私が困る。具体的に言えば目立たなくなる。

「フリーザ様！？ 目的は不老不死なのは……」

「そんな事より優先すべき事が出来ちゃったからね……やっぱり、こんな姿のボクは嫌かな……？それとも、つい勢いで地球人って叫んじゃったけど……サイヤ人の方が好みなのかい？」

「いえ、決してそんなことは……」

そう言っただけでとんと小首傾げるフリーザ。え、何これ可愛い。そうして少し和んでいたらいきなり睨みつけられた。

「君には負けないから……（失恋を）覚悟しておくんだね」

ビシィ！と指を突き付けて言うフリーザ。そこで漸く、何となく事態を把握。手招きして耳元に口を寄せる。

「なんだい……変な真似しないでらうね……？」

「私は君の恋敵じゃあない。むしろ、君の恋愛を応援するよ……彼の事が好きなんだらう？」

私としては同性愛にそこまでの忌避感はない。前世でも色々とあ

つたし。それに今は女らしいし特に問題も無いだろう。手術するのとおなじだ。

「……何故分かったんだい……」

「わからないでか」

理解したのは今さっきだけど、そう考えればあの時のよく分からない激昂も何となく説明がつく様な気もする。自分が好きな相手にぽつと出の異性が密着してれば気にもなるよね。微笑ましく感じたのは多分、私が前世で何度か見た恋する乙女とか言うやつだろう。殆ど絶滅危惧種だったけど。

フリーザ様マジ乙女。もしかしたらあのオカマみたいな仕草や口調も女になる為の予行練習だったりするか？いや、それは無いか。もしそうだとするとあそこまで薄っぺらい付け焼刃な訳も無い。

「よし、じゃあ……」

キングクリムゾン！

そして、フリーザとクレスが私達の仲間になった。正しく言えば、地球への移住を決めた。そしてフリーザ一味の手掛けたナメック星人たちを地球のドラゴンボールの力で甦らせる。

出来ればここで、フリーザにナメック星人たちと和解してもらいたかったのだけど、謝ったとしても色々と無用な混乱が起きるばかりだろうから、無しになった。

なんと言うか、原作よりも大分丸い性格になったらしく、和解しようと言い出したのはフリーザだったりする。

まあ、そんな感じで。いろいろ端折ったけども、一応は……ハッ
ピーエンド……なのかな？

058「……と思っていた時期が私にもありました

「……ぎりぎりぎり」

のっけから聞き苦しい歯軋りでごめんなさいと何故か無性に見も知らぬ誰かに謝りたいアニスです。

とりあえずは、長老達にだけでも謝らせておこうとフリーザ達と別れて数分。折れた【nameless】を探していた私に襲い掛かった気弾。フリーザが放ったデスボールよりも遥かに強い。

たぶんフリーザがフルパワーで放つデスボールクラスじゃないだろうか。

今は、それを何とか受け止めている訳で。

この星を消す、とか言って原作で撃ったアレは、実際そこまでの溜めがあつた訳じゃあない。寧ろ威力としては最低限レベルだ。

だが、これは違う。ナメック星に着弾すれば確実に惑星ごと、デーンされてしまう。

サイヤ人に限らず、気を扱える戦士であるなら大体は宇宙空間でも生存可能だ。ナメック星人も地球人も星の爆発にさえ気づければ、どうにかできなくもない。

だが、問題は。

惑星の爆発は惑星にのみ依存するわけではなく、気弾が撃ち込まれた場合はその威力も大きくかわってくる。

当然ながら、原作のナメック星の爆発とは比較にならない今回の爆発を防いだ上で生存可能なバリアーを張れるのは恐らく四人。私としても何度も惑星の爆発を見た訳でもないし詳しい訳でもないのでもうとも言えないのだが、リーフは当然としてもフリーザ、私とシユラの三人は少し怪しい。そして、それ以外は全滅必至だ。

つまり、止めないと終わり。

パワーボールが作れればどうにかなるだろうけど、生憎両手が塞がってるし、私は悟空みたいに器用じゃない。

疑似無限の剣製も相手の居場所が分かれば少しは役に立つだろうけど、今は何の役にも立たないと言うか……実際、必殺技として開発したのに戦闘で殆ど使えないんだけど。

まあ、使い慣れない技だから仕方ないと言えなくもないんだけど。「……ちよつと覚悟決めようか」

気を両手に集中、気を放出して押し返す。ぐぐぐぐ、と少しずつ離れていく気弾。

これでも一応全力なのだけど、このペースだと多分一時間かけても敵の場所まで行かないね。

「ちよつと裏技使わせてもらおうかな」

そして私はそれを解き放った。

「スターダスト、ブラスター!!!」

掌大の小さな黒い光弾。下手をすれば、ボタン一つで出せてしまいそうな外見のそれはさっきまでの苦労が嘘のようにアツサリと数十倍はあるだろう巨大な気弾を押し返していく。

まあ、ある意味では当然だ。魔術と気の融合による私だけの必殺技。

どこぞの魔法先生が使うように気と魔術が反発して強大なエネルギーを生み出すとかそう言ったことは無いが、その威力だけは凄まじいものがある。

ただし、一発限りというマダンテにも似た燃費。魔力と生命力を気に変えて、増大した気を一気に解き放つと言う単純な技で使うと魔力は空。気の容量は空っぽに近くなる。今の私は戦闘力を測れば100程度じゃないだろうか。

「おおおおっ!?!」

誰かの叫びが聞こえて着弾と同時に解放、爆発させた。

それを確認して私は、少し眠りにつくのだった。

059 | キンクリだと思ったか？ 俺だよ！（前書き）

今回、多分ちょっと微グロ入ってるので、お気を付けて。

実際、これがグロ描写入ってるのか判断出来ていないので、出来れば感想なんかで教えていただければ幸いです。

グロいのであれば警告タグをつけたいと思っているので。

059 | キンクリだと思ったか？ 俺だよ！

ナメック星全体を揺るがす巨大な力の波動。何度か感じたこの感覚はアニス姉の奥の手、スターダストブラスターに間違いないだろう。

少し前ならいざ知らず、今のアニス姉はフリーザ如き全く問題にならない程の戦闘力を有している。その上で培ってきた技術が違い過ぎる。何においても圧倒的な戦力差。

スターダストブラスターを使う必要性は全く無いのだ。唯一あり得るとすればフリーザがフルパワー以上の奥の手を隠し持っていた場合だろうか。だけど、そんなものがそう都合よくあるはずもない。そう考えてみてもざわ…ざわ…とした心は全く落ち着かず、プレッシャーの様なざらりとした不快な感覚が広がって。

「……っ」

嫌な予感に駆られた私はいてもたってもいられず、瞬間移動した。

そして、見えた光景は。

スターダストブラスターの影響で気や魔力をほとんど使い切り、倒れ伏すアニス姉。

そしてその倒れたアニス姉を踏みつけて醜悪に笑うサイヤ人。

私は、そのサイヤ人を知っている。

浅黒い肌、背丈は平均的ながらもがっしりした屈強な体躯、黒を基調としたバトルジャケット。

悟空と似通っていないながらも全く似ない、醜悪な顔立ち。

ターレスだ。

だけど、大きく違う点がある。その立ち上る様な気はフリーザを超え、髪は金色に変化し逆立って、翡翠のような瞳。

超サイヤ人と化していた。

ターレスは頭をげしげしと踏みつけてその度にアニス姉は呻いて、小さく体を震わせる。それが気に入らなかつたらしいサイヤ人は、舌打ちすると、頭に乗せていた足を腕に移動させて、ごきりと踏み折った。

悲鳴を上げるアニス姉。

それが気に入ったのか、アニス姉を仰向けに転がすとその腹を蹴り込んだ。折れた骨が、腹を突き破って白い骨を晒す。付着した赤い血とピンク色のあれは肉だろうか……痛々しい。

今度はアニス姉は、悲鳴をあげなかつた。肺が何かを傷つけたらしい。代わりに少し、血を吐いた。

それも気に入らなかつたらしいターレスは今度はその胸を踏みつけた。目を見開いて悲鳴を上げるアニス姉。

「……やめろ」

声が出ない。今すぐにも、大声を上げて、止めてやりたいのに。

「やめろ……!!」

生まれついてとは言え、それが出来ない自分に腹が立つ。

なんで、もう少しでも、近くに瞬間移動しなかつたのか。

なんで、もしもアニス姉が成長する邪魔にならないようになって考えたのか。

何様のつもりだ。

「くく、ははははっ!!」

「っ!!!!」

私がそこにたどり着くとほぼ同時、狂ったような笑いとボキボキと言う骨の折れる音とアニス姉の声にならない悲鳴。

そこでようやくターレスは私に気付いて。

「おや、お仲間か……ちょっと遊ばせてもらってるよ……っておいおい、そんなに睨まないでくれよ、怖い、怖い。怖すぎて踏み抜いちゃいそうだ」

いつの間にか、足をアニス姉の胸から顔の上に移動させて、ターレスは笑う。

「……………」
涙目で、懇願するように私を見てくるアニス姉が少しだけ頷いた。無事な片手で首を掻く切んな仕草を見せる。

小さく頷き返して、覚悟を決める。下手をすれば、アニス姉は死ぬ。間接的とはいえ、私が殺す。かもしれないじゃなく、殺す。その覚悟を。

死ぬ側のアニス姉が覚悟を決めてるんだ。私が決めないでどうする。

ターレスは私、私達にとって、死すべき、殺すべき相手だ。

アニス姉がやられたのは実力不足と、采配ミスに過ぎない。恐らくそこはアニス姉も認めるところだろうし、私もなんとも思わない。これで殺されたのなら、私もアニス姉も文句は無い。感情は別としても納得はしただろう。

痛めつけたことだって情報収集手段の一つと考えれば、必要な事だし、敗者にする事の一つとしては妥当とも言える。その甚振るのが楽しくてついつい笑う奴もいるだろう。

だけど、こいつは必要も何も無いのに、アニス姉を甚振って、笑っている。

前世でも、今世でも初めてだ。

他人を何をしてでも、殺したいと思ったのは。

「踏み抜きたければ踏み抜けばいい」

ターレスを見据えて、構える。

それを鼻で笑うターレス。出来る筈が無いと、表情が言っている。

だけど実際、人質なんてものは、死んだと見なして無視するのが正しい対応だ。帰ってくるかどうかも分からない人間の命なんかに拘ってたら、こっちまで引きずられてしまう。

人道的ではないけど、生きてたらラッキー程度でいい。
それに、人質っていうのは大体相手にも通用する。人質を殺したら後はどうすればいいのか。死体じゃあ人質にはならない。自分の生命線にも等しいそれを殺せる人間は、覚悟を決めた奴、後の無い奴や自身の保身を考えない奴、狂った人間ぐらいなもの。

「踏み抜いた瞬間、お前の地獄は確定……それでも構わないなら言いながら気を開放する。今の精神状態で、超サイヤ人2状態になると冷静でいられそうにないから超サイヤ人で止めている。」

「超サイヤ人だと……テメエもやはり転生者か？」

と言うことはこいつも転生者らしい。異常な戦闘力増加とかからそうじゃないかとは思っていたけど。

「く、来るな、動いたら本当に踏み抜くぞ!？」

「構わないと言った」

「人でなしかテメエ!？」

人の姉を散々蹴っついておいてそれが、お前が言うな。

そう思いながら地を蹴って間合いを詰め、殴り掛かる。確かな手応えを感じたと思ったら、丸太だった。変わり身？

「残念だったな」

そんな言葉と共に背後から蹴り飛ばされる。

地面を抉りながらブレーキをかけて、体勢を立て直す。

「……予想以上」

何となく原作よりがっしりしていると思っただけけど、それはどうにも鍛え上げただけじゃなく、超サイヤ人の第二形態に変身している為でもあるらしい。

超ベジータでお馴染みの形態で、パワーとスピードが通常の超サイヤ人よりも格段に上昇する。だけど、体に対する負担も格段に上昇する。

単なる超サイヤ人へと変身しただけの私はそれよりも僅かに劣っている。負担は少なく、肉体的にも精神的にも非常に安定した状態

な為に、一概にどうとは言えないけれど。

そこに突っ込んでくるターレス。殴り掛かるとみせかけて後蹴り。

紙一重でそれを見切って、懐に入りつつ拳でカウンター。

その姿がまた、丸太に変わる。そして背後に現れた所に後る肘打ち、裏拳を叩き込む。

「甘い」

それを受け止められて投げられるが、自分から飛んで空中で身を捻り、着地する。

「甘いのはそっち」

言い返しつつ足を払って、そのまま力でぶん投げる。

と、一瞬見えた笑みが気になって本能の警告に従うまま、後ろに飛んだ。

同時にその場所を中心に突き立つ剣、槍をはじめとした様々な武器。アニス姉が使うのによく似ているけれど、それとは比較にならない数で、爆発の威力も凄まじかった。

アツサリと吹っ飛ばされて、空中で体勢を立て直したところに、私を挟むようにして飛来する二振りの剣。だけど、特に速すぎると言う事も無く、余裕を持って躲す。

「今のを躲すかあ、ならコイツでどうだ？」

言いながら、ターレスが構えるのは一振りの槍。それを振り被って、投げた。

「突き穿つ死翔の槍！」

私はそれも悠々と避けて。胸に槍が、突き立った。

「なん……だと……？」

そして、地面に落ちて仰向けに倒れこんだところまでは、覚えてる。

ターレスはそれを確認すると、一仕事したと言わんばかりに額の

出てもいない汗をぬぐった。

「はははははっ！ 幾らテメエが転生者でもな、俺みたいなチート系オリ主に敵う訳が無いんだよ！」

それでも流石はドラゴンボールと言うべきか、ターレスは何度もぼこぼこにされてきた。故に、今の彼は普通にインフレについて行きなながらも、チート能力を付加した状態だ。

因みに、そのぼこぼこにされた事態に約六年前のナメック星襲撃が含まれていて、それが彼の急成長の要因だったりするが、どうでもいい話である。

059 | キンクリだと思ったか？ 俺だよ！（後書き）

ネタバレ、というか追加説明。

つまり、ターレス「ナメツク星襲撃犯です。アニス達にナメツク星人が襲い掛かった元凶です。

クレスのあの発言は何、と思うかもしれませんが、読み直すとわかると思います。

アニス達がナメツク星に初めて行ったときは、エイジ757でその二年前に襲撃を受けています。エイジ755ですね。ターレスが襲撃したのはこの時です。

そして、今はエイジ761です。クレスが襲撃したのはその時から考えて二年前、エイジ759。

記憶力のいい人なら、別人説を考えている人もいたかもしれませんがね。

060 | スーパーフルボツコタイム始まるよー

「んぐっ……」

あーこりゃ、ずいぶんとやってくれたもんで。なんか土っぽい味もするし。なんかウザったいと思ったら髪の毛バラバラだよ。髪型ポニーテールもあの髪留めも気に入ってたんだけど仕方ないね。

実の所、結構きつい……ここまで衰弱したのって久しぶりだし。

「でも、泣き言なんて言ってる場合じゃないよね……なあそこのお前」

愛しの妹に刺し穿つ死翔の槍なんてもんを突き刺してくれやがった奴がいる訳だし。

いや、こんな世界にいる以上生き死には当たり前とも言える。私だつて何度も何十、何百と言う命をこの手で奪った。命令した分を加えればもつと多くなる。そしてそれを恨んで復讐に来た奴も全て叩き潰してきた。

だけど、自分の身内が目の前で殺されかけて、見逃せるほど人間出来ちゃいないんだよ。それが愛しの妹や弟となれば、ガンジーも助走をつけて殴るレベル。ガンジーを殴るのか、ガンジーが殴るのかはどうでもいい。何故だが、気が漲る。魔力が、滾る。空っぽになった筈の私だが、何時にもまして絶好調で好都合。

「あ？なんでダメエ」

「黙ってる」

その顔に拳を叩き込むと同時にその姿は掻き消えて代わりにごろん、と丸太が転がった。

「死にぞこないが！」

背後から放たれた蹴りを後方宙返りで回避、そのまま肩車くぐりかいてんのような形でターレスの肩に乗り、その首を固定して転蓮華し、飛び降りる。

「……バーサーカーか何かかお前は」

だが、それでもターレスは死んでいなかった。ごきごきと首を鳴らして、にやりと笑う。

「ご名答、俺はバーサーカーの十二の試練を持っている。そして今、テメエの技で一回死んだ。」

そして良いことを教えてやる。この場合の俺の死は仮死状態としてカウントされ、一瞬でその傷は修復される。当然ながら戦闘力も上昇するのさ」

十二の試練

十二の命をそのストックとして有する不死性の祝福だった様な気がする。コイツの言う事が確かなら後十一回殺してようやく死ぬらしい。しかも、どんどんと強くなる。

「……仕方ない、この方法だけは使いたくなかったんだけど出来れば自分の手で倒したかったけれど、たぶん無理だろう。少なくとも、無事な可能性があるリーフをそう長い間放って置く訳にもいかないし。」

そう言う訳で、瞬間移動の構えをとる。

「おいおい、逃げる気か？ まあ、別にかまわないけどな」

その言葉を聞き流して、目的の場所に行き、直ぐに戻ってくる。プロリーと一緒に。

「……え？」

「……姉さん、何？ 大変らしいけど……」

「コイツを倒して。念の為、全力で……私はリーフの具合を見てくるから、よろしく」

そこから先は多分、単なる虐殺ショーだから、振り返りもせずにはリーフの元へ急ぐのだった。

はまだ単なる超サイヤ人に過ぎないが伝説化されたら勝てる気がしない。神精樹、なにそれ、美味しいの？

「カカロットオオオオオ！」

気を高めながら叫ぶブロリー。

人違いです。物凄い人違いです。他人の空似です。

言ってやりたい。だけどそう言って聞くはずもない。寧ろ口を開けばそれを合図に襲い掛かってきそうだ。

「ハアアアアアアアアアアアア！」

全身から閃光を放ち、それが爆発する。

そして、光が収まったとき。ブロリーは伝説の超サイヤ人となって静かに佇んでいた。

勝てるはずが無い。圧倒的なまでの威圧感がびりびりと伝わってくる。

「そうかなあ……やってみなきゃ分かんねえ！！」

がくがくと震える体と心を奮い立たせて、ターレスは叫ぶ。なんというか容姿と相まって非常に主人公的でした。感動的だ。だが無意味だ。

「オオツ！」

「ギヤアアアア！」

次の瞬間にはブロリーの拳が眼前で唸りをあげて、そんな主人公的な考えは吹っ飛んだ。

続けるの連撃もどうにかこうにか受け流し、僅かに速度の緩んだ五発目を避けて、そのまま距離を開ける。遠距離戦でもどうにかなるとは思えないが、まともに殴りあうよりはました。少なくとも逃げる隙が出来るかもしれない。

次にそんな甘い考えも吹っ飛んだ。

「逃がすと思うか？」

掌に生まれる気。通常では考えられないほどに凝縮されたそれは見た目からは想像もつかないほど、馬鹿げた威力を内包している。

「くそっ！」

放たれたそれを悪態と共に弾くターレス。遠くの地面に着弾し、巨大なクレーターを穿つ。

一見すれば大した事の無いよう見えるそれだが、実の所、惑星をけし飛ばす程の威力を持った爆発が半径2メートル程に凝縮されている。

そして迫る二発目。

「ふざけんなよ!？」

こんなものを喰らった日には間違ひなく消し飛ぶ。大慌てでそれを弾いて。

「ハッ、アアッ!！」

その隙を逃さず、迫りくる悪魔。

唸りをあげる拳が顔面を直撃し、ただのそれだけでターレスは死んだ。命のストックが4つ一気に吹っ飛んだ。続きの蹴りでストックが3つ削られた。そして最後に掌打を喰らってストックを2つ削られ、ターレスは大きく吹き飛ばされる。

「冗談じゃねえぞ……おい」

十回死にかけて蘇生させられて戦闘力が上昇すれば、まだ希望ももてたが。

強力な攻撃で命のストックが複数削られると言う彼自身失念していた部分を突かれてしまった。

結果、彼が戦闘力を大きく上昇させたのは三回のみだ。ブロリーにはまだまだ遠く及ばない。

命のストックを増やす能力も今の彼では使えない。一応、自動回復機能もおまけで付加されており、一週間ごとに一つ復活するが、そんなもの今の状況じゃ全く役に立たない。こんな事なら魔力チートも貰っておけばよかったと考えるも何の意味も無い。

彼が神から貰った能力は、二つ。第五次聖杯戦争時における全サヴァントの宝具、ナルトの忍術、幻術、体術の知識。前者はともかく後者は知識があるだけでチャクラが殆ど無い為に使い物にならなかった。今でも使えるのは分身の術や変わり身などの比較的簡単

なものばかりだ。

＼(＾o＾)／

「詰んだ……いや、賭けてみるか！」

「(え、あれ、何でキスしてんの、え、なにぞ、え?) ……」

ブロリーは何かが気になるのかちらちらと後ろを見ている。微妙に顔が赤い。

その油断についてターレスは気を集めて解き放った。

「この星を消せばいい！」

なんとというフリーザ的思考。勝てないなら吹き飛ばせ。

「……あつ!?」

うっかりしてたと言わんばかりに驚くブロリー。

だが、ナメック星は健在で。

「あー……………この星は五分以内に吹き飛ばさず、多分」

「……今、楽にしてやる」

「こんどこそ＼(＾o＾)／」

そうしてターレスは消え去った。厄介な置き土産を残して。

因みに、宝具の一つに使用者を回復させ、物理干涉そのものを防ぐような反則的なものが存在するのだが、すっかり忘れ去られていた。

「……仕方ない、か」

ターレスのフリーザ的思考とブロリーのうっかりが合わさって、ナメック星が爆発することになりました。リーフは怪我が治るまでブロリーと一緒に帰って惑星ジューズで養生することに。

後、ポルンガの願いが、フリーザの一つ(女体化&擬人化)、リユカの一つ(何を願ったのかは知らない)、ナツパの一つ(髪系統らしい)消費されたくらしく、ナメック星人達を地球に送ることが出来なくなったので、最長老を除いて全員【night knight】で地球に移送することになった。結果、なんか地球組と仲良くなったナツパと悟空にツンデレの片鱗を見せているベジ

タを加えると、一人だけ残る必要がある。

そして、様々な理由から私が一人で残ることになりましたとき。と言うか、万が一の場合に生き残れそう宇宙船を操縦できるのが私しかいなかったんだよね。ベジータやナツパは完全に座標指定の自動操縦頼りだったらしいし。

最初はジユースに瞬間移動しようかとも思ったけど、なんかブローリーとリーフの間の空気がギスギスしてるから出来れば帰りたくない。

ナメック星の皆を集めている時に見たけど、フリーザの宇宙船やベジータ達のアタックボールは壊されていた。十中八九、ターレスの仕業だろう。

これはもう最終手段かな、と思った所でフリーザの宇宙船に存在する脱出艇を発見。

どうにかこうにか爆発前に脱出できたのでした、めでたしめでたし。

でさ、地球ってどっち方面？

062 | 脱出の後

今までのあらすじ。

宇宙の帝王改め、恋する乙女フリーザちゃんを仲間にした私達でも、その後に控えていた隠しボス、ターレスのせいでナメック星は原作通り、この始末。になってしまったんだ。

そして、予想外にも既に使い切られていたドラゴンボールの願い。ナメック星人の人達を見殺しには出来ない、救出を急ぐ私達。そんな中、積載量が足りない事が発覚する。スペース的にも重量的にも。

人ひとり分と少し。私の意思を挟まないままに、私だけが残り、そのあまりの分の食糧を手にして、生き残る術を探すのだった。

脱出艇で彷徨う事二月ほど、色々な惑星を渡り、今は惑星グランにいた。

なんとというか、フリーザ軍は完全に解体されたようなのだけど、その残党とそれが利用する軍事拠点の類はまだまだ残っている。

惑星グランはその軍事拠点に近いせいで、残党たちに何度も襲われているらしい（実際は元から侵略予定だったと思われる）。

成り行きでその残党を叩きのめして追っ払ったせいで、報復に来たらどうしてくれんだとか、救世主様だとか何とか言われて、あれよあれよと言う間に軍事拠点を単騎で襲撃することになったた。

それは、軍事拠点には見えない。どちらかと言えば美術館なんかのドームにも似た形状の建造物。

だが、確かにそこを守る兵士たちはいた。

「敵襲、敵襲ー！」

こつちに気付いたらしい二人組のうちの一人が叫び、どんどんと増援がやってくる。

「……なんでえ、たった一人かよ」

「一人でこの人数を相手に出来るか！」

私を取り囲む、フリーザ軍兵士達。一人一人が戦闘力10000を超え、平均戦闘力は12000前後。人数は十七名。

おかしい。

本来、このレベルの兵士ともなればフリーザ軍の中でも精兵と言っているクラス。それがこんなところに集う必要があるのか。

少なくとも私にはその意味が分からない。だが、ここにはそうせざるを得ない、何かがあるのは間違いないだろう。単純に惑星グランの食物が美味いだけとか、量が多いただけならいいのだけど。

だけど、私の感が違うと言う。

「退け」

ちよつと真面目にガンつけて威圧してみる。

それだけで怯え、後ずさる兵士達。中には涙目の奴もいる。これは喜ぶべき所なのか、それとも女の子的に嘆くべき所なのか。

おいそこの、女の……子？　って言った奴、前へでろ。修正してやる。

本来なら、こいつらを叩きのめすべきなのだろうけど、この建物を調べてからでも遅くは無い。これが何かしらの原因だった場合はそれを取り除けば、人的被害は無しに平和的な解決が望めるはずだ。

「パスワード制か」

扉には、小さなコンソールが存在する。カードキーを通す場所が見当たらない事から、完全なパスワード式らしい。

「パスワードは……」

聞いてもいないのに、怯えた兵士の一人が口を開いて。

「いらぬい」

それを聞くまでも無く、扉を無理矢理に押し開けた。面倒は嫌いなんだ。

ゴシカァンと愉快な音を立てつつ、拉げて倒れこんだ扉を踏み越えて、私はその中に踏み込んだのだった。

063 | 施設の正体？

その施設はどうやら、軍事施設ではないらしい。確かに一通りの設備が整っているものの、軍事施設にしては余りにも規模が小さい。軍事施設ではあるものの、純粹にそうであるわけではない。

主なのは奥、地下に存在する研究所であり、それを守備する部隊を運用する為にそういった設備も存在する程度のようなだった。

「第七研究所、ねえ」

奥深く、七枚に及ぶゾルディック家の試しの門を彷彿とさせる様な巨大な門をくぐった先には地下へと続く階段が存在した。

「……へえ、まだ研究を続けてる訳か」

十数分間螺旋状の階段をさがり続けて、明かりが見えた。なにやらがしゃんがしゃんがしゃんと言う機械の駆動音も聞こえる。間違いなく、研究施設が生きている。

更に数分下がり、私はその明りの元にたどり着いた。

「成程、生物兵器か……」

その場所は、研究施設の殆どを一望出来た。がしゃんがしゃんかと動く、機械の類はほとんど分からなかったが、そこから繋がる透明なカプセルの中には様々な色をした溶液とそれに浸かった三メートルほどの背丈を持った巨大な人型の怪物。牛の頭に人の上半身と馬の体を有した所謂、ミノケンタウロスや生物災害の暴君を思わせる者、大きさ以外はとも大猿な者と様々で。

戦闘力、気こそ精々がネイル級だが、恐らくは強化されているだろう肉体とそれに付随する特殊能力などを考えれば、下手をすればギニュー級の戦闘能力を発揮するかもしれない。

或いは、休眠中と言う事である程度低下している可能性もある。

どちらにしても、この怪物達を解き放つ訳には行かない。

今の私は魔術での封印をし直したために、戦闘力が大きく低下している訳だが、ここは封印を解除して、一気に崩壊させるか、と考えた所で。

ここは、研究所の殆どを一望できる。

そして、こちらから見える場合は大体、相手からも見える訳で。

一人の研究者とばっちし眼があった。

「……侵入者だ、侵入者！」

「ああ、もう！」

言いながら、封印を解除。

「ふん、丁度いい。サイヤ人相手にこいつらの性能テストと行こうじゃないか……データはもうあっちに送ったな!？」

偉そうな老人のその言葉と同時に空気の抜けるような音が響いて、カプセルが開く。研究施設はもうどうでもいいと言う事か。そして、目を開き咆哮する三体の怪物はお約束に従って周囲にいた研究員を殺害し、研究施設を破壊する。偉そうな老人は成功が嬉しかったらしく、狂ったように笑っている。見た目通りにそこまで大した知能を持つ訳ではないらしい。怪物も老人も。

推測通り、起きると同時に気が倍近くまで跳ね上がった。一気にこっちに来られていれば不味かったかもしれないけれど、封印を二つ解除した私には及ばない。

二分くらい経って、あらかた破壊しつくした怪物達はこっちを睨んで、咆哮。

ミノケンタウロスが接近し、馬の前足で潰そうとしてくるがそれをトラップシューターで迎撃。予想以上の威力が出たのか、それとも予想以上に脆かったのか、それだけでミノケンタウロスは体を虫食いの様に削られて、絶命した。

その隙に接近してきていた大猿の拳を受け止め、それを近寄ってきていた暴君目掛けて投げつける。

そして、何故か仲間同士で戦い始めた二匹に向かい、二分かけて丹念に仕上げておいたシエルブリットを投げつけて、けし飛ばす。

「兵器としては大失敗じゃないか」

戦闘能力こそ申し分ないものの、知能が残念すぎる。なんか時間を無駄にした気がして、さっさと帰ろうかと思った所で。

「……なに、あれ？」

それを見つけた。

それは、黒くどろどろとした、タールの様な液体だった。ぐねりぐねりと蠢いて、渦巻いて。

そうしてそれが形作るのは、二メートル近い全身真っ黒な人型。スレイヤーズすぺしゃるのスリープアイみたいな感じで、人間で言う目の場所に赤い二つの珠、心臓の場所に青い珠が輝いている。微妙にドロリ（バイオブローリ）を彷彿としないでもない。

「……想定外って奴か」

さっき倒したばかりの三体の気が目の前のまっくろくるすけから感じられる。あの三体が合体用とはとても思えないから、バイオブローリの様な想定外の産物なのだろう。想定外の覚醒、想定外の能力、想定外の暴走、生物兵器に想定外ってつきものだから仕方ないよね。

「……！！」

咆哮。なんと叫んだかさえもわからない、圧倒的なまでの音の暴力に思わず身が竦む。

そこを狙ったくるすけの拳。鞭のように撓んで、勢いよく伸びてくる。それを横に転がりながら躲して、お約束の様に戻ってくるものもじゃがんで回避。

そこに地面を這っていた逆拳がアッパーカットを繰り出して、それをまともに顎へ喰らってしまう。ルフィか、それともアナクレト・ムガビかなんかかお前。

少し自分からも飛んで、着地。幸いにも脳を揺らす程じゃない。視界は良好で意識も明瞭だ。

私に迫ってくるくるすけもばっちり見えてる。見えてるだけだけど。

鞭のようになる横殴りの拳を受けた私は、扉一枚を巻き添えに

しつつ螺旋階段まで吹っ飛んだ。

どうやらこの研究施設の下にまだ地下が存在するらしい。滞空中の私に追いついたくろすけはその腹に蹴りを。ライダーキック的な感じで私と一緒に落ちる。

「第六、第五、第四封印術式……解除っ！」

グングンと近づいていく地面をしり目に私は封印を解除していく。解除を告げると同時、背中を強かに打ちつける。

お返しに右腕のシエルブリッドを叩き込んで。

怯んだ隙に脱出して、構える。ちよっと不安なもの、やるしかない。

戦闘力でも、身体能力でも劣勢だ。

「……っ！」

叫んで、両腕をしならせ鞭のように振り回す。実際、打撃の質はそれに近い。

地上最強の生物曰く女子供の武器、鞭打だ。

「……っ！」

風を切る音と共にべちん、べちんと叩き付けられる両腕。

正直言って、滅茶苦茶痛い。鞭相手に防御しようが筋肉を固めようが、大した効果はない。

受け流したりしたい所だけど、何をどうすれば鞭を流せるのか、私には分からない。普通に距離を見切って避けようにも直前で伸腕の術よろしく伸びるので避けれない。

という訳で、普通に突っ込んで崩拳をぶち込んだ。

「はあっ……！」

「……」

青い珠に一撃を加えると、途切れ途切れの声をあげながら後退するくるすけ。

その隙だらけの姿に、気弾を撃ち込んで半身を吹っ飛ばし。ぞくり、と。

背筋が震えた。

065 | くるすけじゃなかったらしい

「やった!？」

私の気弾を受けて、上半身が吹き飛んだくるすけを見て、思わずやってないフラグ立てちゃった。仕方ないね。多分こいつの回復能力みたいなのが発揮されるんだろう。

そんなことを考えていると、半ば予想通りに巨大な青い珠を中心に黒いタールの様なものが再び集結して形作っていく。

胴を作り、頭を作り、四肢を生み出し、人型を象っていく。出来る上がるのは私と同程度の体躯を持った美しい女性。黒い髪に黒い肌で統一されており、どっかの水の神殿を彷彿とさせる。そして、私（サイヤ人）を模すかのように、尻尾を生やして。

他と見分けのつかない闇色の瞼を開いて、赤い珠が露出し、その双眸がこつちを睥睨する。

さっきまでも怖かったけれど、今はそれ以上に怖い。尋常じゃない威圧感と殺気。

そして、戦闘力までもが異様なまでに上昇している。やっぱくるすけ呼ばわりが不味かつたんだろうか。

「aaaaaaaaaaaa, haaaaahaa!」

意味が分からないし、そもそも意思の疎通を出来るのか分からないが、とりあえず何を言っているかぐらいは把握出来るようになった。

口元が嬉しそうに歪んで、僅かにその身体が沈んだと思った瞬間。

「RAAAAAA!」

勢いよく、殴り掛かってきた。

拳での四連打を捌いて、僅かに速度の緩んだ五打目を受け流し、体勢を崩させ距離をとる。そこで蹴りに攻撃を切り替えてくるあたり、それなりに知能が発達したらしい。ただ、腕とかを伸ばす特殊能力は無くなったのだろうか。どれだけ距離をとっても、回避して

もさつきみたいなトリッキーな戦法は全く使ってこない。

間合いが少し詰まって、拳での八連打。それを全て捌いて、代わりに掌底を叩き込んで吹っ飛ばす。

「H A A A A S Y A A A A A」

くるくると回って着地、嬉しそうな声をあげてボクサーの様に小さく構える。

「……まあ、ここなら私も本気でやれるか」

別に私が実力を隠していたわけじゃないし、地形効果を受けている訳じゃない。研究室の真下に存在したこの部屋は六畳間ほどで、非常に狭い。少なくとも、舞空術を使つての空中戦は難しいし、必然的に地上戦になるが、そうなれば、私としても真価を発揮できるのだ。

「S Y A A A A A A A A A A ! !」

私が今までに蹴り技を見せていない以上、コイツの判断は当然ともいえる。実際、この短時間でそう判断し、それに踏み切るのほどうかとも思うが。

突撃してくるそれを迎撃。踏み込んできた足を踏み抜いて、右肩を胸に叩き付けて、左手での掌底を顔面に叩き込む。

「t……」

その衝撃にたたらを踏んで隙だらけのそこに右手に溜めていた気弾を撃ち込んで、今度は蒼い珠を吹き飛ばす。

べちゃべちゃと黒いタールが吹き飛んで、その上で二つの赤い珠が明滅し、徐々にその光を失っていった。

「どうやら今度こそやったらしい。」

実際、この第二形態くるすけは異様に強い。当たらなかつたからよかつたものの、当たっていたらタダじゃすまなかつただろう。

倒せたのも、素体であろう暴君や第一形態が見せた青い珠と違って分かり易い弱点があったからだ。もしもこれが第二形態だけ出てきていたら私は絶対にミンチにされていただろう。いや、ミンチよりひでえやかもしれない。

そして、それを倒しても油断できない要因が一つ。

目の前、くろすけの死骸を超えた先にある扉の向こう。一見すると単なる普通の扉なのに、ゾクリと肌が粟立って、ざわざわと心がざわめいて、ざらりとした不快な感覚が広がる。

つまり、嫌な予感ビンビン丸でござる。

恐る恐るその扉に手をかけて押す。

思いの外、呆気無く開く扉。

「……………」

その部屋に存在したのは巨大な機械。壁の殆どを覆われて、物置の如き様相を見せるその中央には上の研究施設で見たようなカプセル。

カプセルの中には、水色の液体。その中で揺蕩うのは、アイマスクを装備し、身体を鎖でがんじがらめに拘束された一人の少女。尻尾を見る限り、サイヤ人らしいけれど。

なんというか、私が見た事も無いような化け物だった。

そして、同時にこの施設の正体もはつきりと分かった。十中八九この少女を封じ、復活させないようにする為の施設だろう。

近くのコンソールを操作すると壁のモニターが点灯し、ちょっと操作するとパスワード入力を求められた。いや、パスワードと言われてもヒントが無い事には。

適当に一回入力してみると、駄目だしされた。

「ヒントを差し上げましょう……………わたし、フリーザの想い人の名前です」

…………… クレスか。クレスは宇宙公用語で…………… あ、これ違う？

じゃあこっちを。

それで当たりだったらしく、画面が切り替わり、幾つかの項目が現れる。

- ・このカプセルについて
- ・この施設について
- ・伝説の超サイヤ人
- ・研究利用

・解放の手順

いろいろ参照していき、分かったことは。

この少女がエイジ737に見つかったサイヤ人であること。フリーザはこの少女を伝説の超サイヤ人だと考えていること。このカプセルを含んだ施設、と言うかこの部屋は本来古代の遺物であり、正方形の遺跡が出土したものを再度地中深くまで埋めた物だとか。

上に存在した研究施設はこの部屋を隠す為のもので、あの暴君や大猿は少女の一部を素体として利用したものであるとか。

解放の手順がまさかの5クリックとか。「次へ」を何回か押しただけだよ。

水色の液体が徐々に減っていくのを見つめつつ、私は考えを纏めていた。

目の前の少女が伝説の超サイヤ人でない事はブロリーが証明している。だけど、それとは別の突然変異体と言う可能性も低くは無い。そして、フリーザが惑星ベジータを滅ぼしたと言うのも何となく理解できた。

悟空やベジータ以外の純血サイヤ人は原作ではロクな扱いを受けていない為に、戦闘民族（笑）と言われたりするが、死にかけてもその淵から舞い戻る度に強くなるなんて言う反則的な特性と大猿化することによる極端なまでの戦闘能力の上昇なんかを考えなくても、強い種族だ。

確かにサイヤ人を上回る宇宙人はそこまで少ない訳じゃない。私を知る限りでもナメック星人やコルド一族、ヘラー一族や、ジユース星人等がサイヤ人を上回る戦闘力を有する。

実際はもっと多く、サイヤ人を上回る種族がいるだろう。

そうで無くてもリクームやオリブーの様な本来サイヤ人以下の戦

闘力しか有さない筈の種族が突然変異として、或いは類稀なる才能と過酷な鍛錬でサイヤ人を超える戦闘力を有することもある。

サイヤ人の戦闘力なんてものはその程度だ。

だけど、そんなサイヤ人がどうして惑星の地上げ屋なんていう仕事をすることが出来るのか。

理由は単純だ。

サイヤ人は顔立ちが似た、或いは同じ者が多い。特に遺伝子に詳しい訳でもないけど、これは遺伝子情報が少なく、単純な構造をしている為じゃないかと私は睨んでいる。

そしてそのせいも、ブローリーやリーフの様に突然変異的な存在は稀で、サイヤ人は大体の戦士が個人差こそあれど、同程度の素質や戦闘力を有している。落ちこぼれは落ちこぼれ。下級戦士が下級戦士。エリートはエリート。と明確に分けられているのはその為だ。

それには、戦闘型サイヤ人も非戦闘型サイヤ人（頭脳労働担当）も変わらない。流石に前線に出るか否かで相応に戦闘力にも差が生まれるものの、同じだけ鍛錬すれば大体同レベルにまではなるのだ。これは、一応非戦闘タイプのセリパが私に証明して見せてくれた。

駆けだしや落ちこぼれ、非戦闘型であっても戦闘力1000を下回る事は稀で。

鍛えられた下級戦士であれば平均戦闘力3000前後。

歴戦の戦士やエリートであれば平均戦闘力6000前後。

一部の天才や超エリートや王族であれば平均戦闘力9000前後。数値だけ見ると大したことは無いのも確かだけど。

ここにもう一つ加えるだけで面白いことになる。

それは戦闘種族にあるまじき、繁殖力の強さだろう。

戦闘種族の殆どは高い戦闘力、長い全盛期や寿命などを有する為

に繁殖力が弱い。サイヤ人を超える種族が大体有名でない理由はそこにある。数が少ないために認知されにくいのだ。

後、サイヤ人は屈強な体を持ち、環境適応能力が高いと言う特性も備えている。

サイヤ人はその特性と繁殖力の高さからフリーザに滅ぼされる前は戦闘型、非戦闘型を合わせて5万前後が存在していた。

普通に考えれば少数民族に過ぎないものの、戦闘民族として考えれば非常に多い。

殆どの戦闘民族が、〜星人では無く、〜族と呼ばれるような数十数百からなるものであり、ナメック星人やジューズ星人達も戦闘型の数は千に満たない事を考えればその異常性が窺えるだろう。

そして他種族においては非戦闘型が戦闘力100を下回ることは少なくないし、幾ら戦闘型や突然変異種が戦闘力10000や20000であつても大猿と化した、或いは徒党を組んだサイヤ人相手にはどうしようもない。

原作で、ザーボンやドドリアが無双していたけど、それは単純にサイヤ人達が基本、一対一の勝負に持ち込んだからだ。全員で一斉にかかっていればまだ勝負は分からなかっただろう。

数と、その画一的で高い戦闘力こそがサイヤ人の強みなのだ。無論のこと、その成長力や大猿の力も忘れてはいけない。

フリーザであつてもその圧倒的な力がフリーザ個人に依存しているために、戦略や戦術次第では負けかねない。

そして、自身が扱き使う内にどんどんと反発を強め、その戦闘力を上昇させていくサイヤ人達。

そこにこの少女の存在。ここまでの化け物にはならないにしても、それに近いものになる可能性は否定できない。

だから、フリーザは惑星ベジータごと、サイヤ人を吹き飛ばした

のだろう。

大分、推測交じりだけど、あながち的外れでもないだろう。

と、そこまで考えた所で排水が終了したらしく空気の抜ける音がして、少女が外気に晒される。

バチンと鎖を引きちぎり、アイマスクを外した少女はニコリと笑った。

「afuajgairwomvxd a」

え、何語？

「……………」

少女は訝しげな顔をしていたが、直ぐに何かを思い至ったような表情になると、再び口を開いた。

「……………あ、あー、ん。おぬしがわしの封印を解いた、と言う事でいいかの？」

その言葉は古風でやや訛っているものの確かに宇宙公用語だ。

ストレートロングの濡れ羽色の髪に確固たる意志を宿す切れ長の黒い瞳、薄褐色の肌。

整った目鼻立ちで、その表情には強者の余裕の様なものが見て取れる。

私と同程度の背丈に華奢な体躯でありながら、リーフ以上の発育の良さ。なんとというか世界って理不尽だと思う。

黒い千早に赤い袴、黒い足袋に赤い鼻緒の雪駄と言う巫女にも見える和風な出で立ちで、言葉遣いや雰囲気によく似合っている。

「まあ、そうなるのかな」

5クリックしたただけなので、自信満々にそうですとは答えづらい。曖昧に笑っておいた。

「……………それにしても、今のわしを前にしてよく平静でいられるものじゃな……………」

上っ面だけだけどね。

正直言つて戦いでもなつたら今すぐにも逃げたい。

「ふむ、中々に面白い奴じゃのう……礼代わりと言つてはなんじやが、わしが直々に鍛えてやるうか」

よし、逃げる！

「……つれないのう」

しかし、回り込まれてしまった！

何（ry

超（ry

も（ry

その後、宇宙船を一つ奪つた後で地下ごと施設を吹き飛ばし、私はリゼと名乗つたサイヤ人と一緒に地球へと向かう事になった。例によつて例の如く、自動操縦です。

座標だけだけ覚えておいてよかつたよ。

そして、今。

わし直々に鍛えてやるたのお言葉に違わず、リゼとの組手の最中。なんとというか、リゼの体術はまだまだ荒削りで、私の方が上なのだけど、気の扱いや気を交えた体術になると途端にリゼに軍配が上がる。

その卓越した技術を目で見て、体で受けて、盗めと言われて。

「むう、何故これしきの事が出来ん、それでもおぬしはサイヤ人か？」

サイヤ人だけど才能は無いんで、ちょっと手加減してもらえませんかね。

これが約半年続くとか拷問でしかないんですけど。

そんな、私の切なる願いは聞き入れられることなく、空しく消えた。

066_「ユリ」のせりふ（後書き）

何これ長い。特にサイヤ人云々の下り。

067 | そろそろ日常も織り込まれていくんじゃないかな

最近ね、出番が無いよ、なんでかな。リユカ、心の俳句

ナメツク星から帰還して既に二月月が過ぎた。一時期は乗員がわたしの許容量ぎりぎり、どうなる事かと思つたが無事にたどり着いた。同様に、燃料に関しても不安だったが、わたし自身が気を分け与える事でどうにかなつた。

あれ、これ実は気を燃料にする意味なくね？

重力力場発生装置や重力制御装置で構成された小型永久炉から発生する気で賄えるってことは、大型の永久炉を作ればそのエネルギーで賄えるってことだから、変換効率を考えても、そっちの方が効率は良いんじゃないかな。

いや、私は何も気づいていない。そんなことは無かつたんだ。無かつたんやそんなこと！

ナメツク星人たちは流石に、人の目に触れされる訳には行かないので、神の神殿に一時期厄介になっている。

けれど、なんでこいつらはここにいるんだろうか。

「ねえ、クレス子供は何人欲しいかな？」

「え、とフリーザ、さん、何か柔らかいものが背中にあたってるとんですけど」

「当ててるんだよ」

当たりさえすれば、当たりさえすれば貴様なんかでいいことですね。分かりません。

誰かこのバカカップル吹っ飛ばしてくんないかな。

或いはクレスの方を爆破でもいいから。

リア充爆発しろ。そうさながら妹の如く。

「あ、そうそうパパと兄貴にもね、結婚しますって言う手紙を送つたから、そのうち来るんじゃないかな。将来の旦那の顔を見に」

まさか、親も息子が娘になると同時に娘が嫁に行く気持ちも味わう事になるとは思わなかっただろうな。というかどんな特殊な状況だよって言いたくなるな。こういう状況だよ、畜生。

「結婚はちよつと早すぎると思うんだけど！」

まだ二カ月少ししか付き合っていないしクレスってばまだ無職だからな。今現在はヒモに近い。

「……んー、言われてみると確かに、まずは付き合ってますからの方がよかったかな……でももう結婚式の日時まで知らせちゃったしなあ」

「既に日時まで決定済みなの!？」

残念だが、クレス君。わたしが把握している限りでは式場、式の形式や、ドレス、交換する指輪なんかも既に準備万端だ。ついでに言えば結婚後のマイホームもすでに契約済みだ。とてもこの二カ月の成果とは思えないが、一つだけ言える。お金って怖いね。

「……姉ちゃん？」

「なんだ、カカロット……いや、悟空」

「さつきからよ、チチがえれー目でこっちを睨んでくるんだが」

「まあ、普通の対応じゃないか？」

所変わって、孫家の自宅。悟空とシユラはチチと対面していた。

地球へ来て約二か月、ある程度の礼儀作法や常識を身に着けて、悟空の実姉として挨拶に来たのだ。

先程までは堅苦しかったものの、今ではそんな空気は完全に霧散している。

シユラがソファアに座り、悟空がその上に乗せられる形。シユラは悟空よりわずかに長身な為に違和感は少ない、とかそんなことは全くなくて、違和感バリバリだった。当人的には姉から弟へのスキ

ンシップに過ぎないが、はた目から見れば恋人か何かである。

シユラとしても客観視した場合に、自分たちがどう映るかははっきりと理解しているが、このスキンシップには意味がある。チチも悟空もからかうと結構面白いからだ。

「分かつてるならさっさと止めるだ！」

「そうそう、そんな風に碎けた感じでよろしく、チチさん。っと……悟飯、難しいお話は終わったぞー。伯母さんと一緒に遊ばないかー？」

「あ、はい……今日は何をするんですか？」

「んーキャッチボールとかどうだ？」

「お、楽しそうだな。オラも混ぜてくれ」

孫一家に居候することになった、シユラ。フリーザとは大違いだが、こっちはこっちで楽しそうだった。

067「そろそろ日常も織り込まれていくんじゃないかな（後書き）

とりあえず、日常の小話的なものをどう書くかと言う形式が定まらなかつたので、今までの分は保留で、今後はこうして時折書いて行こうと思います

068 | 未来少年の困惑

それから、約半年が過ぎて八月。

クレスとフリーザの結婚式の日がやってきたのだった。

「なあ、ベジータ。このテーブルはどこだ？」

「カカロット、それはこっちだ！」

つて、カカロット、き……貴様、大事なテーブルに傷を！！

早く取り換えてこい。ああもうまた乱暴に扱いやがって！！

「なあ、ベジータ。この飾りはここでいいのか？」

「ナツパ、待ていっ！ それはそっちだ！」

……ああもう、まだるっこしい！

動けんサイヤ人は必要ない。オレが代わりにやる！

お前はテーブルを運んでおけ！ いいか、慎重にだぞ。間違っても

カカロットのように扱うなよ！？」

「ヤムチャさん、その飾りはこっち」

「クリリン、お前のそれ、ここだぞ」

「……何を言っているんだお前達は？」

「天さん、もう少し右だよ」

「あ、ああ。すまない餃子」

「皆、忙しそうだね。見てるだけなのが少し、心苦しいよ」

「でも、花嫁だから仕方ないね……ほら、そろそろおれたちも準備しないと」

ざわざわ、と騒がしいその結婚式場（予定）。そこを一人の青年が所在なさげにうろつろつとしていた。

青紫色の長髪に青い瞳、黒いタンクトップに青いジャケット、黒いズボンを履いて、背中には一本の刀。見る者が見れば分かるであろう。

名前はトランクス。未来から来た、ブルマとベジータの子共だ。

「……………どういう事なんだこれは、悟空さんは普通にいるし、全く覚えのない人がちらほらいるし、それどころかよく分からない結婚式まで……………父さんもなんだかやけに生き生きしているし」

本来なら、この後に起きるであろうフリーザ親子の襲来と言う惨劇を防ぎ、その更に後に降りかかる人造人間と言う災厄を告げ、共に立ち向かうのが自分の運命のはずだ。だがどうにもそんな予兆は見当たらないし、どうにも彼が知っている過去とは異なる点多すぎる。

「……………でも、まあ手伝っておこうかな」

その後、更なる衝撃が彼を襲うのだが、今の彼にはしる由も無いのだった。

069 「未来少年の更なる困惑（前書き）」

リーゼの名前をリゼに変更。と言っか、元々名前がリゼだったのを間違えてたので修正。

結婚式のセッティングを手伝っていたトランクスは、この場所に急速に近づいてくる二つの巨大な気をしっかりと感じていた。恐らくは、フリーザ親子で間違いないだろう。

既に結婚式会場としての形を成し始めている広場に巨大な宇宙船が降り立ち、それを確認したトランクスはしっかりと剣の柄を握った。

そして、人影が下りてくると同時に気を開放しようとして、息を呑んだ。

「……誰？　と言うかブロリーがなんで今ここに……？」

降りてきた人影は、伝説の超サイヤ人ことブロリーとその横に無表情に立つサイヤ人の美少女。尻尾が不機嫌そうに地面にぺしぺしと叩き付けられている。

「……危ない、危ない……死に行く所だった」

トランクスとしても自分の力量に自信はあるし、今のこの時に自分に勝てる者はいないと言う事は確信をもって言える。

もしも、クウラが現れたり、コルド大王が変身可能だったりすれば話は別だが。

人造人間にも過去の世界でなく、この世界でなら負ける気がしない。

「……ふう」

緊張の一瞬。ブロリーとリーフを見送ってトランクスは息を吐いた。一瞬こっちを見ただけで、敵とは見做されなかったらしい。

敵意を一瞬とは言えぶつけてしまった自覚があるだけに、生きた心地がしなかった。

「おい。暇ならこっち手伝って欲しいんだが？」

トランクスが手伝いを再開し。
結婚式場は殆ど完成し、後は僅かな手直しのみを残すのみとなつて。

そこに近づいてくる二つの巨大な気を感じ取って、トランクスは歡喜の表情と共に、顔をあげた。

別に、式場セッティングに不満がある訳じゃあない。むしろ、これならたまたま通りがかった人間でボランティア的な立場を利用して介入出来るのだから、好都合ともいえる。

だが、なんといいのかここにはいない筈なのに普通に居る悟空とか、リユカとその指示に従って働くチビリユカとか。飾り付けを手伝い、料理をして、主夫の様に生き生きしているベジータとか。ちまちまと飾り付けを手伝ったり、にこやかに料理を運ぶブローリー。

あまつさえそれらが共存しているなんて言う訳の分からない状況に放り込まれて混乱しているトランクスにとつては、例え一方的だろうとも自分が知っているのと変わりないであろうフリーザ親子は希望の光だった。

「ふう、漸く着いたぜー！」

「んむ、これがお主の言つとつた地球とやらか……ずいぶんと重力の軽い星じゃのう」

だが、人生そんなに甘くない。
降りてきた二人の少女。

アニスとリゼを見て、トランクスはその表情のままに固まった。

069 | 未来少年の更なる困惑（後書き）

キャラが増えてきて大変。

戦力外を出すべきかもしれないけれど、余りそれはしたくないので
出来るところまでやってみようと思います。

「どうやら、ちゃんと未来からトランクスも来てくれたらしい。来なかったらどうしようかとも思っていたけど。」

「原作より一年ほど早いけど、それでも来たことには変わりないし、うまくすれば一年長く修行が出来るかもしれない。」

「なんか、イメージに余りあわない、物凄い喜んでそんな顔で振り向いたと思ったら、そのまま硬直して数秒。泣きそうな顔をして、向こうに行ってしまった。」

「なんだというのか。」

「……ふむ、これが結婚式とやらか……ワシにはよう分かんが、好いた者と結ばれるのはめでたい事なのじゃろうな。」

「……かもね。」

「ちらりとこつちを流し目で見てくる。私としてもその言葉には同意したいところなのだけど、前世では特にそう言う訳でもなかったんだよね。出来ちゃった婚とか、（精神的な意味合いで）子供同士での結婚とか。」

「それで当人たちが幸せなら何の問題も無いような気がするけど（あくまでも当人たちには）そう言った結婚をした人間はあまり長続きしない人が多く、離婚も珍しくない。環境の変化とか、色々あるんだろう。」

「お帰り……アニス姉？」

「誰だ、お前？」

「そんな私達に気配も無く忍び寄ってきたのはリーフとブロリー。なんかよく分からないけど、微妙に空気がピリピリしてる。首筋辺りがチリチリする。」

「リゼをアニスは睨みつけ、ブロリーに至っては既にけんか腰だ。」

「チート臭い二人が負けるとは到底思えないものの、リゼはなんとどうか得体が知れなさすぎる。特に転生者という訳でもない様なの。」

に、非常に高い戦闘力を有している。サイヤ人の癖にだ。

前にも言った通り、サイヤ人の戦闘力は戦闘民族としては低い。才能の無い悟空は勿論、才能にあふれるベジータやそれ以上の才能を持つ私、リーフやブロリーでさえも弛まぬ厳しい修業の果てに高い戦闘力を身に着けたのだ。

リゼがどうやって、どうしてここまでの戦闘力を手に入れるに至ったのか。

ブロリーやリーフ以上の才能を持っていると言うのは有り得ない。自身を脅かす才能がある人間をそう易々と生かしておくほどにベジータ王は優しくない。それは原作の通りだ。あくまでもブロリーが助かったのは、私と言うイレギュラーがあつてこそ。

私の様に修行に修行を重ねて、なら特におかしくも無いけれど、リゼは、封印されていたのだ。そこまでの時間があるはずもない。封印されていると肉体の成長も止まるから年齢は高く見積もっても二十代後半だろう。低ければ見た目通り、十代後半か。

それでありながら、ここまで至るにはどれだけの鍛錬が必要なのか、想像もつかない。

「ほう、ワシを前にして一步も引かぬ……寧ろ踏み込んでこようとは」

感嘆したようなりゼの声。どこかピリピリしていた空気が緩んだようにも感じられる。

少し前に出来なかった、やめて！ 私の為に争わないで！ をここでこそやる時が来たかと身構えてもいたけれど、普通に無駄骨だった。

そんな中、地球に迫りくる巨大な気。

この感じ的にコルド大王かクウラで間違いないだろう。或いはほかの親族の方々か。

んー、結構久しぶりに家族団欒で過ごそうかと思っただけど、それ

はまじつし先の話らしい。

070 | 家族団樂は世界平和のその後に。(後書き)

微妙に方向性に納得がいかないけれど、数日考えて、特に思いつかなかったのもそのまま行くことに。

ところで、誤字脱字って本当に誰も見つけてないんでしょうか。非常に不安なんです。

071 | 結婚式とその後

そしてやってきたコルド大王とフリーザが対面し。

「パパ、来てくれたんだね……アレ、兄貴は？」

「クウラは……都合が合わんらしい。それにしても、フリーザよ、美しくなって……うっ、ふく……」

orzな感じで泣きながら地面に崩れ落ちるコルド大王。嗚咽を漏らし、滂沱の如き涙を流している。親子の感動の対面が台無しだけど、まあ仕方ないだろう。

自分の息子がいきなり（地球人の）娘になりました、しかもこの馬の骨とも分らない男と結婚します。なんて言われて受け入れられる奴の方が希少だろう。事前通告とかあればまだしも。

クウラにしても、都合が合わなかったんじゃないかと、来たくなかったと言う可能性もありうる。

フリーザが自分勝手に軍を解体させたように、クウラ達も非常に自由の利く経営者だ。地球に訪れることぐらいそう難しいものでもない筈だからだ。

「パパ……」

そのコルド大王の姿を見て、どこか嬉しそうに呟くフリーザ。流れるに感極まって泣いてしまったとか考えてるんじゃないだろうか。ナメック星でのことを考えるに結構思い込みとか激しそうだったし。

その後、執り行われた結婚式の席で、再びコルド大王が泣いたり。フリーザの成長の記録をスライドショーで見たり。

クレスとフリーザのケーキ入刀。

そして、それからの誓いの言葉と……キス。

他にはへべれけになったコルド大王が私に求婚紛いの宇宙の帝王スカウトをしてきたり。

それをフリーザがママに言いつけると黙らせたたり。

なんだかよく知らないけど、それで落ち込んだコルド大王とリゼが仲良く泥酔していたり。

色んなことがあった気がするけど、初めて他人の結婚式なんてものに出て緊張していたせいか、覚えていない事も多かった。少し、勿体無かった気もするけど、幸せそうなクレスとフリーザの笑顔だけは覚えてるからいいのかもしれない。

気付けば結婚式は全員飲んで騒いでのどんちゃん騒ぎに姿を変えて。

何故か、異常なまでのザルな私を残して全員が酔い潰れて雑魚寝状態。もう結婚式会場としての姿は微塵も残っていない。だから、あんなにもチャンポン、イッキはやめておけと言ったのに。まあ、いざやるとなった時に のちよっといいとこ見てみたいと煽った私ができることもないが。

「ここまで想定してた奴がいたってことか」

何故だか目立たない位置に積み重ねていた毛布を一枚一枚、かけていく。悟空がチチと結婚した時とかにこうなった事があるのか、それとも過去を知るトランクスのお陰か。

多分、後者だろう。見渡すとトランクスのだけが壁に寄りかかって酒をちびちびとやっている。

近づいて声をかけようとしたらその首筋に刀が突きつけられていた。

見えてはいたが反応できなかった。

「何の用ですか」

「何の用って言われてもね、一人酒も寂しいだろうから一緒に飲まないかってね」

「……分かりました」

張りつめたような空気は緩みもしないけど、刀を仕舞い込んだトランクスのそばに座って盃を合わせる。一瞬、更に空気が張り詰めた気がするけど特に理由とかが思い至らないから気のせいだろう。

「貴女は何者ですか」

ポツリ、とトランク스가口を開いた。探りに来たか。

私は余り腹芸得意じゃないんだけどな。

徹頭徹尾隠すべきか、或いは情報を小出しにしていくべきか。

全部を暴露するなんていう馬鹿げた行為は無しだ。

「……何者って言うのはどいう事かな？」

「そのままの意味ですが」

互いの核心に触れないままの探り合い。互いに核心に触れないから、分からない。

私は、トランク스가未来からやってきたことを知っている。そしてそれは間違いなく、私のいない未来なのだろう。

だから不確定要素の私を警戒している。

だけど、私はそれを知らないからトランクスは私が実はそれを知っていることを知らない。

「……お前、転生者だろ」

……前言撤回。一気に核心に触れてきやがりましたよ。いささか予想外の方向から。

まあ、原作知識とか持つてれば私が転生者だと考えてもおかしくは無いけど。

「……何その転生者って」

「理解できているとなるとオレと同じ日本人か……？ まあ、日本語のできる外国人つても珍しくは無いが……と、ネタがばれた訳だが、どうする？」

……そこだけ日本語に変えるとは……策士か。

「どうもしないよ、その言い草からして君も転生者なんだろう？ で、原作には出てこない私を警戒したと」

実際には他にも色々突っ込む場所があっただろうけれど、ちょっと精神的にいっぱいいっぱいだったし、タイミングも悪かったせいか、私が一番最初になった訳だ。

「……ああ、だがこの世界は何がどうなっているんだ？ ヤムチ
ヤや餃子もアニメ版かと言いたくなる程強いし、ブローリーが普通に
仲間になってるわ、悟空も普通にいるわ、ナツパが生きてるわ、フ
リーザが擬人化、女体化した上にサイヤ人の婿と結婚してるとか」

「大体、私のせいだが、フリーザの件は寧ろ私が聞きたい」

「……………本題に入るうか」

そしてトランク스가語ったのは。

当然の如く、人造人間編へと関わるそれだった。

072 | そして修行へ

翌々日、新婚旅行（宇宙）へと旅立ったクレスとフリーザを見送った後、私は仲間を全員集めて説明することにした。

人造人間と呼ばれる存在の襲来の可能性。サイヤ人が抗体を持たないウイルス性の心臓病の存在とその致死性。トランクスがそうした未来から訪れた平行世界の人間であること。

本人の希望により、トランクスの正体は明かしていない。偽名としてリュックと名乗っている。なので、これ以降はリュックとして扱う。

リュックの話によれば、人造人間が現れたのは原作と同じエイジ767年の5月12日。こっちの世界は既に割りと原作との乖離が進んでいるけれど、ドクターゲロの原動力が過去の悟空の行動に対する恨みであり、そこに私が介入していない以上、特に何かが変わる事も無いだろう。

人造人間は機械化こそ行われているが、遺伝子操作のような事は行われていない。

つまりは純粋に素体とゲロの技術によるものだ。私達が所持する^{オーバーテクノロジー}地球外超越技術満載のブラックボックス「night knight」やリュカの内部構造を解析されればもっと強化されるだろうが、どっちもパイロボを介してみたような程度で如何にか出来るほど単純な構造はしていない。

ドクターゲロが直接侵入、解剖でもしなければ、殆どが分からないままだろうし、侵入した場合には人造人間化していようがいまいが、リュカに殺されるだけだ。

遺伝子採取して生まれる予定のセルの方も問題ない。少なくとも

やってくるのは別次元に存在するセルであって、私はともかくブローリーやリーフの遺伝子を手に入れた化け物じゃない筈だ。

ついでに最後の危惧としてドクターゲロも転生者と言う線だが、それは無いと言うのが結論だ。

何処の誰がどうすればドクターゲロ並みの頭脳を得られるのか。

鍛えたとしても、こちらに勝つ方法は無いだろうし。

恐らくはドクターゲロそのものが成り立たないだろう。

だけど、油断は人を殺す。

油断による衰退でほろんだ人間も少なくない。

故に未曾有（建前）の地球の危機に立ち向かうべく、全員で修行をすることになった。

073 | リゼがチートすぎるっていつかまたチートか、ド畜生

バチバチと雷光を爆ぜさせつつ超サイヤ人2へと変身したリーフ。伝説の超サイヤ人と化したブロリー。

思いつきり全力全開の二人を前にして、リゼは悠々と構えながら笑った。

真つ先に仕掛けたのはリーフ。横殴りの攻撃をフェイントとした裏拳をリゼは回避し、そこに隙を生じぬ二段構えとでも言いたげな後ろ回し蹴りがさく裂した、かに見えたが。

実際にはその蹴りはリゼに片手で受け止められていた。

そして、投げ飛ばされるリーフ。そこにブロリーが攻撃を仕掛ける。

次の瞬間、ブロリーが、私の横をすつ飛んで、壁に叩き付けられた。

「は？」

思わず、間抜けな声が出た。

重力はいつもの倍の100倍。慣れない重力の中のせいか、リーフとブロリーの動きはぎこちない。

とはいえ、リーフもブロリーもとんでもない化け物だ。

リーフはパワー、スピード共にブロリーよりも一歩劣るものの、ブロリー以上の戦闘センスとテクニクを持つ。純粹な能力だとブロリー以下だが、瞬間的なパワーやスピードではブロリー以上だ。

ブロリーは高いパワーとスピードに並外れた戦闘センスを合わせ持つ。瞬間的なパワーやスピードではリーフに劣るが、一撃一撃が必殺の威力を秘めている。

その二人を、鎧袖一触に吹き飛ばし、悠然と笑うリゼ。私の師父となつて以来、幾度となくその異常性を見せつけられてきたが、本気で化け物としか思えない。

「さて、我が不出来な弟子はかかってこんのか？」

その言葉には答えず、重力発生装置を操作し、重力を150倍に引き上げる。思っていたよりも鈍っているらしい。前ならば、楽勝とまではいかないがここまで辛くも無かった。

そのまま、構えて、じりじりと間合いを詰める。

私は、サイヤ人として考えれば破格の戦闘力を持つが、超サイヤ人でもないしリーフとブローリーに勝てるような化け物じゃない。

だけど、化け物に化け物は倒せない。いつだって、化け物を倒すのは人間だ。

「はっ！」

その言葉を勇気に変えて、私は踏み出すと同時に崩拳を　カウ
ンターされた。

「(ですよねー)」

やっぱり無理か。吹っ飛んで壁に叩き付けられたところで、私は
気絶した。

「……さて、始めようか」

私の目の前にいるのは、ピッコロ、クリリン、ヤムチャ、天津飯、餃子の地球組。

地球へ帰ってからの半年以上を修行に充てていたと言うのだから、その熱意には頭が下がる。

やっぱり、自分が強くなったって自覚が出ると、それだけで張りが違うね。

因みに今回、修行もそうだけど、人数も多くなってきたと言う事で、神の神殿内に新しく開発されていた修業場（リユカ、神様共同作品）の試験運用も兼ねている。

重力は50倍。

本当なら、他人を鍛える前に自分をどうにかしなくちゃいけないんだろうけど、生憎と彼らを鍛えられるのはリゼ、ブロリー、リーフ、リユカ、シユラ、私ぐらいなものだ。

その中でも、きちんと鍛えられるのはリユカ、シユラ、私。他は才能とか実力に差がありすぎてついて行けるかどうか微妙だ。

悟空やベジータは確かに彼らよりも強いけれど、それでも同レベル帯から抜け出してはいない。

その悟空とベジータ（ナツパもいるがアニスは忘れてる）はシユラが面倒を見ている。

リユカは修業場の観察と調整に余念がない。

そんな訳で私が鍛えることになったのだ。

「さ、どこからでもどうぞ、最初はだれ？」

正直言って嘗めてた。私自身、フリーザと互角以上に戦って、研究所でもくろくこと戦って。

それなり以上の実力を持つてると思ってたんだ。

だけど、現状はどうだろうか。

「狼牙風風拳！」

ヤムチャの連続攻撃の前に、ただただ防御に徹するしかない。流石スピード型と言った所だろうか。とは言え、地力は私の方が上だ。本来なら、フリーザの様に圧倒していてもおかしくない筈。いかに努力しても一年に満たない期間ではそこまでの戦闘力の増加は望めない。

ヤムチャそのものを下に見ている訳じゃない。よくよくヤムチャしやがって等とネタにされるほど弱かったのが原作だが、その才能はクリリンや天津飯にも負けない程。私達が鍛えたせいもあって、普通に強くなっている。

かと言つて、だ。

ナメック星突撃前、フリーザ第一形態以下の230000から約八カ月でフリーザ最終形態と互角以上に戦った私のそれとほぼ互角とか。

今は既に魔術的な封印を完全に解いてあるし、そこまで消費した覚えも無い。今の私はフリーザに勝った時と同等かそれ以上の戦闘力を有する筈なのだ。

幾ら戦闘力が戦いの全てではないにしても、あり得ない話だ。

私は這い蹲り、ヤムチャは立っている。これが実戦ならもう私は死んでいる。物語でよくありがちな訓練と実戦を同じで考えるなをやってしまった訳だ。

言い訳はしない。私はヤムチャに負けた。

だけど、負けたままじゃいけない。私のプライドどころでは無く。

悔しくないとは言わないし、認めたくないのも否定はしない。けれど、私、如きに勝ったことで増長し、油断し、今の私と同じように格下に負ける様なことになりかねない。

事実としてヤムチャは原作では栽培マンの時も、人造人間の時も油断を突かれて殺された。

そのどちらにしても、油断さえしていなければ、どうにかなったかもしれない。

ドクターゲロは自身をサイボーグ化し、確かにヤムチャを大きく超える戦闘力の持ち主だったが、格闘技の達人などではない。

油断さえしていなければ、捌けたに違いない。

原作のヤムチャなら不可能でも、今のヤムチャなら、可能だと思う。

だから

「……まだ、終わってない……早く構えろ」

「……ちくしょう」

小さく声をあげて、ヤムチャが倒れ伏す。今回は私も全力で相手をさせてもらった。

別段、私に何か隠し玉があった訳では無く、いつも通り、気を集束させて攻撃力防御力を高めると言う事をしたただけだ。

それだけでも、ヤムチャとは大きく違ってくる。元々の身体能力

と気の量が違い過ぎるのだ。

ヤムチャ達もすっかりと鍛錬を積んでいるけれど、私だってそれより昔から鍛錬を続けている。

早々簡単に抜かれる訳には行かない。

「……さ、次は誰？」

結果から言うと、実際とんでもないほどに全員が強くなっていた。なんといいのか、新技の様な者こそなかったものの、地力がめきめきと上がっている。

戦った後で測定すると全員が全員、設置型スカウターをぶっ壊してくれた。

簡単には、抜かれ……ないよな？

一瞬、油断云々じゃなくて、まじで負けたんじゃないかと不安になった。

076 | 不良になりたいです、安西先生（前書き）

復活。

原作者になろう大賞は諦めました。

076 「不良になりたいです、安西先生」

「パツキンになりたいです、リゼ先生」

「分かった」

つ髪染め

「分かってて言ってるよな？」

「うむ」

「……………」

キングクリムゾンのせいで、既に人造人間襲撃発覚から二年が経過。

シユラは超サイヤ人、伝説の超サイヤ人へと変身できるようになり……自重しるブロリー細胞。

それに鍛えられていた、悟空とベジータも超サイヤ人化出来るようになった。 ついでにベジータが界王拳覚えてた。 互いに切磋琢磨するいいライバル関係を築いているらしい。

リーフとブロリーは形態変化こそ増えていないものの、新技を増やしたり、地力をあげたりしてる。

地球組のクリリン、ヤムチャ、天津飯、チャオズ。 界王拳使用と言う前提はあるものの、超サイヤ人化した悟空やベジータとほぼ互角の戦い出来るレベルにまで到達している。 オリブーとかを倒すまでそう遠くはなさそうだ。

私？ まだ超サイヤ人になるところか、その起点である気の爆発（黒髪が逆立って白目になる、疑似超サイヤ人状態）さえ出来ませんが何か？

それが、つい最近、300倍にまで死に物狂いで到達した結果だから笑えない。

生まれた時はさ、一応天才だったんだよ？ 戦闘力1028ってさ、才能だけを簡単に考えると悟飯以上なんだよね。

周りがチートすぎて実感薄いけど。

「だが、超サイヤ人化……だったか？ あれを引き起こすのはお主じゃ無理だろうの。パツキンになりたければ髪染めを使うしかない」

「……え、マジ？」

「マジ、本気と書いてマジと読むぐらいマジじゃ」

どのぐらいなのかはさっぱりだが、その真剣な表情を見るに単なる冗談や推測では無く、何か確証があるらしい。

「まず、あの現象の事について説明せねばならんな」

（略）

何故か異様に詳しいリゼが語るところによると、超サイヤ人化と言う現象は一種の先祖返りであるらしかった。

原始サイヤ人、と呼ばれる種族がいる。それはツフル星を侵略する前、知性を手に入れる前のサイヤ人の事を指す。とはいえ、サイヤ人よりも知性に乏しく、凶暴でわずかに平均戦闘能力が高い以外に大きな違いは存在しない。あくまでもそう呼び分けられるだけで本質的には大差ない存在なのだ。

と言うより、原始サイヤ人は原作においてのベジータ王やパラガス、バーダック等のある程度知性を得て、教育制度が整う前の環境で育ったことのあるサイヤ人を指す為、サイヤ人と比べると圧倒的に原始サイヤ人の方が多い。

それは、私も知っている事だ。

だが、それ以前の母星であった惑星ベジータ（現在も存在しているかは不明だが、恐らくは既に存在しない）には原始サイヤ人以前の、サイヤ人……いわば、古代サイヤ人とも言うべき存在がいた

らしい。

馬鹿げたことに、一人一人が高い知性と超サイヤ人級かそれ以上の戦闘力を有した真の戦闘種族であり、破壊欲求や闘争本能こそ高いが、食欲、性欲、睡眠欲と言う三大欲求も乏しい種族だったらしい。

しかし、故にこそ激化していく闘争の果てに死に絶える者は多く、逆に生まれ行く者は非常に少ない古代サイヤ人は気づけば絶滅の危機に瀕していた。

その対策として古代サイヤ人が選んだ形こそが、原始サイヤ人、サイヤ人だった。破壊欲求と闘争本能、戦闘力を限りなく抑え、代わりに食欲、性欲、睡眠欲を増大させた繁殖と繁栄のための種族。それが内包する古代サイヤ人としての血脈が連綿と受け継ぎながらもサイヤ人は数を増やし、それと同時に進むその永きに渡る闘争の中で、サイヤ人は自身の中で眠る古代サイヤ人としての力を開花させていく。

そうして、古代サイヤ人は復活する。そう言う計画だった。まあ、それはフリーザのせいで台無しになる訳だけでも。

その古代サイヤ人の復活、力と破壊欲求、闘争本能の解放こそが、私達の言う超サイヤ人化であるらしい。修練や才能も重要だが、それ以上に開放への鍵は感情で、その昂ぶりによって血は目覚めると嬉しい。その感情は憤怒だろうと悲哀だろうと歓喜だろうと構わない。感情が昂ることそのものが重要らしい。現にブロリーは悲しみで覚醒した。

リゼが言うにはその力を劣化させつつもそれを成したのが、超サイヤ人。その力を劣化させずに成したのが伝説の超サイヤ人。そして劣化しつつも別方向に変化、進化させているのが超サイヤ人2らしい。

尚、その際に金髪と翡翠の瞳になるのは古代サイヤ人がそうであったからで、オーラが金色になるのは、古代サイヤ人への劇的な変化のせい。

伝説の超サイヤ人化すると白目になったり筋肉が膨張したりするのは精神的、肉体的な潜在スペックが足りない故になんだとか。

世代を超えるか、限界を超えて鍛錬すれば細身のままなることも可能、らしい。これは余談で推測だけれど、原作で悟天やトランクスが簡単に超サイヤ人化した理由は、一度悟空やベジータが超サイヤ人化した事でその血が目覚めかけていると言う事なんじゃないだろうか。

リゼが言うには、私はその古代の血が眠っていない訳ではないが（当然）、それを目覚めさせることの出来ない状態にあるらしく（詳しく聞いても笑うだけで教えてくれない）どうやっても超サイヤ人化するのは不可能らしい。

いいよいいよ、つまり私は体に負荷がかからなくて、寿命が短くならないってこと……でも、ドラゴンボールで不老長寿なんだよな、私。

「で、なんでそんなこと知ってるの？」

「そりゃ、ワシその古代サイヤ人の生き残りじゃし」

「え」

髪染めを洗い流し、カラコンを外したりゼのそれは超サイヤ人のそれだった。

076 「不良になりたいです、安西先生（後書き）」

あくまでも、この超サイヤ人に対する設定や古代サイヤ人など言う存在はここだけのものです。間違っても公式設定ではありませんのでご注意ください。

後、この世界においては、公式設定の50倍とか100倍なんていう倍率計算は殆ど無かったことになっています。

驚愕させられて、ちょっと絶望させられて、翌日。

それでも私は元気です。

「漸く見つけたぞ……サイヤ人の猿めが、今度こそ皆殺しにしてやる！」

でもフリーザのお兄さん、クウラさんはもっと元気です。

緑色のブロックを踏んだり叩いたりしたのか、全身がとてもとてもメタルっぽいですが、気のせいでしょう。

きつと、クオントムサイズでも浴びて、メタルボディとビーストモード涙目なビークルモードを手に入れたんでしょう。

そうでなければメタル化魔法反射装甲（レア可）でも纏ってるんじゃないですか？

間違っても、ビックゲテスターなんてものと合体なんてしてない筈。

……いや、もう現実から目をそらすのも限界だ。大体、メタル化なんてそうありふれた話題じゃないんだよ。

「なんでお前がここにいるんだよ、クウラ」

確か、私の記憶が正しければメタルクウラは新ナメック星で戦う相手のはずだけど。

と言うか、メタル化してるってことは悟空か誰かに吹き飛ばされないと……まさか一年前のあのキャンプの時か！？ あり得る。凄くあり得る。 ちょうど私は風邪引いて行けなかったし。

「んん、貴様に名乗った覚えはないが……まあ、知っているなら話は早い。」

このオレが好敵手として認めていたフリーザを墮落させた上、このオレをあそこまで追い詰めたサイヤ人は例え超サイヤ人になれなような雑魚でも生かしておくつもりは無い……精々仲間を呼んで、

オレに殺される」

今日、なんとなしに疲れた私は大自然と動物に癒されにちよつと遠くの川にまで水浴びにやってきて、望んでいた熊や狐とは違い、メタルクウラとエンカウント。

「どうやら、私をずいぶんと嘗めてくれているようなので、お言葉に甘えて全封印式を解除一歩手前まで持っていく。」

「……お前、運が悪いよ」
今日の私は少し、機嫌が悪いよ？ しかもそこをピンポイントで突きやがって。

片手で気弾を生成。酸素と混ぜ合わせて空に放り投げる。

「弾けて、混ざれ！」

宙に出来上がる偽物の月。それを目にした私は、意識の深層に潜り、大猿を殺す。

その動作が必要だと固定されてしまったらしく、私がサイヤパワーを解放するには大きな隙を晒す必要がある。

故にいつもは使えないが、今回に限ってはそうでもない。クウラが私を舐めきっているからだ。

封印式が弾け、同時に力に漲る私の肉体を覆う体毛。何故だか露出する胸元に布を出現させて巻きつける。

この間、約0.05秒の出来事である（意識の深層内で大猿を殺す動作は含めない）。が、スローモーションの変身シーンは流れない。

「……成程、この俺を上回るとは大した戦闘力だ……だが、決してオレには勝てん」

「大した自信だな……とはいっても、コルド一族は口先ばかりで有名だ……どこまで本当やら」

特に、コルド大王はその最たるものだろう。

「親父の悪口はどうでもいいが、オレに対しては見逃せんな」

言いながら突っ込んでくるクウラ。そのあまりにも低い体勢から狙える攻撃は、膝か肘。

迎撃する前に間合いに入り込み、肘を私に叩き込もうとして、横に吹っ飛ばされた。

「何っ!?!」

私は、蹴り抜いた格好で動きを止めている。クウラを吹っ飛ばしたのは私の回し蹴り。

当たったのは、膝上。明らかに打撃ポイントとしては内側過ぎるが、それでもメタルクウラを弾き飛ばすに十分な一撃と言う事だ。元々の私では不可能な芸当だろうが、今の私は肉体能力だけで大猿並みのパワーを発揮出来る。不可能どころか簡単すぎる。

「さて、本当にただの大口叩きで終わるのか?」

実際にそんなことは有り得ないのは分かっている。メタルクウラは単なる量産型に過ぎない。

詳しい数は不明だが、とんでもない数があるのは確かだろう。

しかも、倒してもそれを学習した上で自動修復される。

下手をすれば原作において最強の敵とも言えるかもしれない。個体としてはそうでもないが、数の暴力と言うのは恐ろしいものだ。少なくとも、私一人だと苦戦は必須だろう。とりあえず存在するだろうビツクゲテスターに突撃してやれば勝てるだろうが、突破力が足りるかどうかが問題だ。

「舐めるなあっ!」

言いながら、突っ込んできたクウラへ再度、迎撃の回し蹴りを叩き込もうとして、その姿が掻き消えて空振りする。

瞬間移動か。そうして亜空間を伝い、背後にクウラの姿が現れる。

その瞬間に、私はクウラの背後に瞬間移動して、その背に肘を叩き込む。

「何っ!?!」

瞬間移動は確かに有用な技だ。気配が無く、一瞬で何処までも移動出来る。しかも習得難易度の高さから、それを使える者は少なく、技も読まれにくい。

だが、相手が悪いと言わざるを得ない。

私は、瞬間移動の要である亜空間を感知出来る。あくまでも自分の周囲数メートルに過ぎないが、それだけ感知できれば、大体の瞬間移動は封殺できる。代わりなのか悟空達と違い、相手が瞬間移動をしたからと言って、私はその亜空間内で迎撃、妨害を行うことは出来ない。因みにリーフも同じ特性持ちなので、昔ドラゴンボールに願った願いが関係してるんじゃないかと思っているが、実際原因はどうでもいい。

「さて、さようなら」

地面に叩き付けられたクウラに、逆の手に生成したシエルブリッドを打ち込んで爆発させ、慌ててその範囲から逃れる。

本来なら、ここまで大規模な爆発は起きないだろうが、流石に私程度でも全力となるとそれなりの威力になるらしい。

大きく抉れた地面のクレーターに傍の川の水が流れ込む。残されたネジなんかの細々とした機械部品が小さな池の中に沈んでいく。そうして程なくして、そこにまた生まれる莫大な気。ざぶん、と音を立ててクウラが水面からその姿を現した。

「……猿が、調子に乗るなよ……」

激昂して襲い掛かってくるかと思いきや、割と冷めた目でこつちを見据えるクウラ。

どっちかと言えばクウラはフリーザと同じで頭に血が上りやすく、切れると激昂するタイプだと思っていたが、違うのかもしれない。

そう思いながら、出方を窺っていると思わずに音が聞こえた。

pipipipipipipiという電子音。

WのOPかと思った所で思い至る。

ロックオンバスター。ストラトスでもロックマンでも無い。

クウラが有する瞳術みたいな何か。端的に言うとなら、目からビーム。

ピッコロやフリーザ。様々な宇宙人が使用できる攻撃方法の一つ。恐らくメタル化する前のクウラも使えたに違いない。

だけど、それと大きく違うのは、視認できない点。

「ぐう……」

爆発。何の前触れも無く、私の胸元で起きた爆発は非常に小規模だ。今の私どころか爆発属性を弱点とするヤムチャの右腕一本さえ吹き飛ばせないだろう。

だが、それでも視認出来ないと言う点は大きい。そしてそれに対する動作が一切無い事も大きい。

ただ相手を警戒し見据えている状態で攻撃を加えることが出来る、そこに通常の動作を含めることが出来る。

そうそう、こんな風に。

「ふん！」

「ぬわばあ！？」

呆けてたせいで思いつき殴られた。なんかもう乙女にあるまじき悲鳴上げちゃったよ。まんま世紀末なやられ役じゃないか。流石に顔面パンチはそれなりに効く。とはいえ地力が違いすぎるから、ブローリーがベジータの蹴り食らったとき程度のダメージしかないけど。

「はあっ」

間合いが近すぎるので、右の前腕部を左手で補佐して体当たりするようにして叩き付ける。ついでに相手の足を踏みつけ、腰を腰に当てて、尻尾を鞭のようにしならせて逆の腰も叩く。

そして、最後に左手の掌低を突き込んだ。元々はこれが本命、溜めをつくった寸頸。確か、八極拳だと暗頸だった気がするけど、中国拳法の使い手は大体、複数の流派を習ってるから問題ない。

と言うか、私は実践派だから名前ぐらいどうでもいい。

小さな動きだが、それは頸 威力の大きさには一致しない。特に私が用いる場合、寸頸は必殺技と言っているほどの威力を誇る。

「……キサマア！」

顔に脂汗と憤怒を浮かべながら、クウラは吹っ飛ばされる。ただでさえ鍛えに鍛えた一撃の鋭さは恐ろしいものだ。そこに加えられた膂力も尋常なものではない。

連続攻撃で各部にひびが入ったのは確実に、下手をすれば折れている。掌底のそれは間違いなく骨を折り、内臓（メタルクウラに内臓があるかどうかはともかく）を潰している。それでも尚、吹っ飛ばされたクウラ。その足、右足の薬指と小指が消えていた。私に踏み抜かれたまま吹っ飛ばされたせいで、引き裂かれたのだ。

「……無様なことで」

八ハツ、と甲高い声で嘲笑ってやる。

「猿如きが、このオレを見下すなっ！……ヤツ用に温存しておいたが、使ってやろう」

言いつつ、クウラの体が再生していく。それと同時に、クウラの周囲に姿を現しつつあるメタルクウラ×8。どうやら、ビックゲテスターは物質転送系の技術を有しているらしい。重量制限でもあるのか、部品部品で転送されてくるそれが瞬く間に構築されていく。

「……さあ、仕切り直しといこうか！」「……」
「うるさい！」

「くそっ、なんとという物量チート」

クウラと私の間にある差は歴然で、未だにその力量差は埋まらない。と言うよりは恐らく、クウラは既にこれ以上の戦闘力の増加が見込めないであろうところまでやってきている。

クウラは、一番初めに目にしたときはフリーザとほぼ同等の戦闘力だったが、今は超サイヤ人第二段階レベルの戦闘力を有している。だけど、それ以降の戦闘力の上昇は行われていない。いくらビッグゲテスターが優秀とはいえ機械である以上、構造的にも材質的にも限度が存在するということだろう。

まあ、そのレベルを量産出来るだけで普通に脅威なのだが。

今、私が相手にしているのは32体にも及ぶメタルクウラだ。

だが、一体倒す度に一体が追加されていき、まったく減る様子を見

せない。

現在の光景を簡単に言えば、ドラゴンボール無双。

大技を使おうとした隙の大きいやつを優先して叩いている為に、クウラはこちらに有効打を与えられないでいる。かと言ってちまちまとした打撃もなかなか当たらず、当たっても大したダメージにならないが。

「ああ、もう面倒くさい！」

右手に気弾を生成。それに警戒してかクウラ達の動きが止まるが好都合。

そして、それをトラップシューターとして展開した。

数千にも及ぶ弾幕がクウラたちに降り注いで破壊していく。再生するまでも無く破壊されていき、新しく生み出す端から壊されていく。私は練気弾のような芸当は出来ない。だから、威力と数で補う。

左手に生成した気弾は再びトラップシューターだ。

「吹き飛ばっ！」

そうして、メタルクウラ軍団は呆気無く壊滅した。

だが、メタルクウラ軍団が壊滅した瞬間、それが単なる時間稼ぎに過ぎないと言うことにようやく、気がついた。

「くつくつく、これでもう、貴様に勝ち目は無い」

目の前で笑うクウラはそう見えずとも、恐らく私と一番初めに対峙したクウラなのだろう。

その姿は、異形に変化しており、戦闘力も格段に増していた。

異形さで言えば、どこぞの研究所の化け物どもやフリーザ第三形態などとは比較にならない。

まずもって、下半身が四脚へと変化していた。いうなれば馬のそれ近い。だが、その四肢の先には馬にはあり得ない鋭利な鉤爪が存在する。尻尾は長く伸び、その先が三つに分かれている。

よく見ればその尾は先がぐるぐるとまわる螺旋模様を描いている。
男のロマン、ドリルだった。

上半身は倍以上に肥大化し、中心に宝玉のようなものが輝いている。腕は見た目こそそう変わらないが、肥大化した肉体から合計で四本ほど増えている。阿修羅か何かかという六本腕だ。

そしてその上半身から伸びる首は太く、長い。顔も大きく変化している。

クウラの面影こそあるが、額には三つ目の瞳が開き、口は大きく裂け、巨大な牙が覗く。そしてこめかみのあたりから角が大きく伸びていた。

「あつはつは、マジか」

目の前のクウラは、私としては戦いたくないレベルの化け物だ。今のサイヤパワー解放状態なら、どうにかなるかもしれないが、実際やってみないとわからないレベル。

クウラは弱かった。だが、それは人型に拘り、規格をクウラにあわせるから弱いのであって、形さえ、在り様さえ選ばないのなら、強くなれるのは当然の話だった。

「まずは貴様から血祭にあげてやる！」

「んん！」

ぎり、と奥歯を噛み締めて、振り下ろされた腕の受け止める。

まずは戦力分析だ。

結果として、馬鹿げている。打撃力では私以下だが、重量もあつてか、純粋な腕力では私と同等かそれ以上。今もクウラの両腕を自分の両腕でどうにか受け止めている状態だ。

「おぐつ！？」

そして、腹への拳を膝で迎撃し、そこにもう一本が潜り込んだ。

衝撃で胃の中のもの逆流し、思わず吐きかけた。幸いにも酸っぱい味とか胃酸のはじける香りはしない。あれ、これ血じゃね？

だが、分かった。これはまともに戦っちゃだめだ。少なくとも、私一人では。

「あん？」

逃げようとしたところで動けない事に気付く。そして、その両腕が掴まれていた事にも。ぎちぎちと拮抗し、次の瞬間には四肢が拘束されていた。動かそうとしても全くと言っていいほど動かない。

「……マジか」

何度殴られただろうか。繰り返されたのは単調で手加減された攻撃だがそれでも私を痛めつけるには十分だった。死んでいないのが不思議なほどの状態で、顔も腫れ上がり喋る事すら辛い。

回復は出来るだろうが、今したところで相手に楽しみを与えるだけだ。

と言うか、最近なんていうか、こう、私のヤムチャ（かませ）化がひどいと思うんだけどどうだろう。

「ふ、ははははっ、超サイヤ人と言ってもこの程度か！ 勝てる、勝てるぞ！」

高笑いをするクウラ。どうやら私の形態変化は超サイヤ人として認識したらしい。実際には別物だけど、今の私を倒せるってことは超サイヤ人ぐらい普通に倒せるレベルだ。原作でも普通に倒していたが、それ以上にあっさり倒せるだろう。

「……だ。」

「う……ん、が……わる……い、な」

途切れ途切れにまたその言葉を返してやる。本当に今日はお前にとって厄日だよ。

近づきつつある巨大な気には覚えが有る。それに気を探れないクウラは気づけない。とりあえず、この化け物の処理を任せても問題なさそうだ。

そう判断した私は、意識を断った。

078 | 高いところと爆散もお約束

「気円斬！」

その声に、クウラが気付いたと同時にその腕が寸断されていた。アニスとそれを捕えていた二本の腕が宙を舞う。

自身の腕が寸断されたことには頓着せず、その腕を基点に新しくメタルクウラを生成する。このまま落ちれば死ぬだろうが、死なない可能性もある。前回は見逃したことで死にかけた。もう甘い考えをするつもりは無い。

故に、今。きつちりと息の根を止める。

「はああっ！！！」

指先に展開される巨大な気が火球を模して。それを二つ合わせて、アニス目掛けて解き放った。

それが横合いから飛来した気弾に軌道を逸らされ、明後日の方向に着弾する。

「何っ!?!」

今のそれはクウラからすれば一撃必殺と言ってもいい技。

本来、姉妹 ギガンティック等の様な合体技は、互いに気の波長や強弱を合わせ、技の形を整えるなどの前提条件のもとに放たれるものだ。実力が同じ三人で放てば三倍になるという訳ではない。

せいぜい二倍程度だろう。

だが、メタルクウラは完全に同一の存在であり、合体技であつても気を合わせる必要も無い。そのまま二人であれば二倍、五人であれば五倍と言った風に技の威力を引き上げることが出来た。

それをクウラ最強の技、スーパーノヴァで実践したのだ。人数は少ない二人とは言え、生半可な威力ではない。それこそ、生きていた頃の自分の全力スーパーノヴァと同等以上。

それがたった一発の気弾に負けた。実際には横に流されて軌道

がずれただけなのだが、自身の技の絶対を信じ、なおかつ気を扱った技量を持たないクウラには到底思いつくことでは無かった。

「誰だっ！」

その気弾の飛んできた方向へ向き直りつつ、クウラは叫んだ。

警戒の表れとして寸断されていた両手が再構築されていく。

ビルの天辺に陣取って太陽を背負い、威風堂々ガイナ立ちする人影一つ。

「誰だと聞かれたら答えてあげるが世の情け……人、それをお約束と言う。キサマに名乗る名は無い！」

言って人影、シユラは地を蹴って宙に躍り出る。

「中々の気迫だが、たった一人でオレを倒せるつもりか？」

名乗れよと思いつつ笑う、クウラの周囲にメタルクウラが出現する。その数はおよそ百に達するだろうか。

「誰が俺一人だなんて言った？」

「あ？」

意地悪い笑みを浮かべたシユラの視線の先を辿ると、アリスを抱きかかえてニヒルに笑うピッコロとそれを庇うようにして構えるベジータと悟空がいた。

「孫……悟空！」

悟空の姿を見つけると、呆けていたその表情を怒りに変えるクウラ。

「キサマがオレを殺した日より、キサマの顔を忘れたことは無かったぞ！ 今度はオレが貴様を殺す番だ！！」

「悪いけど、おめえじゃオラを殺せねえ……諦めて元の星へ帰えれ」

「ふん、カカロットを倒すのはこの俺様だ。雑魚は引っ込んでいろ」

「いちいち癪に障る奴らめ！ ……全員、皆殺しだっ！」

その叫びと共にクウラを囲む様にして現れるメタルクウラの軍団。その数は優に五百に達するだろうか。

「……もっかい、向こうまで吹っ飛ばす！」

「今度は負けん！」

「頑張れよ、二人とも」

超サイヤ人化する悟空とベジータに激励の言葉を送って、ピッコロは戦線を離脱する。

それを追撃しようとした一部のメタルクウラが切断され、消滅し、爆散する。

「へへっ、今日の俺ってば大活躍」

言いながら宙を駆け、気円斬を連続で放ちつつメタルクウラ軍団の中へと切り込むクリリン。先程の気円斬の事を考えると本当に大活躍と言えるだろう。

「俺も負けていられないな、繰気弾！」

それらが逃した追撃組をヤムチャの繰気弾が撃墜する。繰気弾とはいっても相手に着弾すると同時に拘束する、と言う特性を持った新技だ。

「止めは任せろ、気功砲！」

そうして地面に叩き付けられたメタルクウラ軍団へと気功砲が襲い掛かり、その下の地面ごと吹き飛ばした。

気功砲は本来ならば生命力を削る大技だが、幾度となく修練を重ねたことで、天津飯はその弱点を緩和することに成功している。

今であれば余程の高威力、或いは何度も連続で撃たない限りは問題ない。

因みに、何故天津飯以外が気功砲を使えないのかと言うと、気功砲は根本的にかめはめ波やどどん波とは異なる体系の技であり、その鍛錬法が特殊であるからだ。見よう見まねでは使えるだろうが、それは気功砲の形を真似た何かでしかない。そんなのを使うぐらいならどどん波やかめはめ波の方が強い。

「天さん、少し卑怯？」

その気功砲の直撃を免れた個体にどどん波で止めを刺しつつ餃子が言う。天津飯はそれに正論で弁解する。

「いや、競うよりもあいつらの撃破を優先するべきじゃないのか？」

「……らあッ！」

飛び回し蹴りが叩き込まれ、メタルクウラが爆散する。吹っ飛んだメタルクウラに巻き込まれてさらに二体のメタルクウラが拉げて落ちる。

「せいっ！」

その反動を利用して別のメタルクウラに蹴りを叩き込む。それも爆砕し、そのまま地面に向かって落下していく。

その反動を利用して、後ろにバック宙してオーバーヘッドキック気味の一撃をメタルクウラに叩き込んだ。

シユラの戦い方は大きく変貌していた。悟空やベジータと鍛錬するうちに、アニスの様な型にはまったものから、ブロリーやリーフの様な自由なものに変わった。

だが、サイヤ人としての才に任せたブロリーやリーフのそれとは違い、シユラのそれは自由でありながらもその一撃一撃にはしつかりとした型が存在する。一番近い流派をあげるなら、形意拳（動物を模倣する拳法）と躰道（飛んだり跳ねたりするアクロバティックな拳法）の複合拳法と言った所だろうか。

「さ、次はどうだ？」

そうして体勢を立て直し、不敵に笑う。

「へえ、姉ちゃんも頑張ってるな……オラも負けてらんねえな！」
言いながらメタルクウラを投げ飛ばし、超化する悟空。そこに再びメタルクウラが殺到し、気の波動に吹き飛ばされた。

悟空の戦い方は原作のそれと大きく変わらない。だが、その強さは原作の比ではない。ベジータやフリーザ達との死闘を演じて

いないが、代わりにそれ以上に強く厳しい鍛錬で十分な実力を身に付けている。

「よいい、ドン！」

そして隊列を崩したメタルクウラを吹き飛ばしながら、クウラへと肉薄する。

「何っ！」

予想外のパワーを発揮する悟空に驚きながらそれを迎撃するクウラ。だが、六本の腕の打撃をいともたやすく弾き、いなして躲すとクウラの胴に蹴りを叩き込んだ。

「ぐうっ!？」

「んー？　なんか、思ってたよりてえしたことねえなー」

蹴りを喰らい、踏ん張りきれずに後退するクウラ。ア二スを倒したクウラを警戒し、いつも通りわくわくしていた悟空だが。実際のところ、変化したクウラは大して強くはない。悟空でも、楽にとはいかないが勝ち目が無いと言うレベルではない。

理由は単純だ。同じような腕を六本に増やしたところで無駄だ。その根本的な部分はクウラとしての規格を捨ててきていない。

やるならば腕の長さや太さ、関節の数や部分なども大きく変化させるべきだったのだ。

それがなされていないが故に腕のそれは可動範囲の限界から一つ一つ僅かにだがりーちに差が出来ており、更には可能な攻撃とそうで無い攻撃が明確に分かれていた。

見切れることは簡単だった。ついでに言えば、四脚となった事で普段通りの蹴りが打てないのも大きい。蹴りを警戒する必要がなくなっただ。

確かに強くはなったが、それを扱えないのでは意味が無い。そして、その弱点は当事者であるクウラに気づけるようなものではなく、故にビツクゲテスターにも気づけなかった。

「くっ、馬鹿な！　オレは力を手に入れた筈だ。　貴様らを殺し、

親父も殺すだけの力を！

オレが、宇宙一だ！」

空振りし、空気を引き裂く拳は確かに悟空を沈めるには十分な威力を秘めていたが、掠りもせずその懐へと入りこまれた。

だが、それはクウラにとって想定内の出来事。胸元の水晶体が光り輝き、そこから強力な気が吐き出され、悟空を呑みこんだ。

しかし、それも悟空にとっては想定内だ。似たような技、一見そう見えないところからの奇襲は今まで何度も受けてきた。

古くはブルー將軍のジェット噴射。最近ではシユラヤリーの様な非常に高度な虚実を交えた連撃など。気をバリアーの様に展開してそれを後方へ流す。その流れに引きずられるようにしてクウラの隠し玉はその大半を後方へと流された。

「な、にイ!？」

そして勢いのなくなつたそれを突き破つて、悟空の拳がその水晶玉に叩き込まれる。

「馬鹿、な……」

小さくそう呟いて、クウラは爆散した。

079 | メタルクウラVSベジータ

「……この、ちょこまかしやがって」

ベジータは思いの外メタルクウラに苦戦していた。悟空と比べるとベジータは小柄だが、パワーやスピードでは勝っている。それが軽く蹴散らしたはずのメタルクウラに苦戦するのには原因があった。

技量の問題ではない。確かにそれは悟空に負けているが、それでもメタルクウラに負けてしまうほどではない。

原因は前回の敗戦と、アニスにある。

ベジータは原作とは違い、フリーザと戦っておらず、その圧倒的な戦闘力に叩きのめされ、それを吹っ切ると言うイベントをこなしていない。故に部下であった頃、じわじわと刷り込まれた恐怖が抜けきっておらず、そこをクウラにたたき折られた。

今のベジータはフリーザが、そしてそれに酷似したメタルクウラが怖くて仕方がない。それでも下級戦士が戦っていると言う事実を奮起されて、負けたままでいられるかと言う意地だけで戦っている。だが、恐怖に体が委縮して思うように動けないでいた。

躊躇いのある攻撃を見切ることが難しくない。そして無駄な動きを続けるうちにベジータの恐怖心は薄れつつあったが、今度は疲労が蓄積しつつあった。

だが、他のメタルクウラが多数悟空に吹き飛ばされるのを見て、メタルクウラはベジータに対する警戒を強めて、ベジータはその恐怖を払拭した。

以前の二人には隔絶とした差が存在したが、今では同格だ。

奴に出来てオレに出来ないはずが無い。

負けられない。負けたくない。

「そろそろ決着をつけようか」

「同感だ……はあああ！」

気を高め、突っ込むベジータ。その勢いにのまれて動くことを忘れるメタルクウラ。しかし、動けたとしてはたして間に合っただろうか。

そんなどうでもいいことを考えながら、ベジータの拳に頭部を粉砕された。

「…………ふん、案外やれるものじゃないか」

080 | メタルクウラVSクリリン

殴り掛かってきたクウラの拳を受け流し、飛び込むようにしてその顔面に拳を叩き付ける。

その勢いのままにさらに一步踏み込み、膝を顔面に蹴り込んだ。

「ぐ……」

呻きながらたたたらを踏むクウラ。そこに追撃のかめはめ波が叩き込まれる。

クウラはそれを直前で腕をクロスさせて防ぐ、が体制が整っていないせいで吹っ飛ばされて、そこに更に追撃の蹴り。

気のしつかり込められた一撃はクウラの頭部を砕いて。

その消滅を見届けて、クリリンは小さく安堵の息を吐いて、その場を飛び退った。

そこを通り過ぎ、地面にめり込む鋼鉄の拳。 ゆっくりと体勢を元に戻し、笑うメタルクウラ。

「おいおい、またかよ…… かんべんしてくれよな」

言って苦笑するクリリンの顔目掛けてメタルクウラの拳が迫る。それをクリリンは踏み込みながらの掌底で弾いた。 余りの衝撃にメタルクウラの手首は折れ、それに数瞬の隙を見せたそこを狙ってそのまま追撃の拳が水月に叩き込まれる。

それなりに効いたが、堪えてそ反撃の尻尾。クリリンはそれをしやがんで避けると同時に足払い。

「何っ!？」

尻尾を使ったせいでバランスを整える事も、強制的に立ち直る事も出来ずに地面に倒れるメタルクウラ。 しゃがんだ体勢から跳躍したクリリンがそのまま勢いに乗せて、気を込めて集中した拳を再び鳩尾に沈めた。

そしてそのまま気を解放し、メタルクウラは爆散する。

「へへ、俺ってば結構強い？」

一度は、悟空において行かれた。元々は好敵手だった筈なのに、別に構わないと言えば構わない。悟空はサイヤ人で才能が有つて、自分は地球人で才能が無くて。

そして悟空は熱意があり、自分にはそれが無かった。

もともと、女の子にモテる為に始めた武術だ。多林寺の先輩を見返したい気持ちが無かったとは言わないが。

だけど、今の自分はどうか。師匠に女の子が加わったから、という訳でも……まあ、理由の一端にはあるだろうが、厳しい修業を耐え抜いて、悟空とベジータと同等に戦えるまでに成長している。嬉しい。強くなった自分が。悟空とまた肩を並べて戦えるのが。

最強を目指すつもりも無いし、別にこれ以上強くなる気もない。

「でもまあ、もう少しだけ武道家……続けてみようか」

メタルクウラを吹き飛ばす悟空を見ながら、そう小さく呟いた。

081 | メタルクウラVSヤムチャ

「狼牙風風拳！」

目にも止まらない連撃がメタルクウラを打ち据える。だが、その連撃を喰らって尚、メタルクウラはわずかに後退しただけでダメージらしいダメージは見当たらない。

「……流石に、これじゃ駄目か」

それを見て自嘲気味に呟くヤムチャ。

「その程度のパワーでオレを倒せると思っていたのか？」

ヤムチャはその体格に似合わず、スピードタイプの戦士として成長していた。

実際、特訓を重ねることでパワーもテクニックも非常に鍛えられてはいたが、パワーでは天津飯に負けて、テクニックではクリリンに劣る。

ヤムチャよりもパワーとスピードで劣るクリリンが実質一撃で粉砕したメタルクウラを倒せないのはひとえに気の集中が甘い為だ。

しかし、そのヤムチャのスピードの前に一切の防御と反撃が出来なかったメタルクウラにその程度のパワーと擲擄されて、少し力チンときた。

「仕方がない……切り札を切るか」

構えていた拳を、足を開いて、重心を落として構えなおす。

コオオオと音を立てながら息を吐く。方法とリズム、呼吸法そのものまでも変化させ、それでようやく構えとなった。

「それが、切り札？ 何が変わったと言っただ」

武術を、気の扱いを知らないメタルクウラにはその変化が理解できないでいた。

だが、それは劇的とも言える変化だ。

「今すぐわかるさ……」

言ってヤムチャはメタルクウラとの間合いを詰め、その腕を振っ

た。

避けるまでも無い、そう判断したメタルクウラの両腕が宙を舞う。

「な、に？」

「はっ！」

その驚愕の一瞬に叩き込まれた蹴り。先程と同程度のパワーだが、虚を突かれたせいで踏ん張る事も出来ず吹き飛ぶ。

両腕を再生しつつ、くるりと空中で回転して体勢を立て直すところにも迫るヤムチャ。

「狼牙拳！」

咄嗟に両腕をクロスさせて防御するメタルクウラ。しかしその甲斐なく、そのまま引き裂かれた。

賽の目の様にばらばらに切り裂かれ、そのまま霞のように消え去る。

狼牙拳。ヤムチャが習得した新技であり、戦法でもある。拳とついでこそいるが、その正体は異常なまでに鍛え上げられた指先による打撃。既に斬撃と言っている域に達してはいるが。指先と言う一点に絞り気を収束させることで拙い技術ながらも、類を見ない威力を発揮するに至っている。

それは名前のとおり、紛れも無く獲物を噛み切り、喰らう狼の牙の様だった。

「やっぱり、成長を実感すると違うな……なんていうか達成感がヤムチャは元盗賊だ。だが、悪人という訳ではない。」

小さい頃の悟空に対して、真正面から正々堂々と戦いを挑んだ通り、盗賊である前に（我流ではあるが）武闘家でもあった。

その誇りも腕っぷしへの自信だってあった。

それを砕かれたのは悟空と出会って以降だ。二度、少年の頃の悟空と戦ったが一敗一分と勝ち星なし。

ジャッキー・チュンこと亀仙人には触れる事さえできずに負け、闘う干物ミイラくんにも、まるで歯が立たず、天津飯や神には惨敗

した。

自分が認めた強者には敵う事なく、名前も覚えていない様な雑魚や透明人間のスケさんの様な卑怯な相手にしか勝利した事が無い。

悔しくないかと言われれば、答えは否。

悔しくて努力しても、その差は開く一方で。

だけど今は、違う。悟空や天津飯と修練を積み互角の戦いが出来るまでにその差を縮めている。

だから、いつかいい。また、悟空や天津飯と本気で戦いたい。勝ちたい。一度でいいから自分の認めた相手に全力を出させ、全力で立ち向かって、勝つてみたい。

「そう、だから今はテメエら如き鎧袖一触にしないと……なあ」
メタルクウラを吹き飛ばす悟空を見ながら、自身を困むメタルクウラを威圧する。

「さあ、何処からでもかかってきやがれ！」

082 | メタルクウラVS天津飯

「ふん！」

力強い拳がメタルクウラを吹き飛ばし、その体勢を立て直す前に二体のメタルクウラがそれを受け止める。

「思ったほどではないな……まあ、今の一撃を耐え切れるとは思わなかったが」

メタルクウラの頑強さに感心する天津飯。最近、悟空やベジータと互角に戦えるようになってからアニスやリーフ達の規格外さにしつかりと気付けるようになり、感覚が麻痺していた。

そのアニスを倒したのだからさぞかし化け物に違いないと思えば固くて多いだけだった。

パワーはそれなりにあるが、スピードは大した事が無い。アニスがやられた理由はよく分からないが数に押されたか上手く体が動かなかった、というだけだろう。

受け止めたりするなら兎も角、避けることに集中していればどうと言う事も無い。

「……ふざけるなっ！」

余裕の表情を崩さない天津飯に接近するメタルクウラ。それを支えていた二体も追従する。

「射線上、クリアだな」

「何？」

接近しながら怪訝そうに聞き返したメタルクウラへの返答は、気功砲だった。

先程地面に向けて放った一撃とは違い、威力を弱めていないその一撃はメタルクウラを呑みこみ、その先にいた十数に及ぶメタルクウラを消滅させた。

「死ねえっ！」

「奇襲で声を上げてどうする」

言いながら、後方より飛びかかってくるメタルクウラに蹴りを叩き込む。その一撃でメタルクウラは拉げて別のメタルクウラを巻き込んでそのまま地面に落ちる。

「くそつたれがあ！」

その天津飯を危険人物と認定したメタルクウラが天津飯を包囲する。気功砲を警戒し、層は薄いが抜け出すのは難しいだろう。

「全員でかかれ！」

だが、メタルクウラは気功砲を恐れる余りに接近戦を挑んでしまった。全員で一齐に。それが最大の悪手だった。

「四身の拳……太陽拳！」

四体に分かれた天津飯が背中合わせに構え、その額から光を放ち、それをまともに喰らったメタルクウラ達は視界を潰された。そして、そこに気功砲がもう一度さく裂する。

戦闘力を四分の一に分けてはいるが、元々の実力に差がありすぎる。メタルクウラを消滅させて有り余る威力だ。

四方にばらまかれた破壊の光は、メタルクウラのごく一部の部品などを残してすべてを吹き飛ばしていた。

「さて、オレの周りにいたのは粗方片付いたか」

メタルクウラは弱くは無い。だが、天津飯は、メタルクウラにとって相性が悪すぎた。

気功砲と言う強力で溜めの殆ど無い範囲攻撃を行ってくる固定砲台。メタルクウラを呆気なく壊すそれを避けるだけの機動力をメタルクウラはもっていなかった。

スーパードヴァも溜めは短い、気功砲程では無く迎撃には使えなかった。

そして、天津飯も早いとは言いが、固定砲台はその身をひるがえすだけでいいのだ。横に飛んだり牛とに飛んだりするメタルクウラとどちらが早いかなど言うまでもないだろう。

「……クリリンも、ヤムチャもつまくやってるようだな……餃子
は、どっだらっな？」

083 | メタルクウラVS餃子

「くそ、ちよこまかと鬱陶しい！」

風を切って唸る腕が、脚が空を切る。その結果にうなりながらメタルクウラは眼前の敵を睨みつけた。

悠々と空を飛び、攻撃を避けるのは餃子。

「ボク、お前なんかには負けない」

餃子は元々の体躯が非常に小さい。戦闘力も地球組四人の中では一番低い。パワーは当然のことながら、スピードもヤムチャに一步劣る。テクニクでもクリリンに劣る。

だが、餃子はそれでも彼らと同等の実力を有している。

「クソガキがあ！」

叫びながら、殴り掛かるメタルクウラの攻撃を易々と回避する。

紙一重で、しかし確実にあたらないように。

「お返し、どどん波！」

餃子はクリリンとは違い自身の小柄な体躯を補うのではなく、長所として生かすことで彼らと同等の実力を手に入れた。餃子が伸ばしたそれは回避能力であり、相手の攻撃を察知する能力だ。

「当たれえ！」

「嫌だ」

しかし、実力が同等の者相手なら兎も角、格上に通用する程に熟練している訳ではないが。

メタルクウラの体術はそれを使うほど鋭くも速くも無かったが、その頑丈さは餃子にとっては厄介なものだった。

拳も蹴りもメタルクウラに大したダメージを与えられない。どどん波であればダメージを与えられるが、再生能力を有するメタルクウラ相手にはしっかりと急所を狙わないと範囲が狭すぎて致命的なダメージは与えられない。

かめはめ波や気功砲は使えない。かめはめ波であれば真似は出来るが、メタルクウラにダメージを与えられるかと言われると怪しいものがある。

だからこそ、餃子はその技を使う事にした。多少反則気味だが、これは試合でも組手でもない。殺し合いだ。

両手を眼前に翳して、金縛りでメタルクウラの動きを完全に拘束する。

「き、さま……この程度おお！」

メタルクウラは超能力で破ろうとするが、全く揺らがない。一応は切り札の一つだ。早々簡単に破られても困る。

「スーパ……」

その間に気を練り上げ、集中。そして、それを爆発させた。

「頭突き！」

両手を前に突出し、金縛りをかけたまま、高速で回転しながら弾丸のように加速する。

当たる前に、金縛りを解除。その瞬間にベクトル増加の方向性へと超能力を使用。さらに加速してメタルクウラに突っ込んだ。

「貴様のようなガキに……」

一撃でその胸を貫かれ、メタルクウラはそう呟いて爆散する。

「ガキじゃない、餃子だ」

餃子はそう言い捨てて次のメタルクウラへと構えた。

084 | 伝説の再臨

「……ブロリーは先へ、仙豆を落とさないで」

「分かっている」

私達は、アニス姉を助ける為にカリン塔へ行っていた。行きは瞬間移動でどうとでもなったけれど、帰りにアニス姉の気を探ってみても余程弱っているのか、それとも何か他に原因があるのか、見当たらない。似たような気は幾つかあるけれど、シユラやリュカのもの。

私もブロリーも戦闘一辺倒だ。最大索敵範囲は3000km程度だけど精密索敵範囲に絞るとなると1km以下に落ち込んでしまう。だからこうして舞空術で地道にアニス姉を探している。

それを邪魔するのが、目の前のメタルクウラ共。ざっと数えて200近いそれが私達を囲んでいる。

「邪魔をするな、ぶち殺すぞ」

私の言葉に笑みを浮かべるメタルクウラ共。今の私はメタルクウラに負けはしないが同等程度の戦闘力しかない。技術には大きく差があるけれど、目の前の軍団に勝てるとは思わない。

気を高め、それを解放し、超サイヤ人化する。それにメタルクウラ達は警戒し、ブロリーからその注意がそれる。

その瞬間に離脱するブロリーを見送って。

更に気を高める。

高める。

高めて、高めて、高めて。

「……伝説、誕生」

私は、伝説の超サイヤ人化する。白目にはならず、筋肉も特に増えてはいない。けれど内燃機関が大きく変貌したらしく私の中で暴れ狂う力。ぐるぐるとまわり、めぐる。尽くを破壊し、総

てを斃せと心が叫ぶ。　かつてないほど高まる力、破壊欲求、闘争本能。　心が乾く。　渴きを癒せと渴望する。　それらを全て、抑え込んで、私はいつも通り構える。

この形態になって初めてわかるブローリーのチートさ。　まず、永遠なんじゃないかと思えるほどに内燃機関から供給され続ける気。　そして、気の集束効率が半端じゃなく上昇している。　今までは少し時間をかけたのが、少し集中して集束させるだけで出来るようになった。

因みに、気を溜めずにどれだけ強く放出できるか、気をどれだけ早く集中できるかは戦闘力の強さとは関係ない。　戦闘力20000の奴が瞬間的に2000しか気を出せなかったり、戦闘力10000の奴が瞬間的に10000の気を放出する事が出来たりする。

当然、気の瞬発力が強い方が戦闘では有利。　瞬発力が高まれば高まるほど、技の威力は上昇し、威力は同じでも同時に溜める為の時間は短縮されるからだ。　この瞬発力を鍛えなければ、いつまでたっても技の威力は変わらないままだ。　まあ、とはいつても基本的に戦闘力に応じてその瞬発力も上がっていくのだけ。　それでもそれもそれを重点的に修めたのと、戦闘力を上げることに終始した場合、は大きく異なってくる。

全くもって負ける気がしない。　けれども目の前のそいつらはアニス姉を倒した。　ターレスの時の様に消耗していた訳でもなく、真正面から。　別にアニス姉が強靱、無敵、最強！　と言う心算も無いけれど、少なくとも私やブローリーでは及びもつかない領域にいるのは確かだ。

たったあれだけの、超サイヤ人級の戦闘力でリゼみたいな化け物と十数秒戦い続けられ、私やブローリー相手にほぼ互角の戦いが出来るのだ。

前世の影響か、時折油断する上、戦闘へのスイッチを切り替えるのが遅いけれど、その戦闘能力は馬鹿げて高い。

本人は全く自覚してないけど。

それを下したこいつら相手に警戒するのは当たり前の話。

だから、私は容赦しない。

「弾けて、混ざれ……」

眼前にパワーボールを発生させる。ただし、悟空やベジータ、ブロリーに変身されると困るので、その場で1700万ゼノのブルーツ波に指向性を持たせて私に照射する。

私の中に眠る大猿が起き上がり、そのまま私を変異させる。上半身を黒い体毛が覆い、目のふちには赤いアイシャドウが引かれる。本当の本当に全力で。

「行く」

その変身が終わると同時、私は空を蹴り、メタルクウラへと肉薄する。

闘争本能と今まで体に刻み込んできた経験が導くままにその身を、委ねる。

踏み込んで上段突き。メタルクウラの頭部を粉碎し、そこに迫るメタルクウラの蹴りをしゃがんで回避し、立ち上がり様に突き込むような蹴りを。

その蹴りの反動を利用して、逆方向へと加速。迎撃の蹴りを片手で掴み受けて、握撃の様に潰し、振り回す。ジャイアントスイングの様に一回転させて、そのまま別のメタルクウラに投げつけた。それを受け止めたメタルクウラは反射的にそれを見下ろして、そこに飛び膝蹴り。その勢いを殺さないまま、その先にいたメタルクウラへと逆足で踵落としを叩き込む。

「面倒」

それでも数が減らないメタルクウラ。 数えてみるとむしろ増えている。

「……一掃する」

両手からエネルギー波をブレードの様に伸ばして固定。 そのまま回転する。 ローリングバスターライフルによく似た光景。

メタルクウラを呑みこんで、一瞬で蒸発させていく。 伝説化した私の気の瞬発力だから出来る芸当であって普通の私じゃあどうしようもない技だ。

回転を止めると、回るとは予想外だったらしいメタルクウラの殆どが巻き込まれて、消滅していた。

残りのそれを軽く気弾で吹き飛ばしつつ、私はアニス姉の搜索を続けるのだった。

「姉……んっ！ え……さん！」

「ん、ブ……………を持……………きて……………ん……………」

黒く遠い意識の向こうで誰かが叫んでる。何かを言っている。

分からない。聞こえない。

その声を起点にして意識が浮上し始める。 ゆっくりと、ゆったりと。

叫びが、声がだんだんハッキリと聞こえ始める。 けれどまだそ

れは不明瞭だ。

「こ……………食べ……………ば、姉……………元……………るんだ……………」

「間……………ない」

「姉さん、これ食べて、元気になって」

「馬鹿！ よせ！」

そんな声とともに私の中に押し込まれるそれ。 少し懐かしいような思いと共に甘いような苦いようなそれを転がして。

「そう……………飲み込んで……………出来ないなら俺が……………」

言われるままにそれを飲み下し。

そこで意識が覚醒した。

なんて、ことを。

「……………全く、だからよせと言ったのに」

言っつて、やれやれと肩をすくめるのはピッコロさん。 どうやら彼が助けてくれたらしい。 その仕事ぶりは流石と言っつほかないだろう。 きつとあのBGMが流れたに違いない。

「プロリーの馬鹿……………」

「ご、ごめんなさい……姉さん」

泣きそうな顔になりながら謝るブロリー。いつもなら特にいう事も無く許すんだらう。誰だって失敗はある事だし。そう言うには背が高すぎるような気はするけど、可愛い弟のやる事だ。いちいち目くじら立てたりはしない。

普通なら。

見れば直ぐに分かるだらう。

ポッコリ、ポッコリと膨らんだ私のお腹。まるで妊婦か何かの様に膨らんだそれは仙豆の多量摂取によるものだ。

まあ、早い話。仙豆を驚掴みにしたヤジロベエみたいな状態になっている。女として、許容出来る絵面じゃない。そしてそれ以上に問題なのが。

「……動き難い」

よくよく軍人とか武人系のキャラが満腹になると動きづらくなるとか言ってるけど、そんなレベルじゃない。

もしかして私フュージョン失敗してベクウ（劇場版に出てきた悟空とベジータのフュージョン失敗体、ふとましい。でもジャネンパ相手に30分は持った辺り、パワーアップはしてる。ギャグ補正とも言つから倒せないと思うけど）にでもなったんじゃないかと思っほどに動きづらい。

今は足の指の力で地面に踏ん張って耐えてるけど、下手に気とか力抜くと倒れそう。

起きたら、メタルクウラにリベンジしてこようと思ってたけど、今度はもう一撃喰らったら確実に吐くね。今でもヒロイン（笑）だけでも、泥酔系ヒロインとか目にならない感じで。

「でも、まあ。私の為に仙豆を持ってきてくれたんでしょ？」

ありがとうね、ブロリー」

「……姉さん……」

頂垂れていたその頭を撫でて、笑ってあげる。それだけでブロ

リーは少し、元気になった。泣き顔もかわいいいつちゃかわいいけど、笑ってた方が可愛いと思う。

「……でも、どうしようか。このままだと戦えないし……ブローリー。先にリーフとか悟空のところに戻っておいて？」

「……分かった」

負い目があるのか、いつもなら少しは駄々をこねそうなのに、素直に従う。

因みに、ブローリーは原作通りに悟空に泣かされた経験があるけど、私がかカロットと悟空は別人だと説明すると普通に信じてくれたので恨んではないし、暴走もしない。今では結構、友達っぽい関係を築いてます。まだちょっとぎくしゃくしてるけど。

ついでに言うと、ナメック星で戦ったターレスが実はかカロットなんじゃないかと言う事も信じてくれた。

愛しの義弟を騙すのは少し、心が痛むけど。

ターレスになすりつけるのは特に痛まないからいいよね！

「行ってらっしゃい」

飛び立っていくブローリーを見送って、私は小さく息を吐いた。

086 「合体しようぜ」

「でさ、ピッコロくん……このでっぷりと太ったお腹を早急に元に戻す方法は無いかね？」

「……吐けばいいんじゃないか？」

「……うら若き乙女に、そんなことをさせる心算か貴様」

乙女心の分からない奴め。 いやまあ、ナメック星人にしかも元魔王にそんなことを理解できるとは思わないけども。

「ところで、この前言っておいたこと、考えてくれたかな？」

「……神と合体しろ、と言っていたな。 何度でも言うぞ……お断りだ」

そう吐き捨てるピッコロ。 どうやらネイルとの合体がなんか嫌だったらしい。 原作以上に合体することに嫌悪感を見せている。

「分かった。 これ以上は言わない……けど、心に留めてはおい
て」

「ふん」

ピッコロ、ひいてはピッコロ大魔王と神様は才能の塊だ。 ナメック星人の中でも群を抜いているといつていい。 ピッコロ大魔王は普通の龍族に過ぎなかったが、魔族を自在に生み出し、自身を世界の理より外して転生させると言う芸当をあの一瞬でやってのけた。 それはその身に宿る莫大な魔力あってこそでもあるのだけだ。

神様は、言うまでもない。 戦闘力 気の殆どは保持したままだが、大魔王に魔力を6割近く持っていかれながらも、ドラゴンボールに対する魔力供給が一切揺らいでいないのは天才の証左。 因みに戦闘力を計測すると2388と言う数値が出た。

そりゃ、大魔王（戦闘力推定300前後）に勝ち目ないわ。 原作であそこまで強気になれるのも当然の話。 ピッコロと戦った時

にも自分が死なないのであれば瞬殺できたに違いない。

そして、大魔王が本能的にした事なのだろう。自身を戦士族に生まれ変わらせたのは。戦士族となったピッコロの成長は著しく、幼年期の三歳の頃でさえ、大魔王時代を軽く凌いでいる。

それから五年の歳月が経ち、ラディッツや私達が襲撃したころ、それでも急激な戦闘力の上昇がみられなかったのは単純に限界に達していたからだ。故に技を開発し、練るしかなかった。

ナメツク星人の戦士族は、多くの気を持つが、魔力は殆ど存在しない。龍族は多くの魔力と才能を持つが、気をほとんど持たない。だが、龍族から戦士族に転化したピッコロはその莫大な魔力を気へと変換させる必要があった。実際そう言った変換現象は珍しくないが、内燃機関の安定しない時代にそんなことが出来る筈も無い。当然ながら、内燃機関が安定しない以上、気に関しても容量を増やす事は難しい。

殆ど、ピッコロに与えられたのはピッコロ大魔王の気と技だけ。そこに自身の肉体を鍛え上げて、あそこまでの能力をものにしたのだ。

そうしてラディッツを下して、更に肉体と内燃機関を鍛え上げ。襲来したサイヤ人と戦ったピッコロ。その後、それから一カ月間に自身の魔力を練り上げて、本当に戦士型として覚醒したのはその時だろう。

そして、ネイルと合体し、その戦闘力を大きく引き上げて、それからも鍛錬を続けている。成長期を迎え、その戦闘力は超サイヤ人級を大きく超えて、界王拳を使えばもっと引き上げられる。それでも彼はまだ強くなれる。

神と合体すれば、その効率も上がるんだけど。

そんなことを提案したのには、当然理由がある。

別に強制するつもりも無いけど、これは重要な事でもある。ピッコロが主体になって合体することで、ドラゴンボールに送られる魔力が激減する。

そうなってしまうえば、恐らくは赤いドラゴンボールに私が干渉できる。よく知らないけど、GTで世界を破滅させかけたんだとか。そんなことを引き起こす前に、処分してしまおうと思っているのだ。

神に頼むのは無理。ピッコロと融合しても、今のピッコロでは魔力が足りず、かと言ってそのまま処分しようとしても神が分離する前にかけて封印が強すぎて、神自身にもどうしようもないので、破戒すべき的なアレとか、封印の自然消滅に頼るしかない。

かと言って、ピッコロや神様が死んじゃうとそれだけで蓄積された魔力が暴走しかねないので、せめてパスが繋がっている必要がある。

パスさえ通っていれば、魔力が逆流はしても、暴走しての力の顕現はない。

あの手この手で合体させようとしてきたけど、セルが来るまで待つなんて博打はしたくない。例え、この世界以外から来るにしても、他のどんな世界から来るかなんて想像もつかない。

ピッコロや神様が死んでしまえば、それで恐らくは終わり。そうで無くても、私が望むハッピーエンドへの道は絶たれるだろう。ナメック星の最長老はもういない。ドラゴンボールを作れるのは既に神様だけ。生き返らせるのは不可能。

。U/T C U/T ˆ 804

086 | 合体しようぜ（後書き）

原作でピッコロが界王星へ行つて、ナメツク星に行つて物凄く成長した理由を猫なりに捏造してみた。

長々と書いたけど、原作でもこの作品でも成長期に入ったからつて一文で済む話だよ。

XX話「お知らせ、と言うか身勝手な話」

おはこんばんちわ、長靴を脱いだ猫です。

今回はそれなりに大事なお話があります。出来れば最後まで目を通してください。

2011年内の復帰を目処にし、またそれを謳っていた猫の二次創作作品、お気楽転生ライフ。

今回、まことに身勝手ながら、永久凍結させていただくこととなりました。

(お知らせを除き)削除の予定はありませんが、これ以降に本編を更新する予定はありません。

理由としては様々なのですが、主に完結の見通しが立たないためです。あとは、ギャグ作品としてどうだろうということもあります。

元々、ノリと勢いで書こうと言う事で、推敲やプロットの作成を自主的に禁じていた為に自業自得ではあるのですが、猫の実力ではどうしようもなく、こうして最後の手段に出てしまいました。

という訳なので、申し訳ないのですが来年からは新連載を始めさせて頂きます。

予定では仮題【お気楽転生ライフ：改】です。その名前の通り、お気楽転生ライフを新しく書き直す予定です。

つきましては新連載に関してアンケートを行いたいと思います。

以下から、どれか一つを選んでください。

? お気楽転生ライフの展開をなぞって書き直すべき。

? お気楽転生ライフの展開をなぞらずに書き直すべき。

? お気楽転生ライフなんて読みたくない。 新しく一次創作を書くべき。

? お気楽転生ライフなんて読みたくない。 新しく二次創作を書くべき。

? ノクターンでエロいやつ書いて。

? それより、ブログの方はどうなった?

? その他

選択肢は以上の七つです。

尚、 の続投、一部の展開のみそのままにしてくれ、一人称視点より三人称視点で、等の詳細な要望がある場合は、それも記入して下さい。

感想として書いてくださっても結構ですし、活動報告コメントの方へと書いてくださっても構いません。

期間は2011/12/28 2011/12/31までの四日間となっています。

どうか、ご協力お願いいたします。

尚、このお知らせ後、メタルクウラ編を何事も無かったかのように更新予定ですが、それはこのアンケートを埋もれさせない為でもありますので、12/31を超えた場合、それ以降は更新されません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6162r/>

お気楽転生ライフ

2011年12月28日00時46分発行